
銀行員の恋

深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀行員の恋

【Nコード】

N4373C

【作者名】

深夜

【あらすじ】

銀行員の田原聡は、思い描いた銀行員生活があまりにも現実とかけ離れている事に思い悩む。そんなある日出逢ったみどりとの物語。

序章

辞令

田原 聡

あんしん銀行大町支店 得意先係 を命ずる

そして3年の月日が過ぎていった、

法人担当の渉外係だった25歳の夏。

営業用のバイクにまたがりながらヘルメット越しに見える風景は、夏色を感じることなく、全てが鉛色に見えるのだ。

「なんで銀行員になってしまったのだろう・・・」

そう思つては、ため息ばかりが出てきて

「俺って銀行員向いてない・・・」

結論はそこに行き着く。

思い描いていた銀行員生活と現実との間には大きな壁が存在していた。

その事は、まったくの予想外であり、耐え難い苦痛の連続であつた・・・

ろくに決算書も読めず、経営指導も出来ない自分が、多くの担当顧客達の運命を握っているという重圧とそれからの逃避でも、少なくとも自信の無さを相手に気取らせず、不安にさせないことが

自分に出来る唯一の仕事である事は知っていた。

だから、『銀行員』という『仮面』を被る事だけは未だに忘れてはいない。

その日も、そんな憂鬱な一日でしか過ぎなかったはずなのに、運命的な出逢いが待っていていようとは全く想像してなかった。思えば、その日が僕の分岐点であり、出発点だった。

鈴木建設株式会社。

土木工事を主体として、産廃・設備・物流とグループ化した事業を展開している。

売上高、財務内容は申し分無く、間違いなく当地でのトップ企業であり、

当行の優良取引先のひとつである。

その関連企業で水道設備を手がける鈴木設備株式会社で、ちょっとした事件が起こった。

1ヶ月ほど前、経理担当の女性が現金を持ち逃げし行方不明となつたんだ。

当然、警察沙汰なのかと思っていたけど、公共工事入札に支障が出る不安からか、

内々に事は進められたようだった。

先輩いわく、この手の話は、銀行員やってるとそう珍しくは無い事なのだそうだ。

「大人の世界がここにもあるなあ・・・」

運命の日2日前、支店長のところに来客があった。

鈴木建設と鈴木設備の両社長達だ。

例の事件後から不在になっている経理担当者の後任を探しているが、適当な人材がないとの話を上司から聞いていた。

グループ企業ではあるが、なかなか人材の融通は難しいらしい。

もつとも、水道設備の従業員は20名程なのだが、経理担当は1人で全てを

任されていたそうなので、全般に仕事がこなせる代わりの人なんて、そう簡単には見つからない。

銀行には適当な人の紹介依頼で来たのだろうと、そう思っただけでそれ以上の詮索はしなかったのだけど・・・

「田原君、ちよつと・・・」

支店長が応接室から手招きするのだ。

これが運命の召集令状となる。

「田原君、あさってから鈴木設備の資金繰みてやって」

応接室では支店長と両社長が座っている。

聞けば、経理担当者の件では、経験豊富な人材を確保するより、若く期待の持てる人材を育成する方針にしたいとの意向である。

その為、新人を採用するが、全く経理経験が無く軌道に乗るまで

鈴木設備のサポートをお願いしたいとの申し出であった。

鈴木建設からも1人、ベテラン経理を派遣するとの事であるが、主に労務管理の担当の様で・・・

資金面の指導は、全面的に任せたいとの事。

・・・できません。

銀行員は数字に万能だとは全くの誤解である。

当然ながら僕にそんな能力は無いのだ。

「うちの若手では一番数字に強いんですよ」

支店長が力強く両社長に力説する。

「頑張ります！」

これが営業スマイルなのだと仮面の下で泣いている。

・・・両社長の会心の笑顔を、罪悪感と抱き合わせて今も忘れられ

ない。

そして運命の日。

「はじめまして、あんしん銀行の田原です」

週3日ほどのスケジュールで鈴木設備への訪問が始まった。

初日は、鈴木建設から派遣されたベテラン経理の安田さんと朝礼に参加してご挨拶。

歳は四十半ばの安田さんは、経理担当というより、
はんば飯場のおばちゃんといった感じだ。

ベテラン経理といっても資金繰りは全くと言っていいほど知識が無い。

鈴木建設では、主に現場の後方事務が主体であり、やはり銀行に支援を求めなくてはならない現実に思いやられるスタートだったんだ。

そんなこんなで午前中いっぱい帳簿等の確認と、支払い関係の打ち合わせが続いた。

今日唯一の救いが、お昼休みであることは間違いないと確信しているときに

その瞬間が来た。

「ごめんください・・・」

事務所の扉が開き、そして僕の時間が止まった。

「今日から経理担当として働いてもらう、青山みどりさんだ。」

見知らぬ女性と一緒に事務所に現れた社長から紹介を受ける。それから一言二言説明を受けるが全く頭に入らなかった。

『一目惚れ』

つてのは、絶対にありえない事だと思っていた。
まさかそれが今自分の前で起こるなんて、
銀行の壁より予想外な事だった。

歳は18歳。

この春高校を卒業したばかりの少女でした。
どこか涼しげで少女とも大人ともいえる顔立ちに
その時は、まさか未成年だとは思っても見なかった。

そしてここから僕とみどりの物語が始まるんだ。

突然の恋

「おいおい、聞いてるの？」

社長の一言に我に返り銀行員の仮面を被る。

これは相手を心配させないほかに、自己防衛の手段でもある。

「とりあえず、皆でなんとか頑張りましょう」

冷静を装う仮面とは裏腹に、突然現れた「青山みどり」の存在に心の中はあわただしい。

この日を境に、あれ程までに重苦しかった銀行員生活が、嘘のように晴れやかなものに变化していったんだ。

そして鈴木設備への訪問は、週3回のスケジュール通りに回数を重ねる事となっていた。

さすが若いだけあって、仕事の飲み込みの速さには脱帽だった。2ヶ月程度で、建設業会計の基本的な部分は大抵理解できるようになり、

資金繰りもまだまだ不安は残るものの、流れ的には把握できるまでになったんだ。

こんな優秀な子が、なんで進学しなかったのだろう？

高校卒業してからの数ヶ月間は何をやっていたんだろう？

いろんな疑問や質問が頭の中で生まれ出てるんだけど、

おばさん經理こと安田さんの視線が、それ以上の行動を許さないのでした。

同じくして、銀行員、田原聡も劇的に成長していったんだ。

なにせ彼女の前で、恥ずかしい思いは出来ないわけで……

必死に財務・税務・建設業会計の予習勉強を始めたのでした。

銀行員の礎はやっと固まり始めたんだ。

そんな初秋のある日の訪問で・・・

「あれ？みどりさん居ないんですか？」

事務所の扉を開けて、最初にすることが、彼女の笑顔を確認する事。ゆえに、自分にとって彼女の不在は、なによりもシツコクな事なのでした。

安田さんに聞けば、今日は建設業会計の試験日で終日留守になるのだとか・・・

その話を聞いている間、僕はうかつにも銀行員の仮面をはずしてしまった。

とてもがっかりした表情を浮かべてしまったのだ。

「銀行さん・・・」（ニヤッ）

思わせぶりな呼びかけに、思わず動揺してしまう。

「あなた、みどりちゃんに惚れてるでしょ・・・」

・・・なんともストレートなもの言い方。

あなた、デリカシーと言う言葉を知ってますか？

「うつ・・・」

言葉につまる。

「銀行さん」（ニヤニヤッ）

・・・すでに仮面は消失している。

「隠す事は無いよ、こっちは40年以上女やっているんだから、色恋沙汰は大先輩さ。」

まあ、こう毎日のようにあなた達と一緒にいるんだから嫌でも分かっちゃうわよ・・・

あなた、悪い人じゃなさそうだから、協力してあげようと思ってさ。

「

協力？脅迫じゃないのだろうかと心配する……
さすがに年の功と言うべきか。いやいや、それよりも安田さんが分かるくらいなのだから

彼女自身もその事に気付いているのだろうか。
急に不安は拡大する。

「心配する事無いわよ。」

目は口ほどにものを言う常態の私にとって、心境を悟られるのは当たり前か。

でも、心配するなと言うのは絶対に無理なわけで……

「みどりちゃんもあなたの事を好きなんだからさあ……」

「……うそお」（気絶）

明日、彼女に気持ちを聞いてあげるといふ安田さんに、
何も言えずにお願いしてしまう弱い私。

帰り際、安田さんの顔が何故か天使に見えてくるのでした。

そして次の訪問日、足取りはとても重かったんだ。

勢いでお願ひしてみたものの、その根拠はまったくあてに出来なかったわけで……

もしダメならば、気まずい雰囲気の中で仕事をしていかななくてはならないわけで……

普段なら、簡単に想像できる事なんだろうけど、恋は盲目であることを痛感してしまう。

「とんでも無い事しちゃったのかなあ……」

今日の扉はとても重い。

そして事務所の扉を開けた瞬間、答えは無情にも分かってしまった。安田さんが、うつむいたまま顔を合わせない。

「おはようございます!」

彼女の元気な声だけが凍りつく空気に吸い込まれる。

「・・・・・・・・・・撃沈?」

安田さんはまったく顔を上げない。

ふらふらと自分の椅子に座り込むと、お茶を入れてくれる彼女。

「あのお・・・・・・・・」

その先のセリフは聞きたくない!と竦みあがる私。

「お金借りたいんですけど・・・・・・・・」

その言葉は意外なものでした。

ひと呼吸於いておいて、「ああ、どんな資金が必要なんだい?」

銀行員の仮面を被りなおし、セールストークに徹する。

安田さんは彼女にどこまで話をしたのだろうか?

ストレートに伝えられているのなら、こんな話はしてこないだろう。

相変わらず視線を合わせようとしない安田さん。

銀行は、未成年者に融資することは出来ません。

彼女が20歳未満だという事は、この時知っていました。

だから、彼女に融資できない事は理解していたのだけれども、この場を取り繕うには、話を聞くことしか出来ないのです。

「なんでお金が必要なの?」

そのことについては言葉を濁す彼女。

返済方法とかその他については積極的なのに何故だろう。

「言わなくちゃだめなんですよね・・・・・・・・」

まあ、そうなんだけど。

カードローンやフリーローンのように使い道が自由なものもあるけ

ど金利は高い。

実際、銀行の商品であっても10%超えはめずらしくない。

それに比べて、使い道（使途）のはっきりしているローンは金利は安い。

例えば、家を建てるとか、車を買うとか、結婚するとか、教育資金とか・・・

なんて説明をしたら、

「よかったぁ！」

と、満面の笑みを浮かべる。

「？」・・・なにがよかったんだろっ。

車でも買うのだろうっか。

そう考えていた時、突然安田さんが目を見開いてこちらを凝視する。まちがいなくテレパシーを発している。

自分はそのな能力持ち合わせてはいないけど、その時だけはわかったんだ。

「それ以上聞くんじゃないよ！！！！！！！！！！」

それ以外無かつたんだ。

『私、結婚するんです！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

失恋も突然

凍りつく私。

真っ白になる私。

崩れていく私。。。。

・・・・・・仮面を被らなくては。

連続する目眩にも似た感覚に、遠ざかる意識を必死に繋ぎとめる。
ふと安田さんを見ると、合掌しながら頭を下げている。

「安田さんのせいじゃないよ・・・・」
心でささやく。

そして、悲しむ暇も無く仕事だ。結局、顧客からの相談業務なわけ
で・・・・

結婚資金は確かに金利が低いけれども、

未成年者にはローンが契約できない事と、相手が成人であればそちらに頼むか、

または、両親と相談して借主となってもらう等、ありきたりのアド
バイスをして

この物語は完結するはずであつたんだ。

今でも誰が見てもそう感じただろうと確信している。

その後、鈴木設備には1ヶ月間週3回のほづもんが続いたわけで・・
・・

安田さんも、もといた親会社である鈴木建設に戻る事になり、
僕も月2回程度の訪問で管理できるまで彼女は成長していったんだ。
安田さんがいなくなっただけからは、プライベートな会話を遮る障害が
なくなり

短期間で、いろんな彼女の情報を知り得る事になった。

彼女は小学校時代に両親を亡くし、施設で生活していた事。

結婚する相手は、施設時代の同じ年の人だという事。

高校卒業後は、3ヶ月間同施設でボランティアに従事していた事。

高校時代は特待生で学費免除を受けるレベルであった事。

大学進学は全く考えていなかった事。

そして、早く母親になり、家庭を築きたかった事……

1年後。

ローン等のマイナスのスタートはしないほうがいいとのアドバイスにより、

結婚式は挙げずに入籍だけで新生活を始めた彼女。

姓が変わり、住所が変わり、彼女のなかに新しい命が宿ることになったのは、

自然な事なのでした。

僕は、失恋の痛手はあったものの、彼女が幸せになれるのならば、一生懸命応援したいと思っていたんだ。

10代の結婚は、世間では珍しいものではないのだけれども、お金にまつわる人生の裏側を、普通の人よりも多く目にしているせいか、

彼女は結婚するに、あまりにも幼すぎるように思えた。

衝撃的な出逢いは、一方通行ではあったけれども、

間違いなく銀行員、田原聡を変えるものだった。

単純な理由であるけれども、彼女の前では誇れる銀行員であり続けたい。

だから、それに恥じることなく銀行員として成長していく事が、彼女を好きになった愛の証であると思っっている。

この1年間に、取れる資格はすべて挑戦したんだ。FP1級をはじめ

め、財務・税務等々、
銀行員ならば聞き覚えのあるこの手の試験は全部クリアしたけど、
本当に銀行員に
必要なのは、「資格」ではなく顧客からの「信頼」なんだということ
とは理解している。

おなかも大分おおきくなってきた頃、彼女の産休にあたり、
鈴木建設の安田さんが再登板ということが決まった。
ゆえに産休期間中は、またも資金繰りを手伝うことになったんだけ
ど……

また、安田さんと一緒に仕事するのか。
………複雑だ。

そんなことが決まって数日もしないある日の早朝。
1人暮らしの僕の朝は、新聞を読みながら紅茶を飲むことから始ま
るんだ。

銀行に入ってからコーヒーは大嫌いになった。
得意先を訪問すると、さすがに日に何杯ものコーヒーを出されると
自宅では飲みたいとは思わない。
だから、その日も紅茶とトーストをかじりながら、地方紙の新聞を
読む。

何気なしに目を通した記事に、とんでも無いものを見つけてしまっ
たんだ。

【窃盗容疑で山川秀樹（20）を逮捕】

「あっ！！！」

一瞬ではあるが、時間は間違いなく止まった。
見覚えのある名前は、彼女の夫のものなのだから。

夫が高校には進学しないで、就労の道を選んだのはお互いに恵まれない環境の中で、ともに運命を共有するため、一刻も早く社会に出たい思いからだと彼女から聞いていたんだ。聞く限りでは、ひたすら真面目で罪を犯す人間であるとは考えられなかった。

驚愕の次は、不安でいっぱいになる。

彼女は身重の体であり、頼る身内はいないのだから。

そして銀行に出勤するや否や、鈴木建設の社長から呼び出しの電話が入る。

内容は聞くまでも無く「山川みどり」の件だった。

電話が来た時点で、新聞の記事が彼女の夫に間違いないことは明白であり、

銀行員の自分が呼び出された事で、事件はお金が絡んでいる事も予想された。

鈴木建設、鈴木設備の社長たちから説明を受け分かった事は、盗みに入った先の住人に取り押さえられたとの事。

そして、以前にも窃盗で逮捕・補導されている過去があった事。そのことを山川みどりは知らなかった事。

車から余罪があると思われる物証が多数出てきた事。

そして、昨夜から山川みどりが入院している事……

運命は残酷です。

恵まれた家庭に生まれつく事が出来なかった彼女が、幸せな家庭を築きたいという夢は、けして実現できないほど高望みな事ではないはずなのに……

あと数ヶ月で生まれてくる子供を考えるならば、悲しみは余計に膨らみます。

両社長からは、身寄りの無い彼女に対して、責任を持って対処したいとの申し出があり、そのことが唯一の支えであった。

入院は、精神的不安から切迫早産の可能性があるとの事で、母子ともに急を要する事ではないようだが、不安はぬぐえない。そして、資金繰り支援の前倒しと、銀行から弁護士を紹介してほしい旨依頼される。

離婚する方向で対応するのだろうかと思はつた。

不幸な生い立ちの同情だけではなく、経理担当者としての資質を評価しているから

支援したいと言ってくれた両社長に、感謝している。

こんな事があり、予定より1ヶ月も早く出産となつたんだ。

母子家庭になるという事で、いままでの住居から公営のアパートへ引越させたんだ。

僕には、いかにお金をかけず生活する術をアドバイスする事くらいしか

出来ないわけで……

お金を渡す事は簡単なものだけれども、彼女がそんなものを受け取らない事は分かってんだ。

実際、引越しや出産にかかる費用は、両社長が負担を申し出たのに、会社からの給与前払いという事で納得させてるんだ。

出産後、4ヶ月で仕事に復帰した彼女。

離婚調停は協議済みであったが、姓は「山川」のままである。

経理の安田さんも4月から正式に転籍する事が決まり、

彼女の負担も軽減される事になつたんだ。

こうして再スタートしたかに見えた僕の銀行員生活でしたが、彼女の復帰初日、突然の人事異動が発表され、人生初めての転勤と

なっていました。

銀行員に転勤は宿命です。でも、何故このタイミングなんだ？
不満が顔に出たからでしょう、上司から一言。

「人事とは『ひとごと』なんだ・・・」

個別の事情を反映させれば組織は機能しなくなる・・・
そんな事は分かってるんだけど、突然の彼女との別れだけは、
予期していなかった。

そして、辞令に従うしか、銀行に残る道は無かったんだ。

友達以上、恋人未満

辞令

田原 聡

あんしん銀行湯葉沢支店 融資担当 を命ずる

いろんな思いを置き去りにしてきたまま、僕は町支店を後にした。湯葉沢支店は、大町支店から車で2時間のところにある、人口10万人の湯葉沢市にある。あんしん銀行では、母店クラスの大店だった。

独身者の転居費用は、全額が銀行負担してくれるものの、必ずワンルームであり、そのアパートの所在は希望できない。

取引先の顧客所有の物件を借り上げしなくてはいけないからだ。

今回僕の住まいとなったアパートもオーナーは当行取引先だった。まだ建築年数も浅く、清潔感のあるアパートであり、それまでの古くくたびれた感じの

アパートとはまったく環境は違っている。

銀行が用意したアパートでは当たり前物件なのは間違いなかったのだが、

いくらアパートが快適であっても、心が晴れる事はなかったんだ。

そして未開封のダンボール箱に囲まれながら、湯葉沢支店での銀行員生活が始まった。

着任後の1週間なんてのは瞬く間に過ぎていく。

気がつけば金曜日であり、週末には本格的に生活の準備をしなくては……

と、さらに気分が重くなった銀行からの帰り道、見覚えの無い番号表示で

携帯電話がなったんだ。

「あの・・・山川みどりです・・・」

当然ながら、彼女の携帯番号なんて知るわけも無い。思いがけない人からの電話に、言い表せないほどの嬉しさと、言い表せないくらい不安が頭の中を駆け巡った気がする。

「もうすこしで自宅に帰るからかけ直すよ・・・」

先方の事情を考えれば、こちらからの通話料負担したい訳で・・・正直言つと、こちらからかけるのならば、少しでも長く声が聞けるかもしれない

期待もあった訳で・・・

一呼吸ついたところでかけ直した電話は1時間以上続いたのでした。

それからの僕と彼女のメールと電話は毎日のように続いた。

仕事でしか逢う事が無かった僕にとって、

彼女からの電話はまったく予期していなかったんだ。

ずっと不安であつたろう彼女が、一番に僕を頼ってくれた事は、嬉しい事である。

出逢ったあの日から、ずっと力になれる日を望んでいたのだから。

銀行員の仮面を被っている限り、そんな事はないと思つていたし、

誇れる銀行員にはまだまだ到達していない事も事実なのだから。

その後2年間、彼女、「みどり」と僕は理解を深めていく事になったんだ。

でも、いわゆる「恋人」になるまでにはいかなかった。

友達以上、恋人未満つてのが二人の関係でした。

それ以上の関係に進展できない理由が、みどりの幼い子供の存在でした。

大抵二人が逢えるのは、週末の夜、子供が寝静まってから。

起きている時間、僕と頻繁に逢うと、子供が父親と認識してしまうのでは……

と考えてのことからでした。

僕としては、父親になってもいい……って真剣に考えていたのだけれど、

彼女が父親に対して、少なからず抵抗を感じている事に気がついていたんだ。

だから、子供と3人で出かける事も、みどりと2人でデートする事も無く、

食事をしながら明け方まで話し込んで、子供が起きる前に帰っちゃう……

そんな関係が2年近くも続いたのです。

父親になってもいいなんて事は、もう大分前から考えてたんだ。

離婚暦があるとか、子供との血縁とか、全く関係ないと思ってる。

みどりが一線を越えたくない理由は、間違いなく心に傷を負っている為である。

彼女に対して、ただ見守る事しか出来ない自分に時折腹が立つ。

ちよっと前まで、異性と付き合うつて事は、心と体の関係が一緒にやなきゃ、

付き合っている事にはならないと思ってた。

でも今は、こんな恋愛もあつていいんじゃないかと

ささやかながらも幸せを感じていたんだ。

転勤で、二人の距離は間違いなく離れたのだけれども心の距離は縮まった訳で……

まず、それを感謝していれば、子供と心の問題は時間が解決してくれるだろう……

そう信じながら少しでも時間は進む事になる。

そして、
またも突然がやってきたんだ。

再びの突然

「信じられない！」

その日も、いつもの僕とみどりの週末になるはずであったが、みどりのアパートのドアを開けた瞬間、悲鳴にも似た言葉で出迎えられたんだ。

子供を寝かしつける都合から、仕事が終わった後の連絡はメールが主であった。

だから、その日のみどりの声を聞いたのは初めてであり、その言葉により、僕が歓迎されていないことは明白だった。

しかし、怒鳴られるような事をした覚えはまったく無いのだ。

「まあ、ちよつと落ち着いて・・・」

とにかく、興奮状態のみどりをなだめる事にした次の瞬間、
「女の人を泣かせたでしょ！！」

今度は絶叫される。

大声を吐き出したからか、徐々に落ち着きをみせるみどり。

この後、昨晩みどりのアパートで起こった、本当に信じられない事実を

聞かされることになるんだ。

昨夜、午後１１時頃、アパートのチャイムが鳴り、訪問者があった事。

こんな時刻にと不審に思ったため、取り合わなかったら外から怒鳴り声が聞こえた事。

その怒鳴り声は女性であり、山川みどりが自分の彼氏を寝取った旨を叫び出した事。

そして、その彼氏の名前が「田原聡」だったという事・・・

子供も寝ているし、近所にも迷惑がかかる。

公営住宅には、この手のトラブルは多いらしいのだけれど、あまりにも真実味あふれる女性の態度と「田原聡」という名前が出た事で、

ドアを開けて静かに話をするという条件付で部屋に招きいれたらしい。

「なんて馬鹿な事したんだ！

変質者なら殺されてたんだぞ！！」

心配する気持ちがいつぱいとなり、まずこんな言葉が出たんだ。

でも、みどりは機嫌が悪いこと以外、外傷とかは無い様だが……

「んで、どうなの！！」

「……………はっ？」

まったく身に覚えが無い。

あまりに急激な展開に、会話が出てこない。

「田原違いじゃ……………」

見た事も無い目つきで睨まれる。

さらに、部屋に謎の女を招き入れた後の戦慄の内容が語られる。

前にいた、あんしん銀行大町支店の名をあげて、田原聡と交際していた事。

妊娠した事を告げると、連絡が取れなくなって転勤してしまった事中絶しろと連絡があり、従った事を電話にて確認後、携帯電話の番号が変えられた事。

転勤先を探していたところ、山川みどりと交際している事を知り押しかけた事。

田原聡から身を引いて、返してほしいと懇願された事。

そして、その日は相手の携帯電話の番号を聞いてお引取り願った事。

「そんな馬鹿な！」

今度は僕が絶叫する。

まったくの事実無根の話だ。言いがかりなのである。

相手が言うのは自分のことで間違いはないだろう。

でも、名刺が一人歩きして名前を騙られる事は、十分考えられる訳で……

その事については、自信があるからどうでもいいんだけど、

問題なのは、みどりが半分くらいその事を信じてしまっているという事だ。

よく、上司から現場を見ろって言われる。

実際現場では、決算書や試算表だけでは分からない事も見える場合がある。

みどりは昨夜、修羅場の現場にいたわけだから、少なからず相手の真実性を

感じ取ったんだろうな。だから、信頼していた分だけ、落胆は大きくなるんだ。

とにかく僕はやましい事などした事は無い。けれど釈明は朝方まで続いたのでした。

「謎の女ってどんな人だったの？」

年齢は24〜27位。背丈はみどりと同じくらいというから、150中程だろう。

服装などは、かなり若い感じがしたとの事。

でも、肝心の顔立ちは、相手が終始泣いていた為、なかなか特徴が伝わってこない。

ますます分からなくなっていく。

結局、みどりの疑念を完全に払拭することは出来ないまま家路に着くことになった。

20代半ばかあ。もしかして・・・

みどり以前に交際していた人は何人かいたんだ。

その中で該当しそうな人は1人だけだった。

でも昨年結婚したって聞いていたから謎の女とは符合しないと思っていたけど。

とりあえず確認のため電話をする事にした。

「もしもし田原ですが・・・」

元力ノに4年ぶりの電話はさすがに嫌だ。

でも、そうは言ってられない状況にある。

「あっー！ひつさしぶり 元気い！！」

・・・あいにく元気はまったく無い。

「あのさ、最近変わったことなんて無かった？」

「なに突然？」

・・・当然の質問です。

「そーいえば、実家のお母さんから、私が実家にいるかとか、わけのわかんない電話が

きたって言ってたけど、それが『さとし』がどーのこーのって言う内容だったわ・・・」

・・・これって本件とは関係あるのだろうか？不安は増していくんだ。

「『さとし』って聞いててもまさかあなたの事だとは思ってもみなかったから

連絡しなかったけど、相手は女の人だったって言ってたよ。なんかやばい事になってんの？」

・・・凶星です。

結局、彼女から得られた情報は、実家に変な電話が来たことくらいで、

謎の女との接点は見出せなかったんだ。

でも、間違いなく謎の女いわく「田原聡」は自分の事であり、なにかしら繋がっていると確信できたんだ。

この事件以降、みどりの携帯電話が繋がらなくなりました。

当然ながら身に覚えの無い話のせいで、

ささやかな恋が終わってしまうのは納得できません。

だから、3年ぶりに勤務先である鈴木設備に電話をしてみたんだ。

「はい、鈴木設備でございます。」

聞き覚えのある豪快な声は、安田さんだ。

声色を変えて喋ってみる。

「山川さんいらっしゃいますか？」

「あら田原さん、お久しぶり！」

「……おばさん、なぜ分かるんだあ。」

「一昨日から、みどりちゃん体調崩したとかで休んでるわよ、

田原さ〜ん、ふふっ。」

「……いつか殺す。」

顧客に殺意をもった初めての瞬間でした。

そして、その日も携帯のコールに反応はありません。

とにかくアパートに向かうしかないと思い、銀行が終わったあと車を走らせた。

みどりの部屋の明かりがついている事で、とりあえず安堵はしたんだけど、

・ 子供が寝ている時間だから、チャイムは押したくなかった訳で……

でも、ドアをノックするのには勇気がなかなか出てこなくて……
ためらいの後、結局ノックしたものの、反応は無かったんだ。

どうしたら良いものかと、隣接する公園のベンチで頭を抱えている
と、

携帯に見知らぬ番号からのコールがはいる。

出てみると、それは衝撃的な人からの電話なのでした。

「はじめまして、山川秀樹と申します。」

みどりの元夫からの電話だった。

「……………」

僕にとつて、ある意味一番逢いたくない人からの電話だ。
それにしても、なんで俺の携帯番号知っているんだろう。

ほんの一瞬、頭の中を不安がよぎるんだ。

「はい、なんでしょうか。」

言葉に出来ない感覚で、研ぎ澄まされる自分を感じていた。

かつての仮面を被り強がるだけの銀行員だった僕が、

素のままで対処できるだけの自信が今はあるんだ。

この4年間、みどりを守るための努力は無駄ではなかったんだ。

僕の思い

「突然すいません、少しお時間いただけないでしょうか……」

懇切丁寧な電話の内容に少し面食らう。

一番逢いたくない相手ではあるけれども、

逢いたいと願われて、断る理由にはならなかった。

それに、このタイミングでの電話は、今回のみどりの件と、なにかしらの接点があると感じていたからなんだ。

そして、指定された近くのアミレスで待つこと数分、みどりの元夫、山川秀樹氏は僕の前に現れた。

「いつも山川みどりがお世話になっております……」

……この男が窃盗をしたのか？

銀行員のアンテナは作動しなかった。

銀行員をやっていると、この人は大丈夫そうだとか、この人は信用におけないとか、

会話もしないで感じ取る能力が身についていく。

僕の場合、霊感が強いというか、難しい表現になるけれども、かなりの確率で、その人の「信用」具合が分かっちゃうんだ。

例えば、ローン申込の場合、信用照会しなくても、残債額が分かっていたりとか、

申告内容に相違が無いかどうかとか……

これを、僕は「銀行員のアンテナ」って呼んでいる。

もっとも精度が上がってきたのは、銀行員としての自信と比例してなんだけれども。

山川秀樹氏の場合、マイナスに感じるような印象は、ほとんど無か

った。

だから、これからの会話は、ある程度の信憑性が高くなることを予見できた。

「例の女性問題の件なんですけど……」

話は核心部分から始まったんだ。

山川秀樹氏との話し合いは2時間ほど続いた。

信憑性を感じながらも、彼に対しては、警戒に値するわけで……重苦しく、ひとつひとつの言葉を精査していきながらの会話には、時間が必要となる。

山川秀樹氏から語られた件は、おおよそ次の通りだった。

謎の女性の件以来、みどりが大分精神的に辛くなっている事。

女性が記した携帯電話の番号に連絡して、名前と住所が判明した事。

そして、2ヶ月前から彼がみどりと子供と一緒に暮らしている事……

……

今にしてみれば衝撃的な告白だと思うが、

何故か僕は冷静だった。

それだけ、山川秀樹氏の話が的確だったからだろう。

週末、僕がみどりのアパートを訪れていたのは、夜の間だけだった。山川秀樹氏は、工場の夜間勤務で、その時間は留守になっていたとの事。

そして、毎日のように電話している時も傍らで聞いていたのだという。

正確には、電話が来た時は、会話が聞こえないよう遠慮してほかの部屋に行ったり、

外に出たりして気を遣ってくれていたようだ。

山川秀樹氏いわく、今の自分は『夫』ではなく『居候』であるとの

事。

だから、僕に対しては感謝こそすれ恨みは全く無いのだという。

心優しいみどりの事だ。行き場の無い元夫を見つけてしまったら、自分の住処に、身を寄せさせてしまう事は想像ができた。なによりも、夫とみど리には存在して、

僕とみどりには存在していなかった子供という絆が、二人を繋ぎとめたかったのかもしれない。

でも、これでみどりの悩める原因が分かりました。

トラブルの元になった女性問題の件と、

元夫を同居させてしまう事で、僕とみどりの関係に葛藤した結果、極めて情緒不安定な立場に追いやられてしまっていたのだ。

山川秀樹氏は、情緒不安定になったみどりを守ろうとする事と、世話になった僕へのお礼という事で、件の女性にアプローチしていたのが

現況だった。尚、事件当日は仕事で出かけていたため、現場は見ていないとの事。

「どうしますか？」

まず、心当たりの無い先方が何者なのか知る必要がある。

その名前も聞いてはみたが、それでもまったく記憶には無い。

しかしそれ以上に、僕とみどりと元夫の「三角関係」のような状態を何とかしなければ。

当然ながら、いままで僕とみどりはプラトニックな関係であった訳で……

同居後のみどりと元夫も同じような状態のようで、

察するに元夫としても、復縁したいものの、

そう言える立場にないと自覚しているみたいだ。

「みどりと二人で話したい。」

それが僕の返事でした。

「わかりました。もったもな事です。」

山川秀樹氏はそう言うのと、携帯電話を取り出し、みどりに連絡を取ってくれた。

「子供をみるのを交代したら、ここに来るように伝えました。」

深々と頭を下げて立ち去る元夫。

・・・・・・「元」なのかなあ。

みどりがやってくるまでの長い長い30分は、永遠のように感じていたんだ。

でも、席に座ったみどりの口から出た最初の言葉が永遠の時間を打ち砕いた。

「裏切ったようでゴメン・・・・・・」

この言葉は聞きたくなかった。

その一言で、この恋の物語は完結してしまうんじゃないかって、体の底から湧き上がる感情は、いまでも心に焼き付いているんだ。そして、長い沈黙が続いてしまう。

「僕は、みどりが幸せであることが最善だと思うんだ・・・・・・」

そう話しかけて、ようやくまともにみどりの顔を見る事ができた。

泣きはらした顔が痛々しさが、愛らしくもあった。

みどりは真剣に悩んでくれた。

だから僕も真剣に思いを伝えようと心に決めたんだ。

「山川さんと逢って、正直悪い人じゃないと思ったよ・・・・・・」

でも、みどりを幸せにしてくれるかどうか考えた。

これまでみどりが苦しんだ事を考えれば、復縁しろなんて言える

訳が無い。

だから……頼むから、俺の願いを聞いてくれ……」

今考えられる限りの、みどりへの思いを伝えたんだ。

「僕と結婚してくれ！」

ラストオーダー

1分以上の沈黙が続いた。

僕にとつて、今日ほど時間の感覚が狂う日は無かった。

うしろの席にいた大学生風のおねえちゃん達がなにやら感づいたらしく、

黄色い声で「きゃーきゃー」騒ぎだす始末。

そして、やっとみどりが口を開いたんだ。

「嬉しい……」

その一言で、僕は了解が得られるものと確信した。
舞い上がる気持ちを抑えて、次の言葉を待つ。

「……」

あれ、それだけ？

結局それ以上の言葉を聞く事が出来ないまま、

ラストオーダーとなつてしまったんだ。

子供の事も心配だから、すぐアパートに帰宅させる。

山川秀樹氏がもしみどりが田原さんを選ぶときは、

すぐにでも目の前から消えるなんて言われたけど……

そんな事は、とてもみどりには伝えられなかった。

そして、また月曜日がやってきた。

銀行員になつて、何回目の月曜日だろうか。

日曜日の夜から始まる『月曜日の憂鬱』。

サラリーマンなら誰もが経験していることだろう。

僕の場合、今回の憂鬱は金曜の夜から続いているんだ。
寝不足と不安から体調不良で業務がスタートした。

融資担当の僕は、一日中上司の視線を感じながら机に座ってなくちゃいけない。

だからこんな日は、得意先係や融資渉外係の方が羨ましく思えるんだ。

上司の視線を受けての時間はやけに長い。

今日は、早く帰ろう……

その日は、定時とともに帰宅する事にする。

「あら、今日は早いわねえ」

どこにでもお局さんはいるもんです。

大木代理はベテランの事務担当。

今年、ついに独身のまま、『不惑』を迎えそうな湯葉沢支店の生き字引だ。

「ちよつと体調悪くて……」

そそくさと逃げるようにその場を去ろうとする。

「うふっ、デートかしら」

「……拳を握り締める。」

逃げ出したいのは、プライベートでも同じなんだけれどな。

銀行を出たら出たで、憂鬱になる。

まったくの悪循環だな……って自分自身に呆れてしまうんだ。

アパートに帰ると、そんな僕を待っていたかのように、

1通の手紙が、ポストに寄り添っていた。

その見覚えのある、整えられた字はみどりのものだった。

田原様

プロポーズありがとう。とても嬉しかった。

嬉しくて嬉しくて、今すぐにあなたの胸に飛び込みたかった。でも、それは出来ない事なのです。

何故なら、決して私があるために相応しくない女だと理解しているからです。

田原さんは優しいから、私にどんな障害があっても受け止めてくれる事でしょう。

結婚するという事は、田原さんと私だけではなく、あなたの家族や職場の人達が、

どう受け止めてくれるかも大切な事なのです。

田原さんのお父さんと、田原家のご家族の事を考えるのなら、私の存在は絶対に重荷となるでしょう。

だから、ありがとうと伝える事は出来ても、受け入れる事は出来ないのです。

私は田原さんのことを愛しています。

世界中の誰よりも田原さんの事を愛しています。

だから、この手紙は最初で最後のラブレター。

好きだよ、田原さん。

愛しています。

でも、さようなら……

山川との復縁は考えていません。

ただし、子供が望むのであれば、

一緒に暮らしていく事を許したいと思っています。

子供には、私達のような思いはさせたくないから。

子供が自分自身で山川のした事を理解し、判断できるまで、

このまま生活するチャンスを与えたいと考えています。

P S 風の便りで田原さんが素敵な彼女と結婚したって

聞ける日が来る事を心から望んでいます

みどり

・・・なんで、親父の事を知っているんだ！

一番の泣き所を指摘され、只々呆然とする。

僕の父は、代議士。つまり、国会議員なんだよなあ。

でも僕は次男坊で、大学時代に親父との壮絶な取っ組み合いを経てからは、

勘当の身となっている。筋金入りの馬鹿息子である。

それから学費や仕送りも全く受けなかったし、銀行に入行したのも自分の意思からだった。

それに、銀行でこのことを知っているのは僅かな人で、

銀行関係者からこの話はまずリークされない自信がある。

みどりの勤務している大町市は、親父の選挙区ではない。

だから、親父はみどりにとって、関係のない存在でしかないはずなんだ。

確かに、離婚暦とか異性間のトラブルは選挙では泣き所です。

怪文書などの格好の餌食となる訳だ。

代議士本人でなくても、その家族にスキャンダラスな事があっても同様なわけで・・・

僕は、政治は世襲制ではないと思っている。

当然、政治の世界に身を投じる事は考えた事も無い。

それに、自分自身はその器ではないと自覚もしている。

「みどりの気遣いは無用なんだ・・・」

みどりの優しさが、胸に熱く、痛かった。

愛の別名

ふられたのだろうか？

これで終わっちゃうのだろうか？

答えの出ぬまま、数日が経過したある日、2通目の手紙が届く。

差出人 山川秀樹

女性の件でご報告いたします。

本名、住所をお伝えしておりますが、もう少し素性が分かりましたので

ご報告いたします。私の同級生に、興信所に勤務しているものがあります、

当該女性の件を相談したところ、当地では有名人である事がわかりました。

いわゆるマル精（統合失調症）患者で入院履歴があり、

各方面より苦情が絶えない方ようです。

ある意味、たちの悪い相手であると言わざるを得ません。

くれぐれも、ご用心くださいますようお願いいたします。

興信所の友人への相談は、小さな子供に危害の懸念があるため相談した事であり、

田原様への疑念等ではない事を、ご理解いただきたいと存じます。

山川 秀樹

正直、教えられた携帯電話によく連絡できたなと思った。

でも、彼なりに子供を守ろうとした結果なんだろうと

今は素直に理解できるんだ。

手紙の中には、興信所の話のエビデンスだろうか、

相談相手と思われる興信所担当の名刺が同封されていた。

子供もそうだが、みどりだって危険にさらされた。
謎の女の言ってる事は、まったくのでたらめだ。
僕の事は自分自身が一番良く分かるわけで……
僕の事を悪く言うのは勝手だが、みどり達への危害は絶対に許せない。
みどり達の生活の安全は、やはりなんとか手を打たなければ。
警察沙汰も実質的な被害が出ていないと難しいらしい。
……興信所かあ。

名刺を手取る。

そして、興信所からの手紙が届く。

結局、それしか考え付かなかったことは情けない。

そして、この安易な選択は、後々火種になる事はまだ知る由も無い。
調査報告書は予想外に早いものだった。

田原様

精神病通院入院履歴があるが本件との因果関係は不明。

本人と当方2名との面接の上、以下の通り聞き取りをする。

・田原様とは大町支店の融資窓口にて多重債務の相談をした際面識を持つ。

・融資申込は拒絶だったが、既往借入の返済アドバイスを受けた事で、

異常とも思われる愛情を持つようになったと思料。

・田原氏の情報は、興信所等リサーチ機関にて情報収集。

・精神不安定と思われる時間帯に交際相手と思われる山川みどり様宅訪問。

今後、山川様・田原様への関与をしないとの誓約書を締結。

覚えていない……

ローンの相談なんて日常茶飯事なんだ。

融資商品によっては、応諾するより謝絶する方が多い場合もあるし、謝絶して記録も残らない顧客なんて、はたして何人いたことやら。多重債務者へのアドバイスはコンプライアンス上問題があるから、詳細は言えないんだけど、年齢の若い多重債務者にはなるべく時間を割いて

話を聞いたほうだと思う。

若い人達は、安易な資金繰りを選ぶ人が多いんだ。だから、そんな人達を導いてあげたかったんだ。

お金は貸せなくても知恵は貸したい銀行員でありたかった。

……でも、親切が仇になったのね（泣）

調査報告書には誓約書が同封されていた。

誓約書の効果があるのならば、みどり達への心配は薄らぐのだけだ、と、

すべてが解決しないことへの焦りは、決して無くならなかったんだ。

「愛している」

みどりは確かに手紙にそう書いてくれた。

でも、みどりは本当に僕の事を理解してくれたのだろうか。また、僕は本当にみどりの事を理解していたのだろうか。

「愛」の別名は「理解」であるんだ。

愛せないのは理解が足りないから。

本当に理解する事が出来たのなら愛は生まれる。

僕はそう信じてきた。

僕はみどりを愛していた。

みどりを理解していた。

……でも、本当に理解しつくしていたのだろうか。

こんな思いの繰り返しで、

僕の葛藤はしばらく続いていく事になったんだ。

みどり

空虚だ。

みどりのいない毎日が、こんなにも空ろだとは、考えてもみなかった。

日に日に温かくなる季節とは裏腹に、凍てつく心の融解はまださきの事だと、細胞のひとつひとつが教えてくれる。

みどりが幸せになることが最善であると今でも思っている。

今まで考えてたみどりの幸せは、必ず僕の出番のある物語でしか予想してなかったな。

僕の出番が無くても、子供という絆があれば、幸せは勝ち取れるのかも知れない。

その手段のひとりになるのであれば、これ以上、みどりの物語に登場するべきでないのかもしれない。

・・・・・・そんな事を考えるようになってきた。

「やー皆さん、おはよー!」

支店長が銀行に出社した。

元気のよさは当行一と自称している挨拶が湯葉沢支店の中に響き渡る。

牧村支店長は単身赴任であり、独身の僕は、よく飯を食べに行ったり、

飲みに行ったり、なにかと面倒を見てもらっている。

面倒になるといっても、正確には『面倒している』方が多いのだが・

食事も飲み会も全て割勘であるし、パソコンで僕は支店長の先生で

もある。

それに、お酒の飲めない僕は、よく支店長の足にされるんだ。ともあれ、支店長は支店での最高責任者であり、絶対的存在なのだ。……それにしても、やけに今日は機嫌がいいな。支店長とは2年間一緒に働いているせいかな、足音で機嫌が分かるようになってる。

軽快な足音は、最近ではめったに奏でられなかった気がする。

「今日は皆で飲みに行くぞ！」

……朝から既に19番ホールか。

でも、支店長の機嫌を損ねるわけにはいかない。

「いいですね、いきましよう！」

すかさず、次長以下の役席は賛同するんだ。

なんでそんなに浮かれているのかと不思議であつたが、謎はまもなく解けた。

なんでも、いきつけのクラブの女の子が、独立してスナックを開店するとの事。

大分お気に入りだった様で、開店には部下を引き連れて行つてやると豪語したのだとか……

それが今日、開店の日を迎え、招待状が来ているらしい。

5名分で予約になっているので、支店長以下、偉いひと順に召集かと思つたら、

「田原くんも最近おつかれの様だから、一緒に行こう！おおいに楽しもう！」

……僕も？とても騒ぎたい気分じゃなかったんだけど、そう言われてしまうと、断るに断れなくなる。

空ろな僕の事を気に留めてくれたのは、さすがに支店長だなんて、少し感心した事もあり、気が進まないけれども飲みに行つたんだ。

「いらつしゃい、支店長さん！！」

そこにいる女性と出逢わなければ、

物語はさみしく消え去るはずだったのに……

「はじめましてえ、花梨でえーす」

「本名は、『林みどり』っていうんだ。」

「ダメでしょ、支店長！本名言っちゃー！！！」

えっ？

二人目の『みどり』がそこにいたのです。

大人の世界

酒の飲めない僕にとって、水商売は未知の世界だ。

けれども、22歳でスナックのママってのは、

いくらなんでも、自分だけの力じゃ無理でしょ……って事くらいは分かるんだ。

雇われてないならパトロンかなんかいるんだろうなあ。

内装工事だけでいくらしたものだろうか……

と銀行員の視線で店の中を見渡してしまう。

ボックス席4つにカウンター8席、そしてカラオケの機械があ。

スナックとしてはこんなもんだらうって広さの平凡なお店。

建物自体はさほど新しくないのだけれども、

お店の中は、さすがに新規開店だけあり、照明からグラスに至るまで、

すべてが新しく輝いて見える。

まあ、いくら想像してみたところで、所詮水商売。

銀行の世界とは、全く正反対の世界に存在しているのは間違いなかった。

うちの銀行では水商売とは取引が出来ない。

水商売用のテナントビル建設にも融資は遠慮している。

だから、僕にとっては仕事上でもプライベート上であっても、知らなくていい世界なんだ。

店は、開店初日なだけあって、相当繁盛している。

ママが以前勤務していたクラブの囲い込み客はほとんど招待を受けたのだろう。

開店祝いの花束は、満員電車の乗客みたいに所狭しと並べられている。

ボトルを入れたら「ハイさようなら」状態の客も相当いるようだ。開店初日に長々と居座れるのは、VIPクラス限定といった感じ。そのなかに、我らが支店長がいるんだ。

この親父、いったい幾らつき込んでいるんだろう……（汗）そして、そろそろ帰ろうかなと考えてた矢先、店にママの黄色い声が響き渡ったんだ。

「パパぁ!!!!!!!!!!」

ママが両手で口を塞ぎ驚いている。

「ぱぱ?……それって、パトロンのことか？」

「パパ」と呼ばれたその人は、極めて地味なスーツに身を包んでいるものの、

品格のある顔立ちと、品格ある人が持つ雰囲気醸しだして、ドアの前に佇んでいた。

歳は60歳半ばであろうか。

パトロンであるならば、ちょっと年がいつているように感じられる。もっとも、見た目と実年来は必ずしも一致しない。

財力は年齢と必ずしも一致しないと同じなんだ。

僕は、パトロン等という大人の世界の人種を見るのは初めての経験だった。

だから、またひとつ大人の世界を勉強したと、興味津々と老紳士を見つめていんだ。

「ママ、お勘定!」

めずらしく支店長がご馳走してくれる事になった今日の飲み代。いいところを見せようと、無理して頑張っているのだろう。

後々が怖い事、請け合いなのだから……

相変わらず多忙を極める店内。

僕たちが席を立つと同時に、新しいお客がなだれ込む。

「支店長！今日はありがとうございました」
笑顔でママが見送ってくれる。

新規開店なのだから、ママとしても今日のお客は特別な思いがあるのだろう。

ひとりひとりに丁寧なお礼をしてくれる。

そして、別れ際に支店長がママに一言質問をしたんだ。

「さっきの『パパ』って、あなたのパトロンかい？」

「……場の空気を読めない人がいる。」

せっかくのお祝いの日に、そんな質問は失礼だった。

来店した人みんなに聞こえちゃったんじゃないかと心配する。

常々、支店長はじめ銀行の上席には、そんな人が多いように感じる。
銀行員が世間から嫌われる理由がそこにあった。

銀行員の常識は、世間の非常識……

「パパって、パパよ。」

当然の答えがママから返ってきた。

そのあとすかさず、

「パトロンってなんですか？」

質問の質問が、よっぱらい支店長に向けられる。

「つまり、あなたの『コレ』ってことかって聞いてんの！」
と、親指を立てる。

僕は、すかさず支店長の足を突付いた（正確には蹴った！）
多少痛くても明日の朝には忘れているだろう。

シラフの計算高さは時には都合がいい。

「やだあ！」

ここにきて、ようやくママも支店長の言わんとしている内容を理解した様子。

「パパはみどりのお父さんだよお！」

相談

次の日、定石どおり支店長の記憶がない。

財布の現金が、記憶より少ない事に気がついたらしく、

昨晩はどこに行ったのか、飲み会参加者から尋問会が開かれる。

やはり、支店長の驕りほど怖いものは無い……

しかし、僕は昨日からなにか心に引つかかる思いでいるんだ。

なにか忘れている……

もちろん、山川みどりの事を忘れるには、まだまだ記憶は新しすぎた。

毎日が空虚なる原因は、やっぱりこの事以外なかったんだ。

なんで足が痛いんだと、支店長に言われたときはどうしようとも思っただが、

すっかり忘れていた様子なので、それは忘れ続けてもらう事にする。そして、その疑問が解けたのは、業務終了間際の事であった。

「あつ！」

思わず声が出た。

「どうした、田原……」

融資課長が心配そうに尋ねる。

まさか、きのうからの疑問が解けたんです……なんて言えない。

「……稟議書、ひとつ書き忘れました。」

別に今日出さなくても良かった稟議の件を持ち出して取り繕う。

一日中気にかかっていたその問題は、昨晚の老紳士のことだった。

どこかで逢った気がする……でも、スナックのママの父親なんて何の接点も無いな。

その繰り返し疑問に終始符が打たれたんだ。

その老紳士は、10年以上記憶をさかのぼらなくては思い出せない相手だった。

僕の大学の教授じゃないか！

僕は私立の二流大の出だが、老紳士は確かにその大学で教授をしていたはずだ。

銀行は、顔を覚えるのが商売ということで、いろいろ勉強したんだ。顔を記憶に焼き付ける事は、特徴を捉えるコツさえ覚えれば何とかなる。

でも、大学時代にその術は無いのだから、なかなか思い出せなかった。

あの老紳士は、社会学の教授に間違いない。

一度思い出した記憶は鮮明によりみがえって来るものだ。

あのころで50代半ばだったはずだから、ママは40過ぎてからの子供かあ。

教授が、湯葉沢市出身だったなんて聞いた事無かつな。

というか、教授については社会学のこと以外はなにも知らないんだっけ。

今は大学を退官しているのだろうか……

「早く稟議書いてしまえ！帰れないだろ！！」

……上司は部下の妥協を許さない。

それから1週間、銀行は多忙を極めた。

決算期だという事と、融資案件が立て続けに申し込みになった事で、融資課は連日連夜、戦場だった。

ちよつとでも気を抜くと、

「お前はカリスマだなあ……給料泥棒の……」

と、猛烈な激が飛ぶ。

だから、スナツクの事も教授の事も、
そして、山川みどりの事でさえ考える余裕はなかったんだ。

銀行には徒歩で通っている。

アパートへは5分ほどの道のりなんだ。

満天の星空を見上げながらの帰宅は、

少しだけ心に安らぎを貰える。

すると心にゆとりが出る為か、またも余計な事を考える。

・・・みどりどうしているかな。

しかし、謎の女もなんで僕に直接来なかったんだろう。

みどりにしても、元カノのところにしても、

周りからせめて、どうしようと思ったんだろうな。

そんな事したら嫌われるだけじゃないか。

少なくとも、当たって砕けたほうが納得するんじゃないのかな・・・

・

本人じゃなくて周りの人に行くっていうのは、

ある意味、新手のストーカーって所なのかもな。

いろいろ考えながら、アパートに到着する。

そして、郵便受けの郵便を引き抜き手にした瞬間、

信じられない事が起こったんだ。

ねばあああああああああああああああ！！！！！！

「なっ、なんだ、こりやああああ！！！！！！」

ネバネバの粘液上の液体がハガキに付着している。

しかも、そうとう臭い。

急いでポストを開けてみると、中に生イカが入っていたんだ。

「??????????」

小さな親切だとしたら、大きなお世話だな……
いたずらにしては悪質すぎる。

でも、疑念はすぐ不安に変わったんだ。

「……もしかしてストーカー襲来？」

それしか考えられなかった。

次の日の朝、それまでポストに無かった鍵をかける。

いままで、郵便物で届かなかったものってあったらうかと思いついてみただけ、

思い当たる節は無かった。これで大丈夫だろうか……

だが、不安は次の日的中する。またポストにイカが入っていたのだ。ただし、イカは『スルメ』に進化していたんだけど。

……汚れなければいいってもんじゃないぞ（怒）

とにかく、ポストが汚れてしまった。

異臭を放っている為、今日は早めに帰宅して徹底的に掃除する事にしたんだ。

でも、家には臭い取る洗剤とかないなあ……ということで、お買い物。

近くのスーパーに出かける事にした。午後6時。この時間のスーパーは、

会社帰りのOLや、夕飯の支度の買い物客で賑わいを見せる。

この時間で来る事は、僕はめったにないんだ。

この店の利用は、閉店間際のお惣菜とか、土日のまとめ買いなんなのが多かった。

いつもの買い物時とまったく様相の違う店内に、とまどっばかりだ。

あれ？先日の花梨ママだったけか。

開店前の準備であろうか、ひとり買い物をしている。

「こんにちは、みどりさん。」

スナックのママである事を悟らせないよう、話しかけたら自然に本名を言ってしまった。

その若さで「ママ」って呼ばれたらどう思うか、僕にはいまひとつ分からなかったんだ。

「あつ、田原さん！先日はありがとうございました。」

さすが客商売だな。一度しか逢っていないにも関わらず、ちゃんと僕の名前を覚えてくれた。

顔と名前をはずさないのは、銀行も水商売も変わりなしか……
「面白い物ですか？」

聞けば、おつまみ等は全て自分で用意しているとの事。関心関心。

「出来合いのものは出たくないから……」

それは、山川みどりがよく言ってた言葉と同じでした。

「……田原さん、お酒は召し上がりませんか？」

先日、僕は全然お酒を飲みませんでした。

飲めないのが正しい表現なんですけど。

顔と名前だけではなく、お客がどのような行動を取ったかも観察してる事に

営業のセンスを感じる。さすが、この若さで『ママ』が務まるわけだ。

そして、飲まないんじゃないかと説明したんだ。

僕みたいな人種はママみたいな人にとっては天敵みたいなわけで……

でも、別にどう思われようが隠す事も無いわけで……
はにかみながらも恥をさらしてしまう。

「……田原さん、ちょっと相談あるんですけど。」

突然ママが切り出す。

これから僕はイカの始末がありますなんて事は絶対に言えない。

「はい、なんでしょうか？」

銀行員はよく相談相手に選ばれます。

世の中の悩み事の多くは、お金にまつわる金銭トラブルと、恋愛とか感情的トラブルによるところが多い。

銀行員への相談の多くは、借金や金銭トラブルといった悩みである。だから、彼女の相談もそんな類だろうな・・・と簡単に考えてしまったんだ。

「こみいった話になりますので、後日時間を頂きたいのですが・・・」

「

もちろん、スーパーの立ち話ですむ相談なんか、

銀行員でなくとも済む程度の悩みなんだろう。

だから、僕を指名した時点で『銀行』を指名したわけだ。

我々、一人一人が『銀行』であるのだから。

結局、後日連絡を待つということ、その日はそれ以上話を聞く事は無かった。

悩み事など無いような満天の笑みで彼女は去っていった。

そして、振り向きざま、

「こんど何時いらしてくれますう？」

・・・だから、僕は飲めないんだって（泣）

その瞬間が来ました。

その相談を聞かなければこの物語の次章はなかったのですから・・・

・
・

真夜中のコール

ピロピロピロピロ……

甲高いデジタル音は、携帯ではなく電話へのコールだ。

あれ、今何時だ？

午前3時をまわったところだった。

自宅へのコールは銀行関係者しか知らない。

それに、この時間の電話は良かったためしがない。

なにか事件がおこったのか……

あわてて受話器を取る。

「夜分すいません、田原さん……」

花梨ママからの予想外の電話だった。

………なんでこの番号知ってるの？

電話番号は、親切なある方からお聞きしたとの事。

完全な個人情報漏洩だ。

まあ犯人は、ほぼ特定できたわけだが……

しかし、支店長が黒といったら白でも黒になるのが銀行なんだ。

義理と人情の世界ではあるが、時として悪い風習だな。

「本当にすみません、でも、時間が無かったんです………」

この後電話は1時間以上続きました。

電話の内容は、以下の通りだったんだ。

クレジットカードで身に覚えの無い買い物の請求があった事。

クレジットカードは持っているが一度も使用した事が無かった事。

今回の請求は30万円だったが、先月分も30万円通帳から引落済であった事。

最近引越しをしたらしく、請求書は届いていない事。

今月の請求分が残高不足で引落ならなかった為、電話での督促により発覚した事。

先月と今月分で合計60万円分が使用された事。（30万円分は引落済）

明日が再引落の決済日である事。
手元にカードは存在している事。

・・・・スキミングっぽいな。

電話での話を聞く限り、スキミングでの不正使用だと予想される。
でも、カードの事は僕も専門じゃないし、

なんで警察に相談しないで僕なんだろうと、警戒感もあつた訳で・・

警察に相談してみて、なんて感じで終わらせようとしたら、
ママが泣き出してしまった。

時間は午前4時を過ぎている。

ママと言っても、22歳の若さだ。

金融知識だって当然ほかの女の子と変わらないんだと、
冷たくあしらい過ぎた事に、慌ててしまった。

それ以上電話では会話が成り立たない。だから、直接会って話を聞く事にしたんだ。

場所といっても、まさか家に来てとは言えない。

とりあえず、24時間営業のファミレスで朝食を食べながら。

「警察には相談できないんです・・・・」

それだけでは僕の疑問は解消されなかった。

でも、それに続く事実を知ったとき、とても注文したモーニングセ

ットAは、

喉を通らなくなっていくのですた。

おおよそ朝食会でわかった事はつぎの通りだった。

警察はこわくて相談できない事。（イメージ的なものと自分の
仕事的な理由）

カード会社が自分の事を信用してくれるかという不安がある事。
前職のクラブ時代に、数回財布の中身を盗まれた経験がある事。
人間関係の不和が生じる懸念から、その事を公にしなかった事。
店の開店資金で預金を使い果たしたため、再引落の決済資金が
無い事。

ここまでの情報ならば素人さんにありがちな、よくある質問・疑問
なんだ。

聞く限りでは、クラブ時代に財布からカードを抜かれてスキミング
されたのだろう。

驚愕の事実はこの情報だったんだ。

クラブの経営者は、湯葉沢産業であり、ママのスナックも湯葉
沢産業所有である事。

！？湯葉沢産業！？

これを聴いた瞬間、逃げ出したい衝動に駆られる。

同社は、湯葉沢市では有名なヤザ屋さんだ。

ただし、任侠の世界に生きているってことは聞くんだけれど……

・
暴団とヤザの明確な違いなんて全く分からないわけで……

わかった事は、ママは独立したというより、雇われママなんだって
事だ。

だから、現金商売のスナックの売り上げも自由に使えないから、決済資金に困ったんだな。

そして、警察沙汰になった時、前の店に捜査等が及ぶ可能性を懸念して、

相談できなかった訳だ。それじゃ、悩むよ……。

普通の会社じゃないからな……。

「カードみせてよ。」

まだ、カードを確認していなかった。

どこのクレジットカードなんだろうと受け取ってみる。

………なんだ、うちのカードじゃないか。

「心配なくていいよ……カード会社には僕から連絡するし。

おつて警察に被害届け出すように指示があるけど。

決済はカード会社からの指示があるまで待つていいから。

このカードはうちの銀行の提携カードだから、

今日のは相談じゃなくて仕事と同じなんだよ。

気にすんなって……。」

などと慰める。

「本当ですか？」

前の勤務先との因果関係ははっきりしないわけだから、（実際そのとおり）

余計な事を言わなきゃ、きみの考えている事は心配ないんだとの説明をしたんだ。

湯葉沢産業かぁ……普通の会社じゃないからな。

彼女が心配するのは当然だった。

雇われとはいえ、22歳でママに抜擢つてのはやっぱりすごい事なんだろうな。

持って生まれた器量の他に、世渡り上手的なセンスもあるのだろう。実際、軽はずみな行動で、自分に降りかかる火の粉を予見しているわけで……

それにしても、一度も使った事の無いカードかあ。

銀行にしてみれば耳の痛い話だった。

金融庁の打ち出したりレーションシップ・バンキング機能の強化、いわゆるリレバンを、収益のあがるリテール商品推進と施策を履き違えた銀行にありがちなセールの賜物だ。

給与振込者に強引なまでのカード販売。

ママだつてこれらの被害者なのかもしれないな。

唯一の救いは、カードの取扱店が湯葉沢支店じゃ無かった事くらい。……はて、なんで県外の大山支店なんだろう。

その理由は、ずっと後に知る事となるんだ。

夜のママの顔立ちは、器量が良いという事だろうが、良い意味で記憶に残る感じがする。

でも初めて化粧なしで見るママは、とても夜の顔とは違った女性だった。

やはり22歳の女性……というか、女の子なのだ。

気丈に振舞うママとしての顔。

不安や悩みを打ち明け、普通の22歳の女性であると教えてくれた「みどり」としての顔。

両方の顔を垣間見た事が、後の僕に大きな影響を与えてしまう事になるとは、

この時、僕は気がつかなかった……

また真夜中

ピロピロピロピロピロピロ……

またもや夜中に電話がなった。

最近の流れから行くと、銀行関係者からではない事は明らかだ。

「……………田原ですが。」

気の入らない返事しか出来ない。

「田原さん、ゴメンね！」

やっぱりママからだ。

先日のカードの件からは数日が経過している。

カード会社への連絡と、その後の対応は確認していたので、

困っている事は無いはずなのだが…………

「今からお邪魔してもいい？」

へっ？どこにお邪魔しようっていうんだ。

寝ぼけているせいか、まったく話が見えない。

「田原さんのアパートだよ！」

……………寝言は寝てから願います。

ママは先日のお礼がしたいとの事だったが、

時刻は、午前3時を回ったばかりだ。

日付が変わっているため、今日は月末のイブ。

銀行の月末は、まさに戦場なんだ。

昼食をとる時間さえも無いのだから。

イブと言っても、緊張感と仕事量は月末並みにいっぱい詰まっている。

悪いけど、夜型の人にかまっている余裕はないんだ。

「眠くてえ……」

気の利いた断り文句は思い浮かばない。

「ちよつとで終わるから……」

なにか、お礼の品でも渡したいのかな？

気を遣わなくていいのに。

気を遣うならば、構わないでほしいんだけど……

そう思っていたら、なにやらドアからノックの音。

まさか！！

ありえないはずだが玄関に向かう。

「きちゃった」

ママが、はにかみながらもそこに立っていたのです。

キタ (。。(!!!!!

なっ、なんでアパート知ってるの！？

………

ジジいかあああ！！！（支店長）

僕は、真剣に殺意を抱いた。

「眠いからさ……」

どんなに美人が来たところで招き入れる気力は無かった。

明日は仕事も忙しいからさ。

それにしても、お礼といっても夜中に訪ねるくらいなのなのか？

あまり高価なもの貰っちゃうと、コンプラ上、よろしくない。

それ以前にママの後ろが怖すぎるし。

「ちよつといいかな？」

そう言くと、有無を言わずアパートに入ってきてしまった。

おいおいおい！！！！

こうやって銀行員のささやかな安眠は奪われていくのです。

……セムしておくべきだったか。

心の中で叫ぶ。

「意外にきれいなんだあ……」

僕の部屋の事か。

お褒めの言葉ありがとう。でも、全然嬉しくないから。

夜帰って寝るだけの住処だから、散らかしようも無いしね。

食事もほとんど外食だし。

「私、男の人の部屋ってほとんど入ったことないから……」

……信じません。

確かに僕は、ママの相談にのった。

しかし、いくらお礼がしたいのと言っても、真夜中に押しかけますか？

「お茶でも飲む？」

……ある程度の不満が頭を通過してからは、なんだか気が抜けた。

こういう時、電気ポットって役に立つね。

毎朝の紅茶と、カップラーメン専用だったけど、

はじめてこのアパートでお茶を入れたぞ。

気持ちを落ち着かせるために、まずは一服。

しかし、「ふう……」と言える状況に無いのは同じでした。

「ごめんねえ、夜遅くに。どうしてもお礼がしたかったの……」
カードの件は手続きが一段落したらしく、やっと安心できたのだと言っ。

すごく助かったので、お礼がしたいと考えていたら、
いてもたってもいられなくなったとの事。

そこに、支店長がよっぱらって登場。二日に一度は御出勤らしい（汗
ラッキー！という事で、支店長の手帳から住所を聞き出したのだと
か……）

すごい行動力だ・・・そして、
すごい無防備だ・・・くそジジい！

・・・殺意は増した。

スキル

「ちよつと、ちよつとちよつと！」

お茶を飲んだら、次第に頭の中が覚めてきた。

そうしたら、はっと気がついたんだ。とんでもない事になってるんじゃないのって。

一応、僕も銀行員といえども独身の男でんだからさあつて。

「無防備だよ！僕は独身の男なんだよ。」

それに、こんな夜中に危ないって……

「あら、もう外は明るくなり始めてるけど。」

……ホントだ。東の空が明るいや。朝が早くなってきたなあ。

って、あげあしか！

そんな感じで、のらりくらりお引取りを願うタイミングが掴めるまま、

時間だけが過ぎていったんだ。

「朝ごはんでも食べる？」

「すつごくお腹へつてたのお！」

満面の笑みを浮かべ、子供のように嬉しそうな表情のママ。

こつという顔を見せられるとは思わなかった。

こちらからの会話が無いので、とっさに出た一言だったけれども・

・

僕は、ほとんど朝ごはんを食べる習慣が無い。

必須の紅茶と、たまにトーストをかじる程度なんだ。

でも、さすがにお客にトーストだけって訳にはいかなかった。

それに、外食と言っても、彼女の格好は、あからさまに夜の女性だ。

そんな人と、銀行員がファミレスで朝飯を食べているなんて知られたら、

いや、一緒に外出するだけでもリスク高いのは明らかだ。

……作るしかないか。

大学時代、親に勘当された僕にとって、

生きていくためにアルバイトはいろいろやってたんだ。

特に、食いつぶぐれることが無い様、レストラン関係の仕事は長い間続いた。

ある洋食屋にて、皿洗いからスタートしたバイトが、

いつのまにかフライパンを振るまでになった事があった。

アルバイトは調理補助までしか出来ないはずなのにね。（ご愛嬌）
中でもオムライスは得意中の得意なんだな。

アルバイトのスキルが、ついに今、発揮される時が来た。

冷蔵庫の中は、卵だけは切らず常駐している我が冷蔵庫。

正確には、卵くらいしかない・・・あとは調味料程度。

それだけと言うこと無かれ、独身貴族（自称）の私には、

冷凍食品という強い味方があるんだ。

チキンライスも冷凍庫に常駐させていたんだ。

この二つさえあればオムライスくらいは作れるんだ。

「なにも準備していなくて、オムライスくらいしか出来ないけどいいかな？」

「え　　っ！オムライス大好きなんだあ　　すごい、作れるのお！」

「……………そお？」

俺だったら、朝はオムレッツだろ？って言うな。

……………予想外だ。

オムライスの作るところが見たいとの希望により、狭い台所に二人して立つ。

うちには、オムレッツ専用のフライパンまであるのだよ、ふっふっふ

っ……

褒められた後は気分が良い（単純ですから）
オムレツやオムライスの話で盛り上がったところで、
出社時間がきてしまった。

さすがに今度は、お引取り願うしかなかった。

「じゃあ、いろいろありがとう

オムライスもとっても美味しかったよ！

また連絡するね！！」

……今度は夜中でないときお願いします。

見送りながら、深々と頭を下げて合掌。

そして現実が戻ってきた。月末イブの銀行に出社なんだ。
徒歩での出社は、月末が近づくたびに足取りが重くなる。

でも、今日は思いがけない事が起こったせいか、

ママからの開放があつたせいか、軽快な足取りだ。

今日のスケジュール等を歩きながら考える。

ん？さてよ、そーいえば、お礼って言つてたけど、なにも貰わなかつたぞ……

欲しいではありません。

それが無かつたのならば、いったい、なんの為のご訪問だったのでしょうか。

『ゴオ

ン』

お寺の鐘が鳴り響きました。

僕も真つ白に燃え尽きました。

……急に足取りが重くなつた事は言つまでも無い。

忘れ物

ピロピロピロピロピロピロ……

「……………現在この電話は使われておりません。

再度、夜中に鳴り出す電話に、心の中でつぶやいてみる。

「……………はい。」

「ごめんなさい、田原さん！昨日は忘れちゃったあ」

そういう同じせりふが、受話器越しだけじゃなく、ドアの向こうからも聞こえてきた。

キッチンの窓からママのシルエツトがみえるではないか。

確かに、「また連絡する」と言ってたけど、次の日だぞ。

何を忘れたものか知らないが、夜中に押しかけた上、

アパートの他の部屋にも聞こえそうな大声で電話しないでくれ。

鉄筋コンクリートの建物だから、廊下では声が良く響くんだ。

ドアを開けないと開けないで騒ぎ出しそうな気もするので、渋々ながら部屋を開ける。

「今何時だと思ってるの？」

「えっ、3時半でしょ。」

「……………」

この娘が平然とそう答える事はわかってたんだけど……

「あのね、独身のひとが……………」

「大丈夫だよ」

はっ？なにが大丈夫なのかまったく理解できない。

「あたし、夜の仕事長年やってるから、

この人が信頼できる人かどうか、わかるんだもの。」

……………銀行員のアンテナと同じなんだな。

彼女の行動は、僕の理解をはるかに超えるものだったけど、このことに対しては、自然に納得できたんだ。

昨晚に引き続き、電気ポットにお世話になった。お茶をすすりながら、まず聞きたい事があった。

「で、何を忘れたの？」

催促したわけではない。

用事が済んだら、お引取り願う気満々なんだ。

「ああ、それは後でね」

・ ・ ・ ・ ・ 長期滞在を望んでおられるようだ。

「なんか食べる？」

仕事が終わってまっすぐうちに来たのだろう、昨日もよく食べてたっけ。

「昨日のオムライスは、絶品だったよお」

「ああ、チキンライスは冷凍の使ったからだよ。」

「そうじゃなくて、卵の火加減と下味とかだよ。」

「……そお？」

褒められると、作りたくなるじゃない。

じゃあ、作るよって感じで、
 またもや朝ごはんの支度だ。

まだ1回分の材料くらいは、冷蔵庫に残っていたんだ。

月末を乗り越えたら、補充しておこう。

もしもを考えれば、
買い置きは増やしたほうがいいな。

若いからか、ママは結構食べるんだ。

「スープも作れるけど・・・」

つい、余計な事を言ってしまう。

「支店長は危険だよ……」

いろいろ僕の情報が漏れ伝わっているわけだから、お客としては、それなりに親しい間柄だと予想される。

釘をさすつもりで言ったのだけれども……

「そのなの分かってるよ。」

軽くかわされ、こっちの箸が止まる。

……余計な心配だったか。

まあ、その考えは聡明な事です。

「だから、田原さんに相談したんだから。」

水商売のアンテナってか？

聞けば、大抵の人とは、初対面でもどのような人だとか、どのような事をしてきたのかとか分かるそう。

それって、はやりのスピリチュアルカウンセラー的な能力？

にわかには信じられなかったんだ。

「だから、田原さんが信頼できる人だったのもわかったし……」
「最近、すごく悲しいお別れがあったって事もわかるよ……」

「……！！」

……すいません、その特殊能力信じます。

けど、勝手に人の心読まないでくれますか！

そういわれてみれば、彼女は僕が考えてた事を、

言葉として聞くことなく回答するってのが、何回かあったな。

勘がいいなって程度にしか思わなかったけど。

そうになったら、銀行員のアンテナってレベルじゃない。

霊能力とかシックスセンスとかいうヤツだろうな。

ん？じゃあ、僕が今、迷惑と感じている事も知ってるはず……

そのことだけは、いっこうに気づくそぶりを見せない。

……都合の良い能力だな（怒）

そして、出社時間が近づいてきた。

今日も丁重にお引取りを願う。

「なんか眠くなってきた……」

いつもは何時頃寝ているのかと聞いてみたら、

大抵は午前8時から9時頃寝て、午後4時に起きる生活なんだとか。
・・・昨日・今日の僕と逆さまな生活なんだな。

とうとう出てこなかったお礼。

明日もコレじゃたまったもんじゃない。

「じゃあね」

・・・行ったかあ。台風の過ぎ去った現場の中継はこんな感じなのだろう。

「あつ、また忘れるところだったあ！」

そっいいながら彼女は振り返った。

その時は、突然の事で何が起こったか理解できなかったんだ。

「また連絡するねえ」

それが無ければ、突込みを入れたくなる別れ際の言葉だったのに、僕は、呆然と見送るしかできなかった。

「・・・キスしていきやつた！」

これが『お礼』なのかと戸惑うばかり。

とにかく、銀行に行く準備をしなくては・・・

後を振り向くと、大学生風のおねえちゃんがニヤニヤ見ているのでした。

・・・今日は月末だったな。

年間12回しかないはずの月末が、今年はやけに多いような気がする。

名前

それからは何故か平穏な日々が続いたんだ。

あれから1週間、ママからの電話は無くなった。

いったい、なんだったのだろうと、時折思い出してため息をつく。

「今日は飲みに行くぞ！」

支店長にパワーがみなぎる。

典型的な5時から男だ。

若かりし頃は、伝説の営業マン（自称）だったらしいが、
今ではその面影をまったく見る事が出来ない。

飲み会自体に依存は無い。

僕は、お酒は飲めないものの、お誘いを断った事はほとんどないの
だ。

飲まないのではなく、飲めないのだから、どんなに他人が飲んでよ
うが、

羨ましいとは思わない。酒の席での本音の会話とその雰囲気は大好
きなのだ。

それに、酒の肴はご飯にも良く合う。だから、B級グルメの僕にと
って、

飲み会つてのは嫌いではない。

でも、今だけは飲み会に抵抗があるわけで……

何故って、2次会は必ずあのママのスナックになるのだから。

「あの……飲みすぎました（ウーロン茶）

一次会だけで失礼してよろしいでしょうか？」

「ジロっ」

……却下。

僕の稟議は否決された。

嫌々ながら参加した飲み会。

1次会はいつもの居酒屋『おしよしな』

東北の方言で「ありがとう」の意味なのだそうだ。

温かい郷土料理中心の人気店なんだけど、さすがに今日は素直に喜べない。

加えて、この参加メンツでは1次会で終わった例がないからだ。とても『おしよしな』という気分にはなれなかったけど、

ちよつとした収穫というか情報というか……

支店長からママについての思わぬ過去が聞ける事になったんだ。

ママは18才から水商売を始めた事。

高校卒業後、OLとして就職したが、ほどなく夜の世界のアルバイトを始めた事。

アルバイト先ですぐにNO.1となり、そこから本業デビューした事。

同一店で働いていると、どうしてもストーカー的顧客がつきまとう為、

短期間で勤務先を変更しなくてはいけなくなった事。

その度に、得意顧客が大移動する為、同業者間でママの獲得合戦状態になった事。

送迎付きで、セキュリティの良い湯葉沢産業と契約してからは、1年以上同社で勤務していた事。(セキュリティといっても送迎時だけ)

湯葉沢産業に見込まれ、スナック1軒任された事。

そして、お金が必要であるらしい事……

銀行員のアンテナが何かを受信し始めたんだ……

そしてついに支店長と一緒にスナックへご出勤だ。

「ママっ、約束どおり皆を連れてきたよぉ！」

「……………」約束どおり」というのがいかにも支店長らしい。僕たちにとつては、「安請け合い」なんだけどな。

それに、なんて顔して逢えばいいやら戸惑うばかりなんだ。

ママはまったく意に介さずといった感じだった。

僕だけが意識しているなんて滑稽なのかもな。

そんな感じでひとりグラスをまわしている。（ウーロン茶だが……………）

すると、ママが耳元でささやいたんだ。

「なんか恥ずかしいね……………」

……………消え入りそうなくらい小さな声だった。

『銀行員』という仮面を僕がもっているように、

『ママ』という仮面を彼女ももっているのかもしれない。

銀行員と水商売は、絶対に別次元の世界の住人だと思っていた。

でも、そんな次元の壁など存在しないんじゃないかって、

この時から感じ始めた気がする。

飲み会が終わった次の日、

融資課長から突然こんな質問をされたんだ。

「ママの本名ってなんだっけ？」

「……………」支店長は林みどりって言っていましたね。」

「だよな。けど、保健所の許可証は、別の名前が書いてあった気がするけど……………」

なんとかみどりだったなあ……………なんだっけかなあ……………」

アルコールは前頭葉を狂わせるからな。

それにしても、思い出せそうで思い出せない様を間近で見るのは、かなり苦痛だ。おっさん、いい加減にしろ！って感じになる。

「そーだあ、思い出したあ！」

その答えが出るまで2時間35分かかった。

「太田みどりだったぞ。」

「・・・・・・・・あつ!!!!!!」

その名前を聞いた瞬間、僕はすっかり忘れていた事を思い出した。

「太田教授だった・・・・・・・・」

パパこと、教授の名前だった。

「なんで名前が違ってたんだろうな。」

考えればありえない話ではないんだ。

なにかの事情で母親の姓を名乗っていたりとか、

教授は芸名のようなものを名乗っていたりとか・・・・

普段ならどうでも良い事なのだろうけど、

今は無性に気になった。

でも、間もなく点であった情報が線になっていく事を、

僕は予想する事が出来なかった。

SOS

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

……うっ。久しぶりの真夜中の電話だ。

もうこの時間の電話なんて、あの人以外にいないなって感じになってきた。

「はいはい……」

この頃、早い時間に寝るようになったのは、疲れがたまっていることもあったのだが、

心のどこかで、彼女からの電話を待っていたからかもしれない。確かに眠かったけれども、嫌ではなかった。

でも、その電話はいつもとは全く違ってたんだ。

「田原さん、たすけてえええええ！」

「!!!!ちよつ、なにになに????????」

まったく、何だっ
て言うんだか。

この後僕は、**事實は小説よりも奇である事を**
まざまざと思い知らされる事になるんだ。

「変な人が、部屋のドアをあけようとしてるうううう……!!!!」

警察すぐ呼んでええええええ！

俺じゃないだろ？この場合はああああ！

でも、警察が呼べない理由があるって事をこの時はまだ知らなかった。

「とにかく、今からいくから待ってる!!」

颯爽とアパートを飛び出して車のキーをまわす。

「・・・・・・・・ママの家ってどこだ？」

ママの住まいはお店からすぐの所にあつた。

ウチのアパートからも歩いて15分くらいの所だつた。

だから、思うより早く到着する事ができた。

7階建てのアパート、3階の角部屋。

この時間に明かりがついている部屋がそれだろうな。

一気に駆け上がる。

「田原だけど・・・・・・・・」

・・・・・・・・返事が無い。

「田原だけど！！！」

チェーン越しにママが顔を出す。

「こわかつたあああああああ！！！！！」

その悲鳴に近い声は、7階建てアパート全体に響き渡るものだつた。

この時、ほとんどの部屋の明かりがついた気がする。

あわてて、ママの部屋に上がりこんだ。

「どうぞ」とも言われず部屋に入ったのは、僕も同じだつた。

とりあえず、場合によっては警察を呼ばなくてはいけない。

どんな状況にあつたのか聞いてみたんだ。

でも、「こわいこわい・・・・」と興奮状態の彼女。

見る限り、直接的な被害はなさそうで安心する。

何者かが、部屋に侵入を試みたのは間違いないだろう。

しかし、この時間に女性のアパートに侵入するって事は、

目的はただひとつだろ？

「あつたまくる！！！！」

そう思ったら、どうしても捕まえてやりたくなった。

これでも腕っ節なら少々自信があるんだ。

そして、ドアのノブを回しながらはつと気がつく。

まてよ……今の騒ぎで他の住人が警察呼んでるかもしれないな。

僕が今出てったら、住人でもないのにウロウロとてるって事で、職務質問されるかも知れない……やばいなあ。

だんだん冷静になっていく。

それに興奮状態の彼女をひとりにするのも無理があるな。

「……もう大丈夫だから、何があつたか教えて。」

まず、僕が落ち着かないと。

感情で行動しようとした自分を銀行員の仮面で戒める。

徐々に話し始めたママ。内容はこんな感じだった。

帰宅途中、コンビニに入ろうとしたら、目つきの悪い酔っ払いと目が合った事。

コンビニを出た後、つけられている気配を感じて早足で帰宅した事。

アパートの電気を付けた事で、部屋の位置を特定された事。

警察に連絡したくない理由は、営業許可はスナックであるが、接客がパブの形態と

指摘される可能性がある為、摘発を恐れてとの事。

つまりスナックなのにパブのような営業をしている自覚があつたから、

咎められると思つたらしい。

正直、僕の「新手のストーカー」がついにママにまでその毒牙を剥いたかと、

冷や汗物だった。でも、ここまで聞く限りは同一人物ではなさそう
だ。

とりあえず、ストーカーは増えたけれど、僕とは関係なさそうだな。

「絶対に戻ってくるよ……予感がするんだあ……………」

シックスセンスなのか靈感なのか……

まったく落ち着かない様子のママ。

さて困った。僕の出勤時間も刻一刻と迫っている。

「田原さんちに行こう……………」

今はそれしか方法が無かったんだ……………

「あんなに危険な匂いの人は初めてだよお！」

突然しゃべり始めるママ。

なんでも、水商売を始めてから、身の危険は初めてだったとの事。

僕は、お客に融資を断るたび、身の危険を感じているんだけどな。

……

そういえば、この車に水商売の人を乗せたのは初めてだ。

当然のことなんだろうけど。

でも、所詮水商売と考えていた悪いイメージは無くなってたんだ。

彼女達の努力する姿勢をみれば、職業として否定できない。

銀行員だって、『男芸者』みたいな時は幾らでもあるしな……………

「……………同じなんだな」

そして、僕は彼女をひとり残して銀行に出勤する事となった。

「寝てるから平気だよお」

そうじゃなくて、家捜しとか心配なのです。
ちゃんとおとなしくしてくださいな！

なんて僕の心配はどこ吹く風。

仕事へは明るい時間に行くから平気なのとか。

合鍵はポストに入れておいてと言いつ残し、不安いっぱいでドアを閉める。

「いつてらっしや　い！」

窓全開で叫ぶママ。

・・・・それが心配だったのです。頼むから静かにしてくれ！！

こうして悪夢のような夜が過ぎていったんだ。

僕のアパートに来てから、いろいろ彼女の生い立ち等聞く事が出来た。

やっぱり、事が事だけに、父親である教授にも連絡するべきじゃないかと

考えての事だった。

まず、高校生までは、教授の大学があつたM県に住んでいた事。

水商売の同業では、友達が1人もいない事。（ライバルだからなあ）

教授は大学を退官している事。

お母さんは、幼少時に亡くなっている事。

教授は4年前に再婚して彼女とは別の家庭がある事。

そして・・・・その継母は自分とあまり変わらない年齢である事。

・・・・・・教授。

俺の出逢う「みどり」はつくづく不幸だ。

これじゃ、かえって連絡するのは良くないのかもしれない。

今日のところは、僕の胸一つであるべきなのか。

そう考えながら、一日はあっという間に過ぎていったんだ。

「今日はゆっくり寝よう……」

さすがに疲れたので、銀行は早めに切り上げた。

ポストに合鍵が入っているから忘れないように……

あれ？ 鍵が無い。

しまった！！！！

まさか、ストーカーか？

よりによって、アパートの鍵を盗まれるとは……

合鍵をポストに指定したのはうかつだったな。

なんで予想できなかったのかと、自分自身に腹を立てる。

とりあえず、チェーンは必ずロックしておかなければ。

そんな不安をいだきながら自室に戻る。

「あれ？」

内側からチェーンロックされている。

「おかえりい」

………なんでまだいるんですか！！！！（幽体離脱）

ママがやさしく微笑んでいる。

火傷

スナックの水道施設改修工事が本日中に終わらなかった為、突然のオフをオーナーから指示受けたらしい。

・・・・・・・・なんてこつたあ。

「なんか食べにいつか」

先日の夜の女の格好とは違い、これならどこにでもいる女の子に見えた。

・・・・・・・・これなら出かけても大丈夫かな？

はて、いつの間に着替えたのだろ。朝とは違った服を着ている。

突然の訪問だったから、まったく荷物などは持ってきてないわけで

・・

僕が出かけるときは、パジャマすらなかったから、Ｔシャツを貸してあげたんだ。

そんな荷物なんて持ってきてなかったけどなあ。

この疑問はすぐに解ける事になる。

部屋の片隅に、見知らぬトランクが１つ鎮座していたのだ。

・・・・・・・・まさか（汗）

「あたし、怖くてのアパート帰れないからしばらく居候するね」

荷物は明るいうちに取りに帰ったとの事。

彼女のシックスセンスは、危険な男の存在が消えていない事を感じているらしく、

荷物を取りに行くにもタクシーを使い、さらに運転手さんを部屋の
前まで

同行させたとの武勇伝。

・・・・・・・・・・おしかけ女房だあ（涙）

なりゆきとは言え、いまさら帰れとは言えなかった。

銀行員とスナックのママという不思議な組合せの同居生活は、この後、10日間も続く事になったんだ。

とはいえ、夜型と昼型の人間の生活ですから、僕が銀行に行っている間は、

彼女は寝ている。彼女がスナックにいつている間は、僕が寝ている。一緒に過ごす共通の時間は、朝5時半から7時半までの2時間だけだった。

だから、僕にとっては朝食であり、彼女にとっては夕食を食べる時くらいしか

顔を合わせることは無かった。

男女が一緒に暮らすというと、艶っぽい感じに思えるわけだが、意外にあっさりと、何事もなく時間は過ぎていくのでした。

「うん・・・・・・・・今度は大丈夫そうだなあ。」

危険な感じが無くなって来たもの・・・・・・・・・・」

それは、僕には感じる事ができない能力な訳で・・・・

でも、正直安心した。彼女に危害がなくなる事は本当に嬉しかった。そして、同じくらい悲しくもあったことを僕はまだ認めたくは無かった。

こうして、僕とママの同居生活も最後の日を迎える事になったんだ。

「たあはあらあく　　ん」

それから幾日かたった銀行の昼下がり、
お局様こと大木代理が、甘い声で僕を呼んだんだ。
こういう時は要注意なのだ。

大抵下心があるに決まっているのだから。

「……………なんですか？」

「この前、ファミレスと一緒にいた人ってママさんよねえ……………」

「……………」

……………ムンクの『叫び』ここにありました。

みがしてくれえ！！！！！！

これはマリアナ海溝よりも、

お局様のシワよりも深い事情があるのです。

なにから説明したらよいかと、うろたえる僕にお局様は一言。

「いいんじゃない、恋愛は自由なんだから。」

……………意外なお言葉、いたみいます。

「でも、あんた……………」

「はい？」

「火傷するわよ……………」

……………千里眼は見抜いていらっしやる。

性（サガ）

それから、半年後……

やばいやばいと思いながらも、

……でも、偏見だよなあ。

って開き直ってみるの繰り返しで時は過ぎていきました。

変態野郎の侵入事件つてのがきっかけで始まった同居生活。

10日間の短い間だったけど、互いを知るには良いきっかけになってしまったわけで……

この半年で、僕とママはいわゆる彼氏彼女の間柄にまで進展してしまっただ。

こうして、ささやかな幸せと、胸いっぱい不安を抱きながら、

僕は「みどり」と新たな物語をつくりあげていく事になったんだ。

でも、僕はこの頃から、避けては通れない疑問を解決しなければと考えるようになる。

疑問

何故、支店長情報の「林」姓と、本名の「太田」姓が違っていたのか？

確かにママは当初、「林」姓を否定しなかった事。実際は「太田」姓であることを

保険証等で確認している。

お金が必要だって支店長は言ってたけど、僕に対しては一切金銭的な事は要求しないし、

ねだらない事。でも支店長情報が全くでたらめじゃないとアンテナは受信している。

お父さんは何故娘とさほど年が変わらない相手と再婚したのか？

そして、夜の商売は自ら望んでやっているのかという事……

それらの疑問は、なかなか本人からは聞く事ができなかった。

これは聞きづらいなって雰囲気は誰にでも持ち合わせているわけで・

・・・

でも、師走が近づいてきた、土曜日の昼下がり、

ある偶然から秘密の扉が開く事になったのでした。

昼と夜が全く逆転している僕たちの生活。

僕が休日で銀行を休んでも、日中ママは夢の世界にいるんだ。

最近二人は、週の半分くらい僕のアパートで過ごす事になってた。

けれども、彼女が寝ているときは極力邪魔したくないので、

目的の無い買い物や、目的のない散策など、時間を潰して彼女が目覚めるのを

待っているのが休日の過ごし方だった。

その日も、とある公園の前をとおりがかった時、子供達の黄色い笑い声と、

初冬を感じさせない眩しいくらいの日差しに誘われて、ふらふらと迷い込む。

「たのしそつだな……」

大きなため息とともにベンチに座り込んだ。

座り込むというより、ふんぞり返ったが正しいな。

すると、正面のベンチに座っている老紳士と目が合った。

あっ、太田教授だ！

「こんにちは、お久しぶりです。」

と言っても、大学時代はゼミやサークルの担当でもなく、講義を受講した一生徒に過ぎなかった僕の事を、

教授は覚えているはずも無いわけで……

でも、彼女のお父さんだ。挨拶しないわけにはいかない。

「やあ、田原君だね……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！」

なんで僕の事を知ってるんだろう？
こうして扉の1つ目が開いていった。

「みどりからいろいろ伺っております。」

教授とママことみどりは一緒に暮らしてはいない。

継母の件もあるのだから、てっきり二人の仲は疎遠なのだと思って
いたんだ。

でも、教授から伝わってくるみどりの事、そして僕の事。

その情報の多さに、二人の関係を知る事ができた。

やっぱり親子なんだなって。

僕と父親の距離を考えると、絶望的な気分になってしまふ。

「ちょっと小寒くなってきましたねえ・・・

よかったら、私の家が近いからお茶でもどうか？」

突然、教授からお誘いを受ける。

教授の自宅は、みどりの実家でもあるわけで・・・

みどりの思い出に触れる期待よりも、戸惑う気持ちになってしまふ。
そりが合わなかったであろう、さほど年の変わらない継母がいるの
だ。

僕としても、素直に喜べるはずもなかったんだ。

それに、みどりに黙って思い出の場所に赴く事は、許されないよう
に思えた。

だから、簡単にお邪魔しますなんて言える訳が無い。

「是非お伺いします！」

・・・・・・・・・・・・・・・・銀行員の性^{サガ}が出た。

秘密の扉

二つ目の扉は……

「でっ、でかい！！！！！」

とてつもない大きさだ。

それは歴史の重みを感じる「門」であった。

寛永年間創業の造り酒屋。

地元では名の知られた地酒の蔵元。

正確には元・蔵元であり、当地では有数の旧家として知られている。その現当主が太田教授だったんだ。

酒蔵は分家に経営を委ねているらしいが、詳しい経緯を知るのはまだ先の事だった。

しばし、立派な門構えに立ち尽くす。

「ああ、その門はね普段開かないんだよ……」
文化財級の太田家の門。

ここがみどりの実家なのかと衝撃を受ける。

通用口からお邪魔した太田教授の屋敷。

庭もこうした旧家に典型的な日本庭園なんだ。

僕は銀行で、VIP顧客担当をした事もあったけど、

このクラスの顧客にはめったに出会わない。

大抵は、金があっても歴史と品格は無いからな。

けれども、このクラスの顧客とは、

ちよつとなにか違うと違和感を感じたんだ。

なんだろうなあ。

そうか……、手入れとかされてる庭じゃないんだ……

緊張が和らぎ、目が慣れてくると、庭だけではなく、屋敷全体からかもし出される負のイメージ。

「すごいお庭ですねえ！」と営業スマイル。さりげなく銀行員の仮面を被る。

またアンテナが作動し始めた。

「マイナスイオンも素晴らしい………」

僕が大学を卒業してからの教授は、大病して大学を退任したとの事。その後は一人娘のみどりをつれて複数の大学や短大を転々としたらしい。

年の割には友達の少ないみどりの過去が見えたような気がする。でもそれは触れてはいけなかったものじゃないのかって、後悔というか、罪悪感を感じてしまうんだ。

4年前からは、地元の短大に非常勤ながらも籍を置いているとの事。だから、太田家の屋敷にはその頃から腰をすえたらしい。

それ以前の屋敷には、どんな人が住んでいて、

どのような歴史があったかなんて、予想もできなかった。

それに、現在の屋敷が物語るように、とても楽な暮らしをしているようには見えなかった。

60歳を超えて活躍の場が限られるのは、どの世界でも同じなんだな。

「娘には苦勞をかける………」

それ以上喋らなくなる教授。

秘密の扉は、今日はここまでの様だ。

「田原君はあんしん銀行だったね。」

アンテナがすごい勢いで受信しはじめる。

「今度、折り入って相談を聞いてもらえないだろうか？」

キタ

(。.)

!!!!!!

間違いない相談は難問だと理解できたんだ。

「粗茶でございます……」

そうだ、お茶をのみに来てたんだっけ。

今しがた心臓に悪い話を聞いたので、お茶は大変ありがたい。

この人が、継母なんだな。ちよつと身構えてしまう。

都合の悪い人と、初めから目を合わせて挨拶するには勇気がいるのだから。

そして、ずっと飲んだお茶を噴出しそうになる。

「ぶつ、滝口いいいい!!!!!!」

なんでお前がぁ！

滝口裕子。

大学時代、英語研究会（英研）というサークルの後輩である。

考えてみれば、僕と教授に接点があった。

だから、滝口裕子とも教授を経由する出会いは考えられる。

まあ、信じられない確率なんだろうけど。

聞けば、教授は滝口裕子が大学時代ゼミの担任だったらしい。

大病したとき、独り身の教授を心配して看病したのがきっかけで、愛は年齢を超えたのだとか……

……あたまクラクラしてきた。

でも、確かに彼女ならばと思い当たるふしがあった。

学生時代はとりわけ姉御肌だった彼女。

正義感も強く、困った人にはとことん助けてしまふタイプだった。サークル内でも、突出的に目立つ娘だったから、後輩であっても記憶に残ってるんだ。

「なんてこった……」

みどりの継母が僕の知っている人。

さらに、僕とみどりの関係も教授経由で知っているらしい。教授もやけに僕の事に詳しいと思ったら、みどり以外に、とんでもない情報源を持っていた事になる。

「グサッ」

グサッ？

わき腹に鈍痛が走る。

突然なにかに刺された感じだ。

すると、3歳くらいの悪ガキ……じゃなく男の子が立っていたんだ。

手にはプラスチックの忍者刀を握り締めている。

どうやら、おもちゃの刀に刺されたのでした。

「……切れ！切るのだあ

付くとプラでもイテえ……」

なるほど。

教授と継母の間に子供がいるんじゃない、この家にみどりの居る場所はないよな。

みどりにとっては弟なんだろうけど、教授にとっては孫みたいな存在なのかなあ。

滝口裕子は女性としても魅力的な存在だったかもしれないが、みどりとの関係を考えたら、今の家庭を選択した教授の考えは理解しがたい。

「数式に当てはまらない恋愛なのかもな．．．．．」
銀行員と水商売なんて関係は、そんな太田家の難しさを考えれば、比べるに値しないのかもしれない。

「次の週、また来ていただけないだろうか．．．．．」

なんでも準備しなくてはいけないとの理由で、次週、再訪問してほしいとの依頼を受ける。

断る理由も無く、約束して帰ろうとするのだが．．．．．

「みどりには内緒にしてほしいんだが．．．．．」

．．．．．暗雲立ち込み始める。

訪問者

「おかえりい……」

アパートに帰宅すると、みどりが僕を待っていた。

今日はいつもより起きるのが早かったな

「ごはんにしようか。」

夕方の5時であるが、今日みどりは仕事なので、ちょっと早いけど食事にする。

僕にとっては夕飯、みどりにとっては朝食。

朝ご飯から重いものは気の毒だと思って、

「ヘルシーなものが好きなんだ」と言っている。

だから、夕方一緒にとる食事は、極めて朝食に近いメニューになるんだ。

本当は、油っこいモノとか大好きなんだけど……

この何ヶ月かで3キロ痩せたな。

でも、それを嫌だと思ふ事は無かった。

みどりの過去をちょっとだけ垣間見たばかりなので、

今日はなんて会話したら良いか言葉に詰まるし、

彼女のシックスセンスに見破られてしまう心配もある。

でも、そんなことを忘れてしまうくらいに、

化粧をする前のみどりは愛らしかった。

化粧をしてからの「ママ」という存在は、

仮面を被ったときの「銀行員」の自分となんら変わりはないのだと、

「仕事」に対して水商売の存在価値が変わってきたんだ。

「トントン……」

そんな時、不意にノックの音がする。

「……………誰だろう？」

ドアを開くと知らぬおばさんが立っていた。

「田原さんですね、いつも花梨がお世話になっております」

「????なんだ、このおばさんは……」

みどりを振り返ってみると、口を両手でふさいでいる。

「大ママあ……………」

「ミーティングが6時に変更になったから遅れないように……………」

「

そう言うと、何事も無かったように立ち去るおばさん。

大ママって……………」

「そんなに大きな人じゃないじゃん。むしろ小さいぞ、あのおばさん。」

不安をボケで振り払う。

仕事関係の人だって事はすぐに察する事ができた。

それに、青ざめたみどりを見て、大事が起こった事も理解できた。

「湯葉沢産業専務取締役」

それが大ママと呼ばれる人の肩書きだった。

……………つまり、極道の妻か！

昨晚、みどりは携帯電話をスナックに忘れて来たのだという。

連絡事があるのに、みどりが捕まらないから、

用事を伝えに来たのだろうか？

あれ、なんでココがわかったんだ????

いくら携帯電話が繋がらないといっても、

専務自ら来る理由は偵察以外に考えられないな。

凄みのあるオーラは素人の僕にでも感じる事ができた。

大ママと呼ばれるだけはある。

「もしかして、恋愛禁止とか制約ってあるの？」
青ざめた顔色は戻らない。

………凶星なわけね。

こうして、恐る恐る出社していったみどり。

その日の夜は、とても心配したわけで……
なかなか寝付く事ができなかった。

そして午前2時を回ったところで、電話が鳴る。
電話にはすぐに反応できた。

「どうだった？」

みどりからの回答はあつけないものだったんだ。

「なかなかいい男じゃないの……だって。」

ババ専と呼ばれるリテール軍団。

セールスの決め手は「目で殺す」

コンプライアンスマニュアルに「目で殺すべからず」と明記するべきだな。

だけど、ルックスにも目で殺すすべも今ひとつと自覚している平凡なわたくし。

あれだけじゃ、どんな人間なのかなんてとても分かる訳ないよな。

まあ、いま僕は生きているのだから、即刻断罪されることは無いのかなあ。

今更ながらに、どれだけ僕にリスクがあつたかなんて想像してしまふ。

みどりにとっても大ママの反応は意外だったらしく、
今夜はおとなしく自宅に帰るとの連絡なのでした。

・
・
・
・
・
大ママって中村玉緒に似てるなあ。

過去

そして、次の週の土曜日。

太田家に再度訪問する日が来た。

なにか準備するって言う事だったけど、なんだろうな。それに、みどりに内緒で来ちゃった事も後ろめたい。

「おお、どうぞどうぞ……」

予定より10分ほど早かったけど、

教授の反応は、長い間待っていらしたように思われる。

そして、先日の庭が良く見える座敷に通された。

あれ、先客がいたのだろうか。

教授の奥さんではない人の気配に気がついた。

「お邪魔だったのではないでしょううか？」

丁寧に確認してみる。

「邪魔じゃないわよあ！」

聞き覚えのある声がある。

中村玉緒がそこにいた！

状況を飲み込めない僕を尻目に、

大ママの主導で話は進んでいく事になった。

「あなたは銀行屋さんだから、私達から説明するより、これを見もらったほうが理解できると思うわ」

茶色の封筒の中に入っていたのは、登記簿謄本だった。なるほど……

謄本には衝撃的な記載があった。

でも、僕は大大ママが太田家にいるとわかった時から、銀行員のアンテナが働いていた為か、冷静にその事実を受け止める事ができた。

謄本から知りえた現状と、教授・大ママから語られた事実により、次のような事がわかったんだ。

太田家の不動産には、湯葉沢産業の抵当権が設定されている事。
太田家には湯葉沢産業に約3億の負債が存在する事。
その負債は、スナック売上げから、歩合で得られるみどりの給与より

返済されている事。

謄本の履歴で知り得る限り、かつて複数の金融機関が担保設定して巨額の資金を

太田家が経営する酒蔵に融資していた事。

経営難となった太田家は、金融機関の支援が打切られ、資金繰りに窮していた所を

湯葉沢産業に救われた事。

太田家への金利は驚くほど低金利である事。

太田家と湯葉沢産業にはただならぬ関係がある事。

そして、

みどりには離婚歴がある事・・・・・・・・・・

重い重い扉が開き始めたんだ・・・・・・・・・・

とつ、とにかく最後の話は俄かに信じる事が出来なかった為、

それ以外の情報を、頭の中で精査していったんだ。

確かに全国的に見ても、造り酒屋は大変な業種である。

衰退業種といっても過言ではないな。

吟醸新時代ともてはやされている今日、成功しているのは一部の蔵元だけで・・・・

焼酎の全国的な市場拡大とあいまって、
倒産・廃業なんていうのも珍しいことではないんだ。

ただらなぬ関係というのは良く分からないけど、
これだけの資金を提供できるのだから、
法人としての湯葉沢産業はたいしたものだな……

………現実逃避

謄本の甲区を開く。

5年前に、教授に所有権が移転している。
相続登記なのか……

抵当権はそれ以前からあるようなので、
保証債務も相続した事になるな。

そして、謄本の乙区を開く。

それにしても、過去の抵当権はひどいな……

特に式番抵当なんて節操が無いとしか言いようがない。

………って、ウチの銀行かよ！

先輩達の過去を汚すようで申し訳ないけど、

時折、バブルとは銀行の責任が甚だしいと実感する。

歴史を紐解いていくと目を覆いたくなるような傷跡は多いんだ。

平成一桁後半から銀行に入行した僕達にとっても、

未だにバブルは現実となつて目の前に立ちほだかる。

貸す側と借りる側。

銀行では当たり前の事なのだけれど、

どちらも盲目になった時代があつたんだね。

………恋も盲目なんだけれど（泣）

ついに最後の情報を検証してみる。

名前の情報が一致しなかった理由が分かった。

林姓は元夫の姓だったんだな。

スキミング被害に遭ったカードは県外の寮店だった。

結婚して暮したのが、その街だったのだろう。

確かにカードの名義は林姓だったと、今更ながらに思い出す。

その時は、まさかこんな展開になるとは思っても見なかったわけで・

・・・

短期的な記憶で事務的に処理していた証拠だったね。

そのほかにもサインは多くあったのだから、

察してあげられなかった僕が悪い。

継母に新しい命が宿った事を知ったのならば、

勘のいいみどりの事だ、この家に自分の居場所が無くなるって事を理解したんだろうな。

世の中には甘い誘惑は多いわけで・・・

家を出る事に憧れての結婚なんてのは、

ありがちな話なわけで・・・

ん？

どっかで聞いた事ある話だ・・・（血の気が引く）

「さて、本題なんだが」

教授があらためて話しかける。

もう僕は何を聞いても驚きません。

とうに峠はすぎてますから（解脱）

「田原君はみどりと一緒になる気はあるのかい？」

・・・いつ、今それを僕に聞くのかああああ！！！！

中村玉緒は笑ってらっしゃる。

理解

太田家も教授の両親が経営から退いてからは、酒蔵を親戚に任せて一線を退いたらしい。

現在は、親戚の集団経営といったところか。

けれども、従前からあった保証債務は放棄される事無く、

太田家当主となった太田教授に相続されたらしい。

経営権は欲しくても、保証債務はいらなん、まったく都合のいい話だ。

銀行員の僕としては耳が痛い話でもあけど・・・

それだけ、名門の家を守るのって大変な事なんだな。

教授からの質問に、どう答えようかと戸惑った僕を察してか、大ママが会話を变えてくれた。

「私からもお願いがあるのよ・・・」

別れなさいと言うような内容でないことは想像できた。

でなきゃ、教授の前に大ママは姿を現さなかつたはずだ。

この前の偵察といい、なにを僕にお願いすると言つのだらう。不安の晴れ間は見えてこない。

「簡単な事なんだけど、

大変な事でもあるお願いなのね。」

「・・・指詰めるなんて言わないでね！

「目立たないで欲しいのよ。」

そのお願いの意図は理解できなかった。

「つまり、デートすんなって事よ」

「????????」

「ママって仕事は、思わせぶりが仕事なのよ。」

なるほど、要領を得ました。

飲みに行くって事は、ストレス発散が大きな理由なのだろうけど、若いママがいるスナックの生命線は「思わせぶり」なんだな。

男の下心を上手に利用して、顧客を増やす事が、

『ママ』の仕事であり、「思わせぶり」が『ママ』の器量なんだ。
……俺は引いてたけどなあ。

夜と昼が逆転している二人には、デートすることなんて無かった。
デートするなって言われても、時間的に無理だと思ったんだ。

「例えば、外食をしない。一緒に買い物 shouldn't なんてのが基本よ。」

……しましたあ（汗）

「アイドルはウンチしないって聞いた事あるでしょ？それと同じ。」

良く分かりました。僕も今日からウンチしません……（混乱）

太田センセのお嬢さんを預かっているのだから、

悪い虫が付かないようにするのも、ウチの仕事なのだと言う大ママ。
変態男の件以後、ウチのアパートから通っていた事も、
すべて把握されているようだった。

……すごい情報網をお持ちなのね。

その際の、僕の誠意ある対応が認められて、その後の恋愛は黙認してきたとの事。

債務の件やみどりの過去等を、後に僕が知る事になれば、
僕にとっても、みどりにとっても不幸な事であると心配した教授が、
大ママに連絡をしてくれて、今日の間を設けたようだ。

良く考えてみれば、18歳から22歳までの間に、
空白の1年間があることに気がついた。

例えば、何年何月からどこのお店に在籍してたとか、過去の『仕事』について話を聞いた情報を思い返した。その1年間で、結婚して他県に転居してた時期なんだろうな。

夜の店での顧客の話はとても面白い。

だから、過去は聞きたくて聞いたのではなくて、

そんな面白いエピソードがあったなんて話の副産物だ。

みどりもまた、僕の銀行の顧客の話も面白がって聞いていた。

お互いに違う世界に暮らしているから、その世界では当たり前でも、自分にとっては非常識と思う事はいっぱいあったわけで……

銀行員の僕は、顧客の話といっても、それを特定される個人資産とか、

個人情報といった類ではない。

僕がそんな事を言えるわけない事を彼女も知っていた。

みどりも話の中で、個人名とか法人名とか特定させる話は絶対にしなかった。

伏字にすると、話の前後で分かっちゃう場合は多いのだが、みどりはそんな話もいっさいしなかった。

さすが、社会学教授の娘だ。

『コンテキストによる理解』ってのを自然に理解している。

「僕は真剣にみどりの事を考えています。

今日の話をお伺いして、理解が深まったと思っています。」

一通りの話を聞いて、お茶をご馳走になったあと、正座をして教授と大ママにこう伝えたんだ。

愛の別名は理解である。

僕はそう考えている。

籠の中の鳥

こうして、太田教授と大ママとの三者面談は終わったんだ。

ぼんやりとではあるが、点である情報が、線として繋がっていく・

・

複雑な家庭事情と、太田家と湯葉沢産業の関係。

そして大ママとの義理と人情の世界。

みどりの人生には幾つもの柵が、螺旋のように絡み付いているんだね。

「みどりは籠の中の鳥なんだ・・・・」

とぼとぼと歩いていくうちに、考える事をやめてしまう。

やめると言うより、停止してしまった。

頭が働かない。

事実は想像をはるかに超えていたのだから。

ふと気がつくと、教授と会った公園が見える。

またも、ふらふらと迷い込み、あるときよりも控えめにベンチに座った。

「離婚暦か・・・・」

そうつぶやいて僕は思考のスイッチを切った。

『もしもし！おにーさん！！！！』

「・・・・・へっ？」

「こんな所で寝てちゃ凍死するよ！」

警察官がたっている。

うつ！！！！さぶいいいいいい！！！！！！！！！！

思わず初冬の公園で就寝。

銀行という鎖につながれた僕だって、

ある意味、籠の中の鳥と同じなのかもしれない。

世間ではなんでも出来ると思われがちな銀行員であるが、意外なほどに、つぶしがきかない。つまり、使えないんだ。多くの銀行員は自由を手に入れたら、そのまま行き先を見失い、野たれ死んでしまうだろう。

銀行員のスキルなんて、所詮そんなものなのだ。

いくら知識を習得しても、それだけでは生きる糧とはならない。組織を離れ、培ったスキルを頼りに1人で生きていく事は難しい。

そんな事を考えながら、現状のみどりは、自由こそ無いけれど、守られている事実も理解する事が出来た。

「夜の商売は自ら望んだはずが無い……………」

それって、僕の常識であって、

みどりにとつての常識ではないのかもな……………

そつえば、もしみどりと僕が結婚したら、

義理の母親は滝口裕子か!?

……………みどりの離婚暦よりそつちの方が嫌だ。

結局その週末に、みどりと一緒に過ごす時間は無かった。

日曜日には、系列店のミーティングがあるとかで、忙しい模様。

いまでも、なかなか帰らない団体顧客の応対で疲れたときなど、そのまま自宅に帰っちゃうことは良くある事なんだ。

でも、一緒に過ごす事はなかったにせよ、

電話も来なかったというのは珍しかった。

勘のいいみどりの事だ。

三者面談について察した可能性もあるな。

……………シックスセンス作動中か(汗)

当然ながら、銀行業務に集中できないまま迎えた月曜日。

当たり前であるが、僕の気分に関係なく窓口が開いていく。

『へい、らっしゃい!』

と、寿司屋風に威勢良く挨拶してみたら、

ちよつと気分も晴れるだろうか？

……くだらない事を考える。

そんな中、あるお客様がテラーより誘導される。

いろいろ考えても仕方が無いか……

銀行員の仮面を被り、頭の中を切り替える。

僕はいつものように「銀行員」となった。

「いらっしゃいませ……」

そのお客との出会いは、悩める僕をさらに悩ませる事になったんだ。

相談

白装束に身をつつまれた謎の二人ずれ。

「……………どういったご相談でしょうか？」

先が思いやられる事は明白だった。

「融資の相談に参りました。」

私も『参りました』と言いたい所だが、銀行は顧客を選べない。

こんな素晴らしいお客様を誘導してくれた人が、

遠くで目を細めて合図を送ってくる。

……………お局様たあ（涙）

「実は、神社を建設するための資金が必要なんです。」

唐突に申し出るお客様。

もちろん、邪険には出来ません。

民主主義とは人の話を聞く事ですから。

「どういったご計画でしょうか？」

実際、宗教関係は難しい。

地下鉄サリン事件以来、新興宗教への銀行の见解は厳しいものがある。

振興宗教でも、真面目に活動している団体は多い。

でも、際立つて巨額な詐欺事件等を引き起こした団体があった事も、事実なのだ。

だから本件の相談も、厳しい審査になる事は必死である。

二人ずれは親子であろうか。50代と思われる女性と、

もうひとりとはだ20歳を超えた程度の若いおにちゃんって感じ。

顔立ちとはごく普通の様子なのだが、白装束という姿には違和感がある。

なんでも、うちの子が突然神様になつたらしい。

そして世の中を救済する事が使命だと啓示を受けたとの事。

神様より世の中を見通せる千里眼を授かったので、

救済する為の施設が必要なのだとか……

そして語られた恐るべき事業計画！

なんと、総工費20億円！！！！

………いったい、何を創ろうとしてるんだっけか。

銀行員の仮面を被ったとしても、

これ以上、表情を隠す事は限界だ。

冷静さをなんとか保ちつつ返済計画を訊ねてみる。

「ご返済の財源はどのようになりますか？」

「お布施です。」

………商談メモを取るのをやめた。

みどりも時折千里眼というか、勘がいいというか、

いわゆるシックスセンスみたいなものを発揮する。

だから、以前は全く信じていなかったそのような世界を、

完全に肯定はしてないまでも、否定もしない程度に考えていたんだ。

銀行は大抵どこもそうだろうが、

新規融資の案件は即答できない。

とりあえず大筋の聞き取りを終えたので、

後日連絡をする旨説明して、お引取りを願う。

その帰り際に……

「不憫よのお……」

時代劇でしか聞いたことの無い言葉だった。

ほとんど喋る事の無かった神様こと若いおにいちゃんが、僕に向か

ってそう言ったんだ。

「なにか………」

それしか返す言葉はなかった。

「耐えてばかりでは先が見えん。行詰った時、北西に待ち人だ……」

そういい残して、神様は帰っていった。

……壺とかのパンフレットありますか？

あんしん銀行では、新規案件の場合、金額の大小に関わり無く、

『合議』と呼ばれる役席者全員の会議をします。

得意先・融資・事務の3部門が情報を持ち寄る事で、

顧客に対するリスクの軽減と、取引深耕を図るのが目的だ。

しかし……これ合議にあげたら「何考えてる！」って言われるな。

でも、面白そうだからあげちゃえ！

……好奇心が勝った。

結果は当然否決された。

「なに作る計画なの？」

「……要塞です。」

でも、神様の最後の言葉はとても気になったんだ。

絶対に僕に不幸な事が起こるって予言されたんだよなあ。

その日の夜はまったく寝付く事ができなかった。

不安の種はいつぱいあるのだから。

ピロピロピロピロピロピロ……

浅いながら、もうとうとしていた頃、
みどりからの電話がなった。

「仕事終わったのかい？」

これから来るって連絡なのだろう。

週末連絡が無かったことを思うとちょっとだけ安心する。

「ちよつとおおお！！！！よっぱらっちゃいましたあああああ！！！！」

スナックのママやつてくるくらいだから、

酒にはめっぽう強いみどり。

下戸の僕とは正反対だ。

でも、こんなに酔っ払ったみどりを見るのは初めてだった。

電話では要領を得ないほどの乱れぶりに、

今居る場所をなんとか聞き出して迎えに行く。

僕のアパートに強制収用だ。

そして家に着くなり、玄関で大の字になる。

「やれやれ……………」

眠れず悶々としていた事などすでに忘れた。

あれ？みどり、なんか手に持っているぞ。

なんだろう……………」

『モ テーローザ七味唐辛子』

……………最低だ。

ズル休み

化粧も落とさず眠っちゃったみどり。

お肌のケアは人一倍気をつかうと言っているんだけど……風呂に入ってから休まないと、疲れが取れないだぜ……そう考えている僕もほとんど寝ていないので、

人の事をどうのとは言えないのだけれども。

横になるみどりを見つめながら、

そんな事を考えていると、突然立ち上がるみどり。

あまりにも急で、しかも素早かったので、驚愕する。

「どうしたの？」

「……ぎもゝぢわゝるゝいいいいいい」

よくもまあ、でるでる……

コレでもか！というくらいゲが出る。

アイドルはウチしなかったんじゃないのか？

水を片手に背中をさすりながら、

すっかり神様の言葉など忘れている。

ようやく落ち着きをとりのどし、なんとか化粧を落として御就寝。布団を顔までかけて寝ている。

いくら、夜の商売とは言え、前後不覚になるまで酔っ払うなんて、お前は女の子なんだぞ。

この前の変態男の件もあるし、お客だって危ないのは何人も居るんだから……

「……大丈夫だよ。」

不意に話しかけられた。

当然僕は驚いたんだ。

寝ているものとばかり思っていたのだから。

独り言いつてたのかと慌ててみるが、

声を出さなくても、みどりなら感じる事が出来たのかもしれない。

とにかく、寝ているみどりに対して僕は無防備だった。

「どんなに酔っ払っても、

お客さんと寝た事なんて一度も無いんだから……」

……出社まで30分前だ。

みどりから、その言葉を聞いた瞬間、

これから始まる話が、お互いに真剣であり、かつ重要なことである事を確信した。

「今日は銀行休むよ……」

「無理しないで……」

「大丈夫、有給はいつぱい残ってるんだ。」

有給とは銀行用語で『絵に描いた餅』なんだけどね。

そして、銀行にズル休みの申請だ。

電話をかけながら、理解力のある出納の子が出てくれる事を強く念じる。

「おはようございます。あんしん銀行でございます」

やった！思いは通じだ！！

体調が悪いので、休ませてほしい事と、

有給の代理申請お願いしたい旨を伝える。

「風邪ですかあ？」

心配してくれる彼女。

その優しさにちよつと罪悪感を感じる。

すると突然電話にノイズが走る。

「なんだ？田原、風邪かあ！？」

「…………お局様、電話強奪。」

1人暮らしの風邪はひどいものです。

40度の熱がでても、1人じゃ何も出来ないからね。

そういう時こそ、支店の同僚は有難いのだが、

今だけはそっとしておいてほしいんだ。

「つらいときは…………」

こなくていいよ、お局様…………

「彼女を呼ぶんだよ。ふっふっふっ……………」

ちよつとまってる！

今から殴りに行くから（怒）

アイスエイジ

銀行に入ってはじめてのズル休み。
想像より後ろめたさを感じなかった。

そのことは自分自身驚きでもあったんだ。

僕は「一線」を越えられる人と、そうで無い人を明確に線引きしていた。

例えば、一度でもお金を流用出来る人間は、

2度目に同じ状況になるとき、躊躇無く「一線」を越えるだろう。

銀行業務でも、サラ金のおまとめ救済した顧客の約7割が、

再度そのような高利に手を出しているデータがあった。

一度甘い汁を吸った人間が舞い戻ったと言うより、

その人間の資質による場合が多い。

だから、恋愛であろうが仕事であろうが、

決められた事を遵守できない行為は、苦痛でしかない。

後ろめたさは少なかったとは言えゼロではないんだ。

いくらみどりの為だといっても、

銀行への裏切り行為はこれが限界だった。

「タダの有給なんだ・・・」

そう何度も言い聞かせる事が僕の自己防衛であり、弱さなんだ。

二人で話し合いをするには、ちょっと時間が必要でした。

まだみどりの体はアルコールが抜けていない状態だったからね。

朝とは違って、深い眠りのみどり。

穏やかな寝顔を見つめているだけで、幸せな気分にもなれる。

同時に、不安や罪悪感といった葛藤にも襲われる。

時刻は午後3時を迎える頃でした。

「銀行の窓口はもう終わりだな。」

携帯にも連絡が来なかったのだから、

もめそうな融資案件なんて無かったのかな。
ひとまず安堵する。

『いしやあ

きいもおおおお焼き芋お』

静寂を破るスピーカー音。

「3本買ってきて!」

・・・・・・・・・・・・・・・・お目覚めだ。

僕が1/2食べる間に、2本完食するみどり。

そんなに慌てなくても・・・・・・・・

みどりの出勤まで3時間。

話し合いには十分な時間があるな。

ズル休みまでして造った時間だ。

最後の扉を開けようと、僕は勇気を振り絞る。

「ちょっとまって!」

うつ、シックスセンス発動か?

「トイレ行ってくるから・・・・」

・・・・・・・・芋食ったからな。

「彼氏と別れたって程度だよ・・・・」

離婚について、先制攻撃を受ける。

まだ核心部分の質問は一切していないのに・・・・

18歳で家を出ると決意したとき、

まず目標であった1人暮らしをクリアした時点で、

次は家庭だと勢いで結婚したとの事。

相手は高校時代の同級生。

でも、現実には甘くは無かった。

生活力の無い二人の生活は、すぐに苦しくなったとの事。

生活の為にバイトで始めた夜の世界。

その収入が入るようになってから、日に日に邪に変わっていく夫。察するに、ギャンブルや浮気なんてのがそうなんだと感じられた。相手も18歳じゃ、世間の誘惑に耐えられなくても不思議ではない。同じくして、実家である太田家の財務状況を知る所となり、夫と離婚して湯葉沢市に戻ったのだとか。

「大抵男の人はそうなんだけどさ……」
邪になるって事か。

結婚相手だつて、みどりが選んだのだから、当初はそんな感じではなかったんだろうな。

「……じゃ、俺ってどうなの？」

「ははっ、田原さんは真っ白なんだあ。」

それって、いいことなんだろうか？

もつとも、何度も真っ白に燃え尽きてるからね（涙）

「それって、オーラって事？」

でも、実はみどりも良く分らないらしい。

頭の中に、映画のような映像が凝縮して入ってくる感じなのとか。ラジオのチューナーみたく、周波数を合わせなければ受信は出来ないらしい。

オーラにしても、目で色が見えるのではなく、感じ取るとの事。

僕の理解を超える話だ。

でも、それが真実なのだという事は理解できたんだ。

「……オーラの泉みたいだ。」

そーいえば、お客さんから江原 之に似てるっていわれた事あるな。ちよつとシヨックだったけど。

大ママからは、僕と教授との三者面談をした事は、報告を受けていたとの事。

・・・やっぱ、面談時の僕の対応次第では、大変な事になった可能性あったな。

当然、過去を知られたみどりにとつても、その週末に僕と逢うには勇気が必要だった訳で……酒の勢いを借りて僕に連絡くれたんだ。

気をつかってくれたのは、みどりの方だったんだね……

そんな話が進み、僕とみどりはいつしか不安を忘れるほど、お互いを理解することができたんだ。

僕にとっては、やはりシヨックな内容もあったけれども、理解する事で乗り越えられると確信していた。

「どんどんどん！！」

ドアをたたく音が聞こえた。

大ママだろうか？

理解者であるようなので、来たとしても不安は無いんだけど。

「田原君元気かあ！！！！！！」

張り裂けんばかりの大声の持ち主に心当たりがあつた。

[illegible]

すっかり、ズル休みを忘れてた。

同僚に対する備えは全くなし・・・・・・・・・・無防備すぎた。

みどりもシックスセンス発動の余地無しだったろう。

まずは、みどりに押入れにでも入ってもらおうか？

風呂場の方がいいか？

なんて考える間もなくドアが開いたんだ。

支店長進入!!!

あつ、焼き芋買った後、ロックしてなかった

た。

「あつ、こりゃ失敬！」

支店長の声が部屋全体に響き渡る。

僕の部屋に女性がいるとわかった瞬間、一応たじろぐ支店長。ドリンク剤の差し入れを持ってきてくれたらしい。

それはとてもありがたいのだけれども、今は頂きたくなかった。すまんすまんと帰ろうとする支店長。

危機一髪！持ちこたえたか？

背を向ける支店長に対して、みどりが突然……

「御心遣いありがとうございます、支店長……」

……こうやって、僕に氷河期がやってきたんだ。

結局、支店長に僕とみどりの関係がばれちゃった。

当然ズル休みだったのもばれたんだけど……

みどりも舞い上がってしまつて、

状況理解できなかつたとの事だつたけど。

次の日は銀行に行きたくなかつた訳で……

出社すると、朝一番で全員が会議室に集合して

僕の事を待っていたんだ……

裁判

険悪な雰囲気であることは、支店に入ってすぐわかったんだ。誰一人として僕と目を合わせようとはしないのだから。

まあ、無理もないけど。

僕の部屋にいる女性がみどりだと気がついた時の支店長の顔……この世の終わりがあってほどに凍りついていたっけ。

一言も喋らず帰って行った支店長。

その後支店でどんな事になったかなんて、簡単に想像がつく。

全員が集合しているのだから、その事についての議案上程か……
……いや、裁判だな。

こうやって、僕の大陪審が始まった。

「陪審員の皆さん！」

差し詰め、このような心境なのだろう。

支店長が声高らかに演説を始める。

「昨日、大変な事実が判明しました……」

彼女が水商売をやっている事は罪なのだろうか？

もしこの場でその事について議題にでもされるのならば、僕は何か何でもみどりを守ろうとするだろう。

もし、その事で被る不利益を後悔するようならば、

僕は僕を許さない。

太田教授と大ママに答えを出したあの日から、
腹はとうにくくっているのだ。

「田原君がとんでもない事をやらかしてくれました。」
ついに罪状が告げられる。

体の奥底から、沸々と煮えたぎるような感覚があふれ出す。

来るならこい！！！！！！

「田原君はズル休みをしました。」

・・・・・・・・・・そっちか（泣）

出だしは見事に裏切られた。

この際ズル休みはいいでしょ。

・・・・・・・・煮えたぎる感覚は奥底に消えた。

「田原あ！貴様に愛社精神はあるのかあ！！！」

己に正しく生きる。

銀行員の使命だ。

たしかに、僕はズル休みしました。

けれど、有給申請はしたんだけどな。

理由はどうあれ、プライベートな事なのだから、

『家事都合』のひとくくりでいいじゃないの？

言いたいことはわかるけど、その為に陪審員（支店総勢22名）を、
こんなに集める事ないのに・・・・

『22人の怒れる男』って、演劇より9人も多いじゃないですか。

判決の決まっている裁判なのだと、その時すでに気がついていた。
相変わらず支店の皆は眼をあわせようとはしない。

全員が敵になってしまったのだらうか？

支店長の怒りよりも、そっちのほうに心にかかったんだ。

「それに貴様は・・・・・・・・」

多分これが本題だろうと、その場に居合わせた全員がそう思ったに
違いない。

「水商売の女のヒモになっていると聞くうううううう！！！」

・・・・・・ヒモって、働かない人のことだろ？

裁判は、まだ始まったばかりだ。

「支店長、それは聞いたんじゃない？ 見たんでしょう？」

住居不法侵入の疑いがあるらしいじゃないですか！」

・・・・・・とてもそんな事は言えない。

「支店長！」

全員の視線がその人を見つめた。

突然の発言に静まり返った会議室の空気がいつそう張り詰める。その声は、お局様こと、大木代理から発せられたものだった。

「田原さんからは休暇届を受理しています。」
えっ！？

その場の全員が驚いた。

支店長がズル休みだと言ったからには、休暇届は不受理だったという事なのだ。

僕でさえ、不受理はしょうがないと思う範囲なのだから。

「支店長の決済後、本社人事課宛通知済みです。」

おっ、お局様あ！

我、援軍得たり。

心の底から感激し、こう思ったんだ。

「男らしい・・・・・・（ぽっ）」

銀行の支店では支店長の権限は絶対的だ。

良くも悪くも、銀行の支店単位では支店長一家であるのだから。長いものには巻かれなくちゃ大変なんだ。

「なにか問題があるのでしょうか？」

お局様の演説は続いた。

しかし、当然ながら顔面は蒼白であり、立っているのがやっとの状態に見えた。

そして両側の人に支えられながら席に座った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙が続く。

「・・・・・・・・ズル休みが問題なのではない。問題なのは嘘をついた事だ。」

支店の皆を欺いたと言われれば、さすがに僕も辛かった。

風邪である事を信じ、その旨担当顧客にも説明してくれたであろう、同僚の立場を考えれば、プライベートを理由に遊んでいたとされても返す言葉は無かった。

それに、お局様にこれ以上の迷惑はかけられない。

もう、後戻りは出来ないんだ・・・・・・・・

「支店長、二人だけで話できませんか・・・・・・・・」

天王山はやってきた。

判決

もう時刻は午前9時をまわっている。

窓口は業務開始の時間だ。

皆は開店時刻に間に合ったのだろうか？

もう戻る事は無いであろう仕事の事が心配だった。

お局様は大丈夫なのだろうか？

正直、あの場面で助け舟を出してくれるとは、思ってもみなかった。嬉しい反面、彼女の今後を考えるならば、なんて事をしてくれたのだと、

自責の念にかられる。

「銀行への反逆だよ。嘘をつく、ふしだらな行動をする。」

そうということが銀行全体の信頼を失墜させる……みたいなお小言が延々と始まった。

「お気に入りの飲み屋のねえちゃんが部下に取られたのが、面白くないんですね！」

つて怒鳴りたいくらいにうんざりだ。

さすがにそんな直接的な言葉は発することは無かったけれども……二人だけの話し合いは、支店長の一方的な僕への非難で終わりを迎えるそうだった。

感情的になる事は、僕にとって有利になることなんかありえない。

理屈ではわかっているけれども、みどりに対する「水商売」とのレッテルに、

理屈ではない僕の心が叫ぶんだ。

「今回の件に、みどりののは全く関係ありません！」

これが、唯一支店長の言い分に反する答えだった。
支店長を否定する。

銀行への反逆がここで確定された。

「……本社に連絡するから。」

核兵器のボタンに手がかかった。

この手の裁判沙汰で、支店長の前任支店では何人かが転勤・転籍させられたとの噂を聞く。

融資・営業知識はからつきしたが、行動力にかけてはウチの銀行でも間違いなく

トップクラスだ。そして、躊躇無く核のボタンを押せるタイプの人間だ。

「……この人があの人ならば、テドン2号はすでに日本に着弾しているだろうな。」

地元経済界の懇親を深める目的と称した海外出張（旅行だ）。

どうしても取引先のお客から断れないとの理由により稟議提出（支店経費で行く為）

支店長、銀行員人生最高傑作と称される（自称）稟議を書きあげ見事海外旅行をゲット

総勢40名の財界人の団体旅行にご出発。

そのなかで、取引先は1社だけなんだが……

現在に至っても、残り39社とは取引が成立していない。（謎）

その旅行で支店全員にお土産を買ってきたんだ。（もちろん経費でもらったお土産は謎のフィリピン人ダンサー人形。

支店総勢23名。その日のうちに21体が消息を絶つことになる。

東南アジアへの親父団体旅行なんて目的はひとつだ。

慰安旅行をかねたバカンス……と称された買ツアー。

後に湯葉沢支店では、「いあーんばかんす事件」と記録される事になる。

「君とは短い付き合いだった・・・」

それが、支店長の最後の言葉だった。

こうして、第1回の大陪審は幕を下ろす。

途中退席した支店の同僚に挨拶することも許されるまま、僕は支店を放り出された。

『自宅謹慎』

仮判決が言い渡された。

手詰り

ひとり誰もいないアパートに帰る。

内容はどうであれ、支店長に楯突いたのは事実だ。

「反逆者になっちゃったな……」

みどりには、問題ないとしか言っていなかった。

僕が不安を言っちゃえば、自分を責めることは間違いないのだから。それに、決してみどりの責任ではない。

銀行員田原聡としての問題なんだ。

平日、こんな時間にはアパートにいるはずもない。

今の僕は、ぼんやりと壁を見つめるしかやりようが無かった。

昨日はみどりと一緒だったのだから感じなかったのかもしれない。

「チツチツチツ……」

今日はやけに時計の音が騒がしい。

腹をくくった時点で、こんな事は想像できた。

それより、反逆者ほう助の罪を被ったお局様が心配だった。

普段からなにかと面倒見が良かった彼女のことだ。

吊るし上げ状態の僕を、ただじっとは見ていられなかったのだろう。

「なんとかしなければ……」

でも、自分自身の力ではどうにも出来ない現実。

目の前に与えられた試練、その頂は遙か彼方だ。

「しかしお局様、男の中の男だな……」

・・・・・・おい、殺されるぞ（汗）

正義とはなんだろう。

問題を引起したという点では、悪は間違いなく僕だよな。

支店長が正義だとすれば、そう正義を証明する人って・・・

もちろん、本社の人達なんだろう。

もつとも縁遠い部署だからな。

その人達の正義を証明するのは誰なんだう・・・

困った。

手詰まりだ。

・・・・・・待ち人は「北西」だったな。

困ったときの神頼みは僕も同じだ。

「北西」

この方角に身に覚えが無いわけではない・・・

僕の実家がある方向なんだ。

勘当になってからの１０年間、一度も自宅には戻っていなかった。

たまに、母親が心配して訪ねてくる事はあったけれども、

それが親父の耳に入って、母親に迷惑がかかる懸念から、

極力こちらからの連絡はしない様にしてたんだ。

ん？まてよ。

神様は「北西」とは言ったが、実家とは言わなかったな。

地図を広げて実家のさらに北西を探してみる。

山・山・山・・・・・海・・・・

・・・・・・ハバロフスク！

ロシア人に知人はいない（汗）

そんな事をしているうちに、みどりが帰宅した。

「どうだったの？」

心配するみどり。

当然といえば当然か。

表情は隠していても、僕の動揺なんて、

シックスセンスの無い人だって感じ取れたはずだった。

それに、僕の不安はみどりの不安であり、

みどりの不安は僕の不安でもあるんだ。

冗談でもクビになりそうだななんて言えない。

「クビになっちゃうの？」

・・・黒ヒゲ危機一髪あたりでした。

この娘には嘘も通せないんだっけな。

今更ながらに嘘もつきたくないし・・・

正直に、今日の経緯を説明しよう。

そう思った矢先、みどりが泣き出した。

「ごめんね・・・」

いつも、みどりは先制攻撃だな。

「大丈夫だよ。悪い事なんてしてないんだから・・・」

強く抱き寄せそう囁いた。

今出来る事はみどりを抱きしめる事だけだった。

北西に進路をとれ

こうして無期限の連続休暇が始まったんだ。

何をしてすごそうか。

つぶしのきかない銀行員。

元銀行員と言ったほうがいいかな。

みどりのスナックで雇ってもらうかなあ。

いや、無理無理。

ママに男が出来たって知られたら、

いままでのお客はドン引きだぞ。

それこそ、大ママとの義理と人情がすたるというものだ。

どうするべきか……

答えが出ぬまま一日目を終える。

二日目の夜、お局様から電話が来た。

まったくの自分勝手な話であるが、

この二日間、とても僕からは電話なんてかけられなかった。

でも、とても心配していたわけで……

お局様の声を聞いた途端、声を出して号泣する。

「こら、田原ちゃん。泣くんじゃないの！」

……やっぱりお局様。あんたのことは『兄貴』と呼ばせてくれ！

僕が咎められる事は、しょうがないと思う。

でも、お局様まで咎められることには納得できない。

電話で聞く限り、彼女にまでペナルティが課せられる可能性はありそうだ。

直接、人事部に連絡できる支店長にしてみれば、

都合の良い事だけを詳細に報告できる。当然都合が悪い事は報告しない。

しかも、情報はポリウム満天に加工も出来る。過去の歴史はすべて勝者の歴史である。

だから、学校で教えられた歴史は、必ずしも事実であるとは限らない。

そのことは、僕たち現代社会の現場でも続いている。

お局様だけは、なんとか守らなくてはいけない。

僕が辞表を出せばすむ問題では無くなってるんだ。

・・・・・・・・・・なんとかしなくては。

程なく二回目の電話が来る。

支店の同僚かな？

お局様の話では、支店の同僚間では僕に同情的であるが、水商売の女性と交際している事には意見が割れているとの事。

正直、半分の人が理解してくれたということに、救われた気がした。だから、同僚からの電話だと思って出てみると、想像にもしなかった相手からの電話だったんだ。

「お久しぶりです、聡さん・・・・・・・・」

その声の主は、親父の私設秘書、遠藤氏だったのです。

「お困りではないですか・・・・・・・・」

実に早いお耳で。

まあ、彼らはそれを商売にしているといっても過言ではない。

政治の世界で『情報』とは最大の武器であり『力』なのだから。このタイミングで彼から連絡が来れば、

いくら愚かな僕にしたって何を言わんとしているか察しがつく。

「一度事務所においでになられませんか？」

．．．．．進路は北西にある。

二人から電話が来た日の夜は、
一睡も寝る事が出来なかった。

満月だった月が傾きかけ、北西の空を不安げに照らし出す。

真つ暗な僕の行き先にあつて、

お局様の電話は、力の源になり、

遠藤秘書の電話は、唯一の誘導灯であつた。

だから僕は、まだ夜も明け切らぬ中、月に向かって車を走り出したんだ。

．．．．．2時間後、事務所到着。

早すぎて事務所鍵がかつてる。

誰もいないし．．．．

朝、4時半。

夜明け前．．．．．

月はどっちに出ている

事務所とは、親父の政治活動の事務所なのです。

宗教がかってないほうの与党衆議院議員というのが、親父の肩書きだった。

常時5名以上のスタッフが常駐しており、東京や地方事務所合わせると、

はたして何人の人達がいることやら……

遠藤秘書は、大学院を経由してから政治家の抱持ちになった、いわゆる苦労人タイプの政治家の卵なんだ。

官僚出身の政治家とは違って、方々に鼻が効くらしい。

そのセンスと人脈は、親父の秘書の中でも群を抜いている。

僕の現状は厳しいけれども、親父に頭を下げるつもりは無い！

あくまでも遠藤秘書に会っただけなのだから……

と、苦しい言い訳を頭の中いっばいに浮かべて事務所に来たのだ。

「まだ早すぎたか……」

2時間が過ぎてもまだ6時半。

僕の心の様相を写取ったかの如く、沈みきれぬ淡く白い月が空にある。

「消え入りそうだな……」

しかしながら、不安で寝る事も出来ずアパートを飛び出したものの、事務所が開くまでは、まだ時間がある。

次第に時間を持て余すようになったんだ。

ふと気がつくと、ポストに朝刊が配達されている。

暇つぶしに新聞でも見るかと、車を降りて配達されたばかりの朝刊に手を伸ばす。

「動くな!!」

「？」

「あんたなにやってんの？」

後に警察官二人が立っていた。

なにしていると言われても新聞を読もうとしたのですが……

「議員事務所に不信な人物がいるとの通報があっただよ……職務質問します。あんた、どこからきたの？」

……前科一犯となった。

「……失礼しました!」

遠藤秘書と待ち合わせしている事と、免許証で身分を証明した事。そして、親父の馬鹿息子だという事を説明して警察官から解放される。

しかし、あらためて親父は守られていることに感謝するんだ。通報してくれた人にも、駆けつけてくれた警察の人にも頭が下がるだから、職責を重んずることって大事なんだね。

「聡さん、いらつしやい……」

声は明るかった遠藤秘書だが、決して目は笑っていない。

……遠藤さんは、今回の件を知っているはずだ。

だとすれば、親父も知っているんだろうか？

今更ながらに、なんでこんな所に来てしまったのかと、

不安が募っていく。

久しぶりに訪れた事務所であるが、

主要スタッフは相変わらずの顔ぶれだった。

それは浮き沈みの激しい政治の世界では、珍しい事なんだ。

「それじゃ、奥の部屋にでもいきますか……」

虎穴にいらずんば……

でも、薮蛇つて場合も……
不安は頂点だ。

「喧嘩両成敗つて事です……」

遠藤秘書の口から出たのは、そんな言葉からだつた。

「子供じゃないんだから……」

言われるまでも無くわかつていゝ事なのだけれども、
全くの正論である為、ぐうの音も出ない。

今回の件はかなり詳細まで知っているかの口振だ。

予想より厳しい言葉の連続は、まるで親父に叱られているかの如く
だ。

「結局、聡君はどうなることがベストだと思う？」

「それは……」

その答えがここにあるのかもしれない期待から、
ここに来ているんだ。

それ以上の言葉が続かなかった。

『ぐう……』

腹が鳴つて、「ぐう」の音が出た。

にんじん

腹が減っては戦は出来ない。

遠藤秘書も独身であり、朝食を食べていないとの事で、二人して24時間営業のファミレスで食事をする事になった。さつきとは、打って変わって和やかな表情の遠藤秘書。

「しかし、ひどい支店長だねえ……」
どこまで知っているのだろうか？

僕も知らないような支店長の武勇伝（悪い方の）が、次々と語られる。

でも、どんなに遠藤秘書から支店長の評価が出ようと、
「そーなんですよ！」

なんて、同意する事は出来なかった。

今回の原因は、やっぱり僕にあるわけで……
「……というのが、聡君のところの本社の評価だ。」

「本社？……遠藤さん、どこまで知っているんですか？」

本社の評価と言うからには、情報の出所は間違いなく銀行内部からだ。

それも、僕が及ばないレベルからの発信だということがわかる。
「……みどりの事も知っているのだろうか？」

一方的な視点で評価をされるのであれば、『水商売の女』以上の答えが出るわけも無い。

「みどりはそんな女じゃないんです。」

みどり風に先制攻撃してみた。

「先生も心配しているんだ……」

やはり、親父も知っているんだと諦めの境地に落ちていきそうになる。

ここで踏ん張らなければ、いろんな人に迷惑をかける。

みどりへの思いがなんとか僕を踏みとどませてくれた……

「君だけの人生じゃないんだ……」

公人とその家族は運命共同体である。

それは分かっているんだ。だから、僕は苦しんできた。

山川みどりもそうだった。

太田みどりもそうなのか？

遠藤秘書の厳しい言葉は、親父の代弁だったのだろう。

面と向かって話せない状況は、親父にとっても同じだったのかもしれない。

いままでの銀行での行動も、

プライベートでの行動も、

つまらない意地を通し続けた僕であつたが、

すべて親父の掌の中でもがいていただけなのかもしれない。

「太田家の件も悪いようにするからさ……」

この話は聞きたくなかった。

たしかに太田家の問題は、僕にとっての悩みでもあるんだ。

みどりの『籠』の鍵は、まさに太田家の問題がすべてである。

それが解決しない限り、みどりに自由はありえないのだから。

遠藤秘書の説明は難しすぎて、全てを理解するに至らなかったけど、要約すると次のような話だった。

太田家クラスの旧家を、個人で管理するのは無理がある。

文化財指定のランクにより、管理や補修は国・自治体で行う事。

但し、施設の公開が条件になること。

当然、その対象不動産は所有者から買い取る場合がある。

文化財の管理者として、教授には学芸員の方法もある事（職の保証）

太田教授が、保証債務を相続したのは、太田家の歴史を守るためだったろう。

遠藤秘書の話通りに事が進めば、債務は無くなり、抵当権も抹消する事が出来る。

『太田家を守る』という最低限の保証を考えれば、たとえそこに住む事が出来なくなっただとしても、

太田教授の思いは、後世に受け継がれていくことだろう。

「・・・・・・にんじんだな」

銀行員のアンテナが作動した。

たしかに太田家にとっては良い話だと思う。

遠藤秘書は僕に意図してこの話をしてるんだ。

その先にある答えはそれしかないだろう。

銀行員の仮面に手がかかる。

危険を感じるのかのごとく、僕は研ぎ澄まされていく。

「すみません、ご飯おかわりください。」

・・・・・・遠藤秘書、食いすぎだよ。（朝から3杯目）

一線

「どうしろというのですか？」

藁をも掴む気持ちでやってきてはいるが、

今日一日ここに來ただけで、全てが解決するなんて都合のいい事は考えていない。

遠藤秘書が意図している事、つまり、みどりとの別離を前提とした、太田家の話はとても受け入れる事は出来なかった。

「ああ、銀行に戻つてよ。」

軽く言う遠藤秘書。

「戻れといわれて、戻れる状況じゃないんですから……」

銀行の事は話がついているから心配するな……と言ったきり、それ以上の情報は遠藤秘書から聞けなかった。

聞けなかったというより、聞けなくなったと言った方が正確だな。何故ならば、本件とはまったく別件の、衝撃的な情報を聞いてしまったからだ。

「先日、山川みどりさんの子供が亡くなりました……………」

ショックだった。

現状が現状だけに、これ以上のどん底は無いだろうと思っていた。けれど、さらに底が抜け落ちて、深い闇に吸い込まれていく感覚に襲われた。

『山川みどり』と『田原聡』が超えられなかった一線は、子供という存在があつたからなんだ。

僕は子供を恨むことは一度たりと無かった。

父親になつてもいい……………」

そう思つた事は紛れも無く真実なのだから。

詳細が聞きたい！

けれども、当然ながら今は聞くべきタイミングじゃなかった。銀行に戻れといわれて、「ハイ、そうですか」なんて戻るわけが無い。

先日まで、支店長一家として家族的帰属された関係が、元に戻るなんてありえる話ではなかった。

ひととおり、遠藤秘書の話を頭で精査してみる。

「山川みどりはどうしているんですか？」
早速聞いてしまう弱い私……………」

遠藤秘書から伝えられる、山川みどりの情報が詳細だったのには驚かせられた。

この際、なぜその事を調べたかという事は不問にしよう（怒）
まず、現在では山川秀樹氏は「元夫」から「夫」に変わっている事。亡くなった子供は、ウイルスが心臓を犯して亡くなったという事。それは、非常にまれなケースであった事。

現在は夫の勤務している会社の社宅で暮らしている事。
そして、山川みどりは現在妊娠8ヶ月である事……………」

以前の不幸も身重の体の時だった。

なんで、運命を司る神様は、こんなにも悲しい物語を作り上げてしまふのだろう。

子供が亡くなったという事は、耐え難い事実だが、
今度は、それを支えてくれる本当の家族がいると悟ったとき、
山川みどりにとって、僕の実存は終わりを告げていることを理解した。

「さよなら……………」そして、頑張るんだ……………」

はじめて、山川みどりに「さよなら」を告げた。
けれど、理解が存在する限り、愛は存在し続ける。
そう僕は信じている。

いろいろな思いが入り混じりながら、僕は事務所を後にする。

帰り際、遠藤秘書から銀行に戻れと再度忠告される。

というか、あの口調は命令だ。

太田家への提案も気になったが、

みどりと別れるという命令は一言も無かった。

それが不思議といえば不思議だったが、

言わずとも分かると言う事なのだろうか？

すべての問題を解決する答えが無い事は分かったいるのだけど。

車に乗り込むと遠藤秘書窓を叩いた。

「これから、ご実家に行って下さい。」

それは冗談でしょ、遠藤秘書。

議会が開催中なので、親父はいないとしても、

アレが帰国しているらしいじゃないですか・・・

さつき事務所のひとから聞いちゃったよ。

ぶるぶるぶるぶる！！！！！！

アレとは絶対に会うわけにはいかないんだ。

「・・・・・・考えておきます。」

そう言つて、そそくさと湯葉沢市に帰ろうとする。

「方角はここからだ」と北北西だからなあ・・・・・・」

・・・・・・下手ないわけだ。

アレと会いたくない理由は本編とは全く関係が無い。

番外編の時にでも（無責任な言い方・・・・・・おい、番外編があるの

か
？
)

辞令

無期限の連続休暇は6日目に突入した。

自宅待機との仮判決をうけてからは、

さすがにみどりも僕のアパートには遠慮して来なくなった。

毎日連絡は来るのだけれども・・・

正念場である事はみどりも心得ているわけで・・・

だから、少なくとも自分の存在が、僕にマイナスにならないと判断されるまでは、

遠慮は続くのだろうと思われた。

それが、たまらなく痛々しかったんだ。

シックスセンスなんてなくても、僕には感じる事が出来た。

その日は突然のように電話が続いたんだ。

「おめでとう！明後日から復帰だつてよ・・・」

お局様からの電話だ。

「なんか人事発表らしいけど、役席全員が会議室に閉じこもって出てこないのよ・・・」

人事発表は寮店からのTELでわかったとの事。

湯葉沢支店では詳細がまだ発表になってないらしい。

銀行女性陣のネットワークは光通信より早い。

「支店長、転勤になったつてよ」

「えっ!?!」

喧嘩両成敗と遠藤秘書から聞いた。

支店長だけの転勤で事が収まる事は無いだろう。

むしろ、僕への処分の方が重くても不思議ではないのだ。

それに、支店長が転勤で僕だけ残るなんてのもありえない話だ。

そう考えている時に、またも電話が鳴る。

「本社の中村です・・・・・・・・」

「・・・・・・・・もしかして、専務？」

「明後日から出勤するようにお願いします・・・・・・・・」

裏で何が起こっているのか想像できないが、

間違いなく親父の仕業だつてことは確信できた。

一行員の人事に対して、専務が直接電話をするなんてあるはずが無い。

しかも、「お願いします・・・・・・・・だぞ。」

圧力とかコネとか僕は一番嫌いなんだ。

この一連の動きは、そうだとしか考えられない。

親父と取っ組み合いをした原因も、そこらへんの見解が原因であつた。

これで銀行に戻る線は無くなったな・・・・・・・・

みどり、ごめんな。

職を失つて、食わせる力が無い男なんて、

もう必要じゃないだろうなあ。

「・・・・・・・・食わせるためか。」

今から職探しなあ。

「・・・・・・・・壺でも売るか（本気）」

でも、結局出社する。

様子を見ようと、無理やり自分を納得させる。

久しぶりに身にまとったスーツ。

銀行員にとっては作業着と同じなのだが、

さすがに今日は身の引き締まる思いである。

泥水を飲むつもりで・・・・・・・・

と言った野球選手の気持ちが良く分かる。

そんな不安をよそに、支店の同僚は僕を快く迎えてくれたんだ。

「おかえり！」

「心配させやがって!!」

みんな、ごめん。本当にすみませんでした……

心の底から詫びる僕を、温かく迎えてくれる同僚。

……支店長は？

空席の机に心が痛んだ。

『出社に及ばず』

僕の件だけでの処分ではないとの同僚の話。

今回の件は、きっかけに過ぎなかったとの事。

その内容は、女性関係とも金銭関係とも言われているが、事の詳細は公になることなく、支店長の退場という形で決着がついた。

これは、本社がより長いものに巻かれた結果だと思えた。

まさか、親父が手を回したとは口が裂けても言えない。

「明日、新任の支店長が着任するんだってさ……」

年末が近いというのに、転勤なんて迷惑な話だよな。

原因は僕である事は忘れようも無い。

新支店長も僕たちに巻き込まれた犠牲者なんだな……

あわせる顔がないんだ……

前任の支店長は、関連会社である保険会社にて再雇用されたようだ。

武士の情けというやつなのか？

僕の件だけでは、いくらなんでも『出社に及ばず』は無い。

はつきりした理由が分からないだけに、よくわからないな……

「特約M Xおねがいします、田原さん！」

なんて来たら、一口加入してやろう。(おいおい・・・)

そして、新しい支店長が着任したんだ。

「みなさん、よろしく・・・」

前支店長とは全く違って、物静かなタイプだ。

こういう支店長は引締型の支店長なんだ。

前任支店長の下、いけいけ営業をしていた当店にあっては、まさに適任であると言える。

「早速ですが、辞令交付をします」

えっ、人事は終わったんじゃ・・・

「田原聡君。」

僕の名前が読み上げられた。

「1月1日付、富原支店を命ずる。」

・・・覚悟はしていたんだ。

でも、新任の支店長着任の挨拶と同時発表だとは、思っても見なかった。

富原支店は隣の県にある。

初めての県外支店だ。

・・・元旦なのにおめでたくないな。

僕は、転勤発表をみどりに伝えなくてはいけないんだ。

転勤を伝えたら、みどりはどういう答えを出してくれるのだろう。

我々銀行員にとって、転勤は宿命です。

銀行の人と銀行外の人の恋愛には、必ずこんな決断を経験します。

僕もそのひとりとなった訳で・・・

そして、僕とみどりはこんな答えを出す事になったんだ

クリスマス

辞令

田原 聡

あんしん銀行富原支店 得意先係 を命ずる

年も暮れようとしている最中に発令された、

予想外であって、予想通りでもあった僕の転勤辞令。

今日はクリスマスイブだというのに、

とんでもないプレゼントを貰ってしまった。

でも、その引き金を引いたのは間違いなく僕なんだ。

この事は、銀行員であり続ける限り、忘れる事はないだろう。

年内の営業日はたった4日。

湯葉沢支店での残り時間はあまりにも短かったんだ。

とりあえず、与えられた時間で、年明けから始める予定だった、自己査定の資料作りと、引継ぎ作業を完了しなければならぬ。

普通の休日であれば、なんとか頼み込んで休日出勤って事も考えられるけど、

よりによって年末なんだ。それぞれ家庭を持つ同僚たちのことを考えれば、

とても頼める状況ではない。

とにかく今すぐにでも仕事に取り掛からないと、大変な事になる。

まともにやっても2週間はかかる仕事の量だ。とても4日間では終わるはずもない。

これ以上の迷惑をかけられない僕にとって、与えられた時間を1分でも無駄にしない

努力こそが、同僚に対する償いと謝罪なんだ。

そして「みどりにどう伝えたらいいか？」という難問を先送りする事で、

それは解決された。

「今日は帰れないな……」

謹慎中には有り余ったはずの時間であったが、今はその時間がほしいんだ。

結局イブの日付中には帰宅することはできなかった訳で……日付が変わってから徒歩で帰宅。足取りはとてつもなく重い。

僕は当然なのだが、付き合ってくれた融資課の面々には申し訳ない。家族で過ごすクリスマスイブはとても大切な時間であったはずだ。

思えば去年のクリスマスは一人で過ごす『シングルベル』だったな。今年はみどり二人で過ごせるのかと期待していた『ジングルベル』だけに、

転勤というクリスマスプレゼントが恨めしく思えた。

でも、みどりを責める気持ちは沸いてこないんだ……

僕は、家に着くなりベットに転がり込んだ。

スーツ姿のまままで気絶するように眠ってしまう。

「夢なら覚めてくれ……」

……覚めることなく夢の世界へ。

『メーリークリスマス……!!』

今年のサンタはやけに騒がしい……

まだ眠りについて3時間しかたっていない。

けれども、頭が働かないと言える状況ではないんだ。

みどりに伝える事は沢山あるのだから。

「いーんじゃない？」

「はっ？」

緊迫しながら報告した僕の転勤に対して、

あまりにも冷めた返事のみどり。

なにがいいというのだろうか？

じゃあ、さよならって事じゃないよね……

「だってこの街じゃ、一緒に買い物にも行けないじゃない！」

……前向きだ。

プレゼント

僕は、隣の県に引っ越すことになる。

遠距離恋愛なんてどうなんだろうと心配していたけど、みどりはいたって冷静だった。

「土曜の夜迎えに着てね 月曜のお昼に電車で帰るから！」

籠の中の鳥・・・ならぬ、犬の散歩状態だなんて感じではしゃぎ出す。

「向こうのアパートはわたしが決めるからね」

「・・・・・・・・あまりの興奮に「富原支店が決めるから・・・・・・・・」とは言えない。」

「だから、年末までは忙しくて逢えないんだ・・・・・・・・」
そう切りだす僕に対して、

「えっ、お正月も休めないの？」
と、驚くみどり。

「お正月はさすがに休めるけど、引越しか準備もあるから・・・・・・・・」

「元日くらいは休めるんでしょ？」
どこか連れて行け！！という雰囲気グングン伝わってくる。

みどりにとって連休は、お正月とお盆の2回しかないんだ。

僕の『クビ』がなくなったと確信したのか、

『遠足の前日』みたいに、目を輝かせている。

僕としても、いくら仕事を頑張っても30日までしか出来ない訳で・・・・・・・・

謹慎明けではあるけど、初詣くらいは・・・・・・・・なんて思う訳で・・・・・・・・

「元日だったら、大丈夫だよ。」

って答えてしまったんだ。

「よかったあ！お正月に温泉旅行予約しちゃったんだから！クリスマスプレゼントだよ」

「……お年玉じゃないのか？」

旅行はちよつとなあ。

年明け4日から富原支店へ着任予定だったけど、残務があまりにも残っている事と、湯葉沢支店が自己査定を控えている事から、

僕の転勤に5日間の執行猶予が与えられたんだ。

新居先をさがさなくてはいけない富原支店。

残務整理をさせたい湯葉沢支店。

年末の多忙期だった両店にとっても好都合だった。

これで多少のプレッシャーから開放された気がする。

ということ、不謹慎極まりないと思いつつ、

一方的かつ強引な計画だったおかげで決まった温泉旅行。

ここから、僕とみどりの珍道中が始まってしまっただ。

銀行は30日限りで年内の営業を終えた。

同じく、みどりの店も30日で仕事納めだ。

旅行にいく都合から、仕事が終わった後は僕のアパートに来る事になった。

午前5時を過ぎたところでみどりは帰ってきた。

いつもより大分遅い。

年内最後の仕事だから、しょうがないのだけれど……

「あけまして、おめでとおおおおおお！」

飲みすぎちゃいましたああああああ！」

・・・・・・・・・・まだ年は明けていない。

引越しの準備とか、

部屋の大掃除とか・・・・・・・・

いろいろ手伝って欲しかったのだけれども、

部屋に着くなり大の字になってご就寝。

最近、みどりを布団に放り込むなんてのは、朝飯前になってきた。

・・・・でも、考えてみれば、

ワンルームのアパートに荷物なんて多くは無いのだ。

スーツとYシャツ以外の服なんて、捨てたってそれまでなんだし、

そのレベルのものしか持ち合わせてはいない。(ユニ　口専門)

それに、みどりの安眠を妨げたくないのも事実なんだ。

銀行員はお客からお金とともにストレスも預かる。

みどりの飲酒も、サービスに対する対価に付属するストレスであり、

同じ痛みなのだから。

・・・・・・空が白み始めてきた。

遮光カーテンをしめてやってるけど、

心配なので愛用のアイマスクをしてやる。

・・・・・・・・・・目でも描いてやるか(ニヤッ)

出発

「0時になったら出発しようよ」

初詣を兼ねてのご提案なんだと思ったんだ。

「海辺で見る初日の出ってまだ見た事ないんだ……」

無邪気に笑う笑顔を見てると、年の瀬に起こったいろいろな問題なんて

忘れてしまいそうになる。

湯葉沢支店では、僕の事件の事を『田原の7日間戦争』と言っているらしい(汗)

「……」「いあーんばかんす事件」よりはましか。

僕が転勤しても、『支店伝説』として語り継がれるんだろうなあ。

「……！！！！！」

ちょっと、まて!?

初日の出って、太平洋側じゃないのか?

予約している温泉は日本海側なんだぞ???

「あは、初夕日も見れるね……」

「……かわいいから許す。」

テレビでは紅白が始まった。

夕飯なに食べたい?って聞いたら、

「年越しソバ!」と即答するみどり。

聞けば、蕎麦には目が無いらしい。

「……知らないかったな。」

外食もそうだけど、二人だけで外出すらまともに出来なかった僕た

ちには、
まだまだ知らない事は多い。
この旅行には、理解を深める期待もあつたんだ。

「手打ち蕎麦ね．．．．」
俺に蕎麦を打てと言うのか．．．．（怒）

実は蕎麦粉はある。

取引先のお客さんから、うちの畑で取れた新蕎麦だつて頂戴してたんだ。

若い人は、クレープにして食べるといいなんて貰つては見たものの、なかなか使つ期会がなかつたんだ。
だから、蕎麦粉があるつて口が滑つた瞬間、みどりの目が光つちやつた！

「おもしろそ ！！！」

．．．．．気のせいか、頭の中から除夜の鐘が聞こえてくる。

策はある。

学生時代、洋食屋でアルバイトの経験がある僕は、
包丁・フライパンの他、粉モノ（パン・パスタ）の仕込み経験があるんだ。

だから、蕎麦だつてそんな感じで大丈夫なんじゃないかつて、
いい加減ながらもやってみる事にした。

生地をつくりながら、小麦とは違う質感に、
伸ばす事は出来ても切ることが難しい事がわかつたんだ。

でも、大丈夫。

じゃーん、パスタマシン登場！

学生時代、卒業と同時にやめたバイト先シェフからのプレゼント。
今まで一度も使つたことの無い、鉄の塊だつたけど、今日始めて日

の目を見ます。

ありがとうシェフ！（自称『まだ見ぬ強豪』）

これで切ることは出来るんじゃないかって使ってみる。

……想像以上の出来だ。

しかも、普通の蕎麦より長い。

異様な長さだ。

しかし、初めて使用されるのが蕎麦だつていうのは、
パスタマシンにとって屈辱だったかもなあ……

なんだかんだで作ったはじめての手打ち蕎麦。

ひとり暮らしをしている僕だったら、

絶対にこんなことやらないぞ。

あらためて、みどりの好奇心と行動力には脱帽させられる。

そこが僕には欠けている部分なのかもな……

もしかして、足りない部分を持ち寄った二人だから、

僕たちは引かれ合ったのかもしれない。

……急にしんみりする。

「ずるずるずるずるずるずるずる」

「っ」

みどりが異様に長い蕎麦と格闘していた。

恥じらいつて……

「うまかったあ！」

なんだかんだではじまり、なんだかんだで終わった夕食。

いつしか紅白も架橋に入っている。

テレビを見ながら笑っているみどりは、

信じられないくらいに蕎麦をたいらげた。

「自分で作った蕎麦がこんなに美味しいなんてしらなかったあ」

「

お褒めの言葉ありがとう。

でも、『僕』が作った蕎麦だからね。

「えび天があれば文句無かったかな・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・なんか言ったか（怒）！！

そして、出発だ。

3時間以上走って太平洋。

そこから5時間かかって日本海・・・・・・・・

僕の睡眠時間はどうやって計算されているのだろうか？

不安げな表情をシックスセンスは見逃さなかった。

「大丈夫、運転は交代でやるんだから。」

太田みどり、免許取得歴5年。

ペーパードライバー歴5年。

「ありがとう、目が覚めたよ・・・・・・・・」

車に乗り込むなり毛布を被るみどり。

この一年間、よっぽど疲れていたのだろう。

さつき起きたばかりなのに、もう眠そうだ。

「眠くなったらみどりを起こして・・・・・・・・」

気をつかってくれるのはありがたいが、こっちも君の命がかかって
いるのだ。

無理をするつもりはまったく無い。

そして間もなく、みどりは深い夢の世界に入ったんだ。

夜明け前の高速道路を、東に向かって車を走らせる。

運転をする事は好きだった。

いろいろ考える時間としては、運転は最適なんだ。

適度に集中しているせいかな、冷静でいられるからね。

困った事があると、ドライブに行くことはいつもの事だからね。

そして、海辺に着くまでの2時間の間に、

ここ何週間かの出来事を考えていったんだ。

みどりを左手越しに感じながら……………

考える

まず、遠藤秘書の事。

結論は、『銀行に戻ることに』と言ってくれた。

僕が転勤になったことは、まだ伝えてはいない。

けれど、間違いなく彼はその事を知っているだろう。

本件に親父がどのくらい関与しているのかが気にかかるし。

「4杯目のご飯を頼むかどうかで迷っていたな。」

……いきなり脱線。

『みどり』の事。

遠藤秘書から聞いた、山川みどりの事だ。

今考えても、子供が亡くなった事に胸が締めつけられる。

なんで、神様は彼女に対して酷い試練を与え続けるのだろうか。

元夫と復縁して新たな命が宿ったと聞くと、したくはないけど、いつ出来た子供かと、指折り数えてしまう。

……あの後、半年くらいか。

山川みどりからもらった手紙の一文一字が、

脳裏に浮かんで消えていく。

聡明であつた彼女の事だ、夫が更正したとの確信があつての事なんだろう。

複雑な思いはあるんだ……

けれども、どんなに辛くとも家族がいる今、

彼女の物語に僕の出番は無いんだ。

そう自分に言い聞かせて、これ以上の詮索はしないようにした。

でも、運命はこれで終わらない事を、

この時僕は予想すらしていなかったんだ……

牧村支店長の事。

僕は決して支店長の事を恨んではない。

これは現在の僕も同じなんだ。

もれ伝わる情報によると、処分の決定的理由が寄付の強要なのだという。

そういえば、そんな事あったなあ。

支店長の長男が、高校の部活動で全国大会行く事になったときの話。営業推進会議で支店長が皆に報告してたっけな。（そんな時すんなって……）

その際、保護者が寄付を募る事になったが、問題は名前であるとの協力要請。

支店長には20名のノルマがあるのだと聞かされる。

当然おめでたい話だからと署名は全員でしたんだけど……

「寄付は一人5000円なんだけど、3000円でいいから。」

……寄付は私が払うからの間違いだろ？

結局、皆面食らったけど、3000円ではなく、当初の5000円の寄付をしたんだ。

まあ、全国大会なんだからってね……

「すまんね、みんな……わたしは幸せものだ……」

いえいえ、支店長。お祝いですから……と皆口々に言う。

「うちの息子は控えにもなれなくて、

観客席からの応援なんだが……」

……早く言えよ、ジジい！（怒）

これが致命傷だったのか。

他にも数々あったらしいが、いずれもコンプラ委員会に上程されるほどの事件として

扱われたため、『出社に及ばず』と切り捨てられたわけだ。

でも、関連会社転籍つてのは、不幸中の幸いなかもしれないなあ。50過ぎの再就職は厳しいみたいだし。

「……愛人の件じゃなかったのか。」

またまた埃の出てきそうな支店長なのでした。

再考・太田家の事。

これは間違いなく『にんじん』なんだって、アンテナが受信したのだから、

遠藤秘書の言わんとしていることは、よくわかったんだ。

つまり、みどりと別れるならば、

後始末はしてあげるから……って事なんだ。

資産を買取って保護してもらう事は、教授にとって悪い話ではないだろう。

保証債務を相続してまで守ろうとしたのは、太田家の歴史そのものなのだから。

負債が消えたら、みどりはどうなるのか。

世渡り上手なみどりの事だ。

夜の世界じゃなくても上手くやっていけるに違いない。

でも、僕がいなくなって手に入れる自由ならばどうなのだろう。

それに、みどりと別れるなんて……

自由であるが僕がない世界と、

籠の中にあつて不自由な僕との世界。

どちらがみどりに幸せなのだろう。

「・・・・・・・・エビ！」

みどりの寝言だ。

よっぼど『えび天』が食いたかったんだろうな。

・・・・・・・・ちつよとあきれる。

こうやって、いろいろ考えながら車は太平洋が一望できる
絶景ポイントまでたどり着く事が出来た。

ここは、福 県い き市。

初日の出のメツカであるが・・・・

「ここって、でっかいシュークリームあるんだってよお」

・・・・・・・・みどりは花より団子だな。

いや、初日の出よりシュークリームか。

「冬の匂いにする・・・・・・・・」

まだ夜が開け切らぬ寒空を見上げながら、そう言ったみどりに、
この先僕は、いくつの季節を感じさせる事が出来るのだろうか。

水平線が鮮やかに染まりはじめる。

初日の出にいろいろな不安と期待をなげかけながら、
神々しい御光にあやかろうとする二人なのでした。

恋愛のゴール

今度は西だ・・・

初日の出の余韻も覚めやらぬうちに、

今度は日本海を目指して走り出す。

相変わらず車の中では毛布にくるまって、寝ているみどり。

これじゃ、『眠り姫』だな・・・

「・・・途中で、ラーメンの街があるんでしょう？食べて行きたいなあ」

車に乗る前、しっかり注文してくれたみどり。

『眠り姫』というより、『食い意地の女王』が正しいのかもしれない。

磐越道はいつしか雪が舞い始めている。

喜多方は、途中じゃなくて高速からは大分脱線するけど、

寒い日にラーメンというのは悪くない。

こんなお正月があってもいいんじゃないかと心満たされてもいるんだ。

「よし、2件はしごしてやろう！」（独り言）

・・・食い意地の女王に弟子入りだ。

西に進むにつれて、雪が激しくなってきた。

こんなときは焦らないほうがいい。高速降りる前に、SAで休憩しよう。

元日の朝だというのに、高速道路もSAも車でいっぱいなんだ。リゾート施設が多い猪苗代周辺は、観光客のメッカだからしょうが

ないんだが……

やっと、駐車場に空きが出たところで車を休ませる。

喜多方までは最後のSAだから、ここでは必ず休みたいんだ。

到着してもみどりはなかなか目を覚まさない。

あとで、トイレと言われても困るな。

とにかく先に僕が用を済ませるとしようか……

ドアをロックして車を降りる。

女王様はまだ夢の世界だ。

「あれ、田原さん？」

……世間は狭い。

正直、この旅行中だけは銀行の人と会いたくなかったんだ。

彼女の名前は長沼真央さん。

歳は僕よりちょっとだけ下らしいが、銀行員としては僕なんか足元にも及ばない。

VIP顧客を統括している本社リテール推進部の凄腕銀行員なのである。

前述した『目で殺す』ババ専リテール獲得軍団に対して、彼女達は『足（御足）で殺す』ジジ専と揶揄されている。

当然、一般女性行員よりもスカートの丈は短い。（おいおい……）

よりによって、隣の車から彼女が降りてくるなんて！

「あら、これが噂の彼女なのね……」

……やっぱり、本社の人達も知ってるんだあ（がっかり）

彼女も彼氏とデートだったらしい。

スノボ&温泉なんだそうだ。

お正月に温泉なんてのは、みんな考える事なんだな。

本社の人間にしては偉ぶらない彼女の事は、

現場にいる我々支店行員の間でも好評であり、

現場の人間の気持ちを理解してくれる数少ないキャリアだった。

けれども、プライベートなどは全く知らないわけで・・・

浮いた噂など聞いた事のなかった彼女の事を、

軽い性同一性障害と違ってたっけ・・・（嘘）

研修等ではいつも僕と白熱した議論を展開する、いわゆる好敵手でもあるんだ。

「・・・結婚するの？」

僕に対する質問への防衛策（言い訳）のつもりで、
いらぬ事を聞いてみる。

彼女とは、プライベートこそ知らないけど、

この程度の質問で積み上げた信頼関係が崩れるなんて、心配要らないと思ってた。

「彼とは無理なんだ・・・」

即答されて、まずい事を聞いてしまったかとうろたえる。

気心知りすぎて失礼な事いつちやったかな・・・

「彼の家は『郡』だからね・・・」

『ぐん』??????

聞いて驚いた。

なんでも、結婚相手は『市』以上に在住の人しか対象にしないのだ
とか・・・

だから、郡だとか、町・村とかには、絶対に嫁に行かないとの事。

「……まあ、ひとそれぞれの価値観なのだから、
それもありかと笑うしかない。（笑えないが……）」

「1年ほど前に……」

投資信託研修会が終了後に懇親会（飲み会）となった時があったんだ。

その席で、彼女達リテール部門の人達と「恋愛論」なる討議（無駄話ともいう）を

した事があり、僕は長沼さんと決定的にぶつかった論点があった。
だから、今おかれている僕の状況と、彼女への親しみを込めてその
論点を繰り返してみた。

「だから、ゴールの無い恋愛はするなって……」

またまた要らぬ事だったかな？
おもわず勢いで言ってしまった。

「あら、それでも私幸せなんだけど……」

そう言って、笑顔で去っていく彼女。

怒った様子ではなく、友達と別れる感覚で手を振りながら遠ざかる。
……

「……彼女、かわいいね！」

その言葉が耳に入らないほどの衝撃を僕は感じていた。
そして、長沼さんの言葉から新 潟までの道のり中、
いろいろ考える事になってしまったんだ。

……それにしても、長沼さんが手に持っていたビニール袋、

凄いな。

全部ビールの空き缶だ。彼氏が運転しているのだから、あれ全部彼女が飲んだんだろうな。

ゴミは持ち帰れよ……

……銀行の女性には何故か酒豪が多い。

「恋愛のゴール」とは、結婚して家庭を築く事だと思っていた。でも、結婚したくない彼氏と交際している長沼さんは、みどりと同じくらい幸せそうな表情をしていたんだ。彼女にとっては今が「恋愛のゴール」なのかもしれない。僕は、そんな事に気がついてしまった。

「みどりにとつての恋愛のゴールはなんだろう……」

……鉛色の空が迫ってきた。

温泉

現代に生まれた大抵の人は、不自由の無い家庭に生まれつくんだ。だから、親から生まれてきたのだから、自分も親にならなくては……

と思うのが当然であると考えてきた。

でも、それを否定するかの如く長沼さんの笑顔は幸せそうだった。幸せを獲得している人でなきゃ出来ない表情つてあるよね……。だから、親から生まれたから親になる……。なんて考えは、独りよがりの考えなのかもしれない。

「じゅるじゅるじゅるうううう」

元旦に食べるラーメン最高！……って言いたいんだろう？

豪快な食べっぷりで、幸せを表現してくれてありがとう・・・
食欲は貪欲だ。

「なんで、この温泉にしたの？」

素朴な疑問だったけど、今まで答えは聞いてなかった。

数ある温泉の中で、決して近いとは言えず、まして冬の日本海だぜ？
ここ数週間の僕の運命を考えるのならば、思いっきり嫌味な場所になりえるわけだ。

「えっ、だって日本酒美味しいじゃない！」

「まあ、お正月だからね。暖かい料理にもあうだろうな。」

「みどり一度飲んでみたかったの、あのお酒。なんとという酒なんだろう・・・」

「『めちよづづる』ってゆーの！」

シメハリヅル
張鶴のことか？（汗）

ざっぱ

ん。。。。

波は荒れ狂う日本海。

鉛色の空。

ここは新 県 波温泉大 荘・・・

「特別室のお客様がご到着です！」

受付が慌しくなっていくのと同時に、

僕の心も慌しくなっていた。

「今、『特別室』っていつてなかったか？」

「・・・わかんない。全部お客さんだった」 Bの人に任せちゃったから。」

離れの部屋に案内されるだけなのに、お供の人が7〜8人ついてくる。

「・・・大名行列じゃないんだから。」

凄い数の浴衣が並べられている。

どうやらここは、好きな浴衣を選ぶようだ。

そういう時は、さすが女の子だな。

今までなかなか見た事のないような顔して、真剣に選んでいるのだもの。

「これにしょーか、あれにしょーか・・・」

こんなみどりを見ているのは嫌いではない。

「それがいいんじゃない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・シカトか！（怒）」

こうやって、戦慄の恐怖と狂乱の宴が始まっていくのだった。

まったく落ち着かない。

温泉旅行なんて、もっとひなびた感じのイメージだったけど、
なんで2人で1泊するだけなのに、部屋が3つも必要なのだろう？
しかも、夕食は別棟の専用個室にてだつてさ。

個室での夕飯は二人きりなのに、何故かその部屋の中央に巨大な船
盛がある。

どこかの宴会用が間違つて運ばれたのかと思つたら、

「Ｔの人からの差し入れだそうだ。」

「……二人だけで、食べられるわけ無いだろ。
どのくらいの旅行手配したつもりなんだ？」

そして、板さんも2人り来るし……

目の前で天ぷらや寿司を握ってくれるんだ。

それを見た瞬間、僕は完全に降参した。

この旅行をプロデュースしたのはみどりなんだけど、スポンサーは
僕なんだ。

でも、めったに出かけられないのだから、今回は大いに楽しんじゃ
え！

「……開き直るサラリーマンほど怖いものは無い。」

「板さん、＼張鶴おかわりください」

おい、そろそろ半升だぞ（汗）……

部屋には専用露天風呂があった。

小さすぎ大きすぎ、まずまずの大きさなんだ。

この物語ではすっかりおなじみの『壺』の形に似ている。

しかし、ここのロケーションは素晴らしい。

日本海の雄大な眺めが一望できるんだ。
海に面したここ、大 荘は、夕映えが見える温泉を売りにしているのだとか。

・・・・・・そーいえば、初夕日は見れなかったな。
冬の日本海は、海も空も全てが鉛色に染まっている。

「露天風呂で熱燗飲んでいい？」

・・・・・・まだ飲むのか？（汗）

ここの大 荘には、館内にも内湯と大露天風呂がある。
せっかくだから、行ってみる事にしたんだ。

「日本海が一望だあ！！」

こんな素晴らしい風呂があるのかって感激するほど、大露天風呂は素晴らしかった。

荒れ狂う日本海と、重そうに低く垂れ込んだ鉛色の空。
その空間に存在する全てが露天風呂と同化している。

日本庭園の借景にも似ているんだ。
素晴らしい・・・・・・

そう感慨ふけていると、なにやら周りが騒がしくなっている。

「女湯に救急車だつてよ・・・・」

・・・・・・嫌な予感がしたのは言うまでもない。

「お酒の飲みすぎで長風呂はダメだよ。」

救急外来にて、先生からお叱りを受ける。

まったくその通りでございます。

返す言葉が無い。

点滴をうけたみどりは、やっと落ち着いてきた様子。

真っ赤だった顔が、いつもの「みどり」色にもどってきた。

「点滴おわったら帰っていいよ……」

特別室への御家宅は、日付がすっかり変わった深夜なのでした。

大 荘のみなさん、ごめんなさい。

部屋に戻ったみどりはすぐに寝付いたんだ。

今日一日だけでも、いったい何時間眠っているのだろう。

普段から、昼と夜の逆転した生活を送っているみどりは、

温泉なんかに来た事はほとんど無いらしい。

だから、たくさん楽しませてあげたかったし、

たくさん、休ませてあげたかった。

そして「壺」風呂にひとり入るわたくし……

いつしか鉛色の厚い雲がなくなり、星空が見えている。

ほっと一息つく長かった一日を振り返りながらこんな事を思ったんだ。

「……これからどうする？」

もちろん、この宿の支払いの事ではない。

この先、みどりをどうしたいのか？

どうすればいいのか？

答えを出す必要があるんだ。

長沼さんのような幸せもゴールであるならば、

みどりが幸せだと思いう方法に従うのもゴールなのかもしれない。

じゃあ、みどりが思う幸せって……

これだと決定的な答えが出ない。

つまり、今現在の僕の理解では、これが答えの限界なのかもしれない。

「もっとみどりを知らなくては……」

愛の別名は理解であるのだから。

二日の朝。

昨日とはうってかわって元気なみどり。

この娘の凄いところは、二日酔いが無いって事だ。

酒の飲めない僕には信じられない。

お猪口1杯で3日は頭痛くなるぞ、俺は……（弱すぎ）

朝から出されたものはすべて残さず食べる。

まさに絶好調だ。

「お世話になりましたあ」

元気良く挨拶するみどりに仲居さんの笑顔がもったいない。

「もう、こないでねえ！」

そう思われても反論する余地は無かったんだから……

帰りの車では、みどりが、張鶴の箱を抱えている。

なんでも、J Bの人にお土産にするのだから。

……盗らないから。

しかし、恐るべきは一任勘定J B。

特別室の料金は、海外旅行並だったぞ……

こうやって、つかの間の休日が終わったんだ。

これからみどりと僕は、週末しか逢えない関係となる訳で……

そして、週末しか逢えない恋愛は、かつて経験した事があった訳で・

……

太田家に関する遠藤秘書の事。

みどりと僕の遠距離恋愛の事。

ひとり残すみどりの生活の事。

新しい支店での仕事の事。

湯葉沢支店の同僚達の事。

そして、親父と僕の関係の事……

いっぱいの不安を抱えながら、新しい生活が始まったんだ。

お客様

いろいろな思いと、みどりを残して僕は湯葉沢市を後にしたんだ。かつての転勤の際も、やはり同じものを残していったんだっけ。銀行に残った事は、僕にとって、いい事だったのか、悪い事だったのか………

今でもわからなくなる時があるんだ。

県外にある銀行の支店は、ある程度の都市部にしか存在しない。

地元県内支店は顧客層が多種多様にわたるが、

県外支店では、いわゆる裕福層と呼ばれる個人顧客と、

収益の見込まれる法人取引が業務の中心となる。

裕福層は、銀行の取引顧客全体の5%以下にすぎないが、

銀行の収益の八割方は、裕福層と呼ばれる顧客から上がってるんだ。だから、収益を上げるには、いかにこの層を攻略するかが重要であり、

人的資源を効率よく配置できる銀行が強いとされている。

富原支店での僕の仕事は、この裕福層の監督と管理が主とされる、得意先係だ。

VIP担当の仕事は、いままでも経験していることだけど、

県外支店は、様相が少し違っていた。

顧客の絶対数が少ないのは当然だが、裕福層顧客の割合は非常に多い。

3割強の顧客がそれにあたる。

だから、VIP専門の営業に徹することが出来る為、収益も個人成績も上がる。

しかし新規顧客獲得の場合、「よその銀行でしょ？」っていうイメージが、重荷になるんだ。

サービスの対価として、収益とストレスをもらうのが銀行員の仕事だ。

県外支店での営業はストレスも大きくなっていく。

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・年寄りの方言は外国語に聞こえるし（泣）

みどりとの遠距離恋愛は、順調なスタートになった。

仕事より、こちらの方が問題の無い事に、驚きと戸惑いと、安堵を感じてるんだ。

土曜日の夜迎えに行つて、月曜日の午後電車で帰る、僕たちの関係、遠距離が始まってまだ半年なのだけれど、苦痛に感じた事は一度も無い。

確実に理解は増していったと確信している。

でも、その日はやってきてしまった・・・・・・・・

仕事も引継ぎ移行期間を終えて、ようやく先が見え始めた初夏の頃、雷鳴とともにとの人はやってきたんだ。

得意先からの帰店時、窓口担当の女の子から、来客があつたと伝えられる。

名前を名乗らなかつたという事だったが、まったく心当たりが無かつた。

アポイントもなければ、富原支店エリアには知人もいない。

風貌・容姿を聞いてみるも、頭に浮かんだ事が、言葉として出て来ないようだ。

・・・・・・・・『漢字読めるけど書けない』ってやつと同じだな。

まあ、急用であれば、先方から連絡があるだろう。

そんな程度に考えながらその場を立ち去ろうとすると・・・

「そーいえば、中村玉緒に似てました!」

中村玉緒に似てるといわれ思い浮かべるのは大ママしかない。
ここは県外の支店なんだ。

まさかな・・・いや、以前偵察に来た大ママの事だ、十分ありえる(汗)

でも、わざわざ出向くだけの用事があると言うのだろうか?

「みどりに連絡してみるか・・・でも、心配させちゃうかな・・・」

そう考えてたまさにその瞬間、自動ドアの扉が開く。

「お久しぶりです。田原さん・・・」
大ママ襲来!

「これはVIPに違いない!」

支店にいた全員が感じ取ったはずだ。

まあ、VIPといえばそうんだけど・・・

ウチとは取引ないし、まして取引を願いたい相手とは言えない。

それだけ、大ママの発する威厳は凄かったと言うことなのだ。

「・・・中村玉緒だあ。」

おい、次長。聞こえるって・・・

「応接室へどうぞ。」

湯葉沢支店時代のVIPが訊ねてきたと思っている富原支店の面々。
実際、担当者を追いかけて、預金を支店を移動するなんて事はある話なんだ。

でも、今はそう思われているほうが都合がいい。

時間に制限はなくなるのだから。

なにか重大な情報があるのだろうか？

まさか、莫大な要求じゃないだろうか？

銀行員の仮面を被り第一波に備える。

「ところで投資信託は今何がいいのかしら？」

・・・・・・絶対要件違うだろ？（汗）

最後の扉

投信の相談でわざわざ僕に会いに来るなんてことは、絶対あり得ない。

いや、万が一という事もある。パンフレットでも渡すべきか……困惑する僕を察してか、大ママは本題に入ってくれたんだ。

「実は、折り入って相談と言うか……お願いなの。」

キタ

(。。)

!!!!!!

「……相談ですか？」

相談も仕事である銀行員の宿命。

……聞きたくないけど。

「しかし、似てるわねえ……」

「はい？」

その意味は分からなかった。

でもこれが伏線であると気がつくべきだったのかもしれない。

「太田家の件よ……」

これから始まる大ママの話。

事の重大さに気がついたとき、

一瞬にして血の気が引いた事を僕は今でも忘れない。

前述の長沼さんの件以来、

ゴールの無い恋愛も許されるのかと考えてた。

でも、それすら完全に否定される言葉が告げられたんだ。

「結論から言うと、みどりともう逢わないでくださいな・・・」

・・・初夏なのに心が凍り始めた。

大ママは、僕を評価している事を繰り返し説明してくれた。

今になってみれば、そんな事は、どうでもいい事なんだけれど・・・

・・・

普通の銀行員であれば、夜と昼の違う世界でも恋愛は許されると大ママは言うんだ。

銀行員の田原聡だけならば許される・・・ってね。

「でも、あなたは自分だけの人生に生きている人では無いのだから・・・」

やっと開いていった扉たちが、無情にも閉まり始めていく。

・・・・・・親父の事か。

ここに来て大ママの言わんとしている事は良く分かるんだ。

「あなたは私達には関わっていけない人なの・・・」

山川みどりのときもそうであった様に、

太田みどりの場合も、公人である親父には不都合が考えられた。

遠藤秘書からも釘を刺されたし、自分自身だって分かっていた。

その事と相反する自分の行動との葛藤で、僕はどれだけ苦しい思いをしてきた事だろう。

でも、僕とみどりには、苦しみを超えた理解が存在しているんだ。

「僕の人生なんだ!」・・・って、一言叫びたくもある。

「あなただけの人生ではないの・・・」

大ママがそんな僕の胸のうちを見透かすように答える。

「みどりにはこの事は伝えてあります。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を失う。

大ママの言う事は正論だ。

反論の隙なんて無かったんだ。

みどりに伝えたのは、もう逢ってはいけない事なのだろうけど、
肝心なのは、それをみどりがどう答えたかなんだ。

「太田家の事は、先生よりご尽力いただきます・・・・・・」

行き着く先はそこなんだな・・・・・・

みどりは今何を思っているんだろう・・・・・・

「負債が原因ですか・・・・・・」

搾り出すように聞いてみた。

「負債はどうでもいいのよ・・・・・・」

湯葉沢産業専務とは思えない答えだった。

そして、その答えが嘘ではない事を、銀行員のアンテナは受信している。

「太田家と私は一緒なのよ・・・・・・」

最後の扉が隠されていたんだ。

ゴール

「感謝します・・・」

みどりと過ごした1年余り。

みどりに対して僕への言葉は感謝なのか・・・

では、何故これ以上の感謝を認めてくれないのだろう。

答えは分かっているんだ。

けれど、どうしてもそう思う訳で・・・

太田家とただならぬ関係とはなんだろう？

巨額な資金を手配していても、負債はどうでもいいと言う大ママ。

太田家を売りに出して、債権を回収するのが目的ならば、

銀行員のアンテナは反応するんだ。

でも、大ママの言う事に疑念は無かった。

それが僕にしてみれば、不可解な事でもあった。

「太田先生の奥さんは、私の姉だったの・・・」

太田教授は20年ほど前に、奥さんを亡くしていた。

その妻の妹が大ママだったのか。

なるほど、義理の兄弟、叔母姪の関係であれば、

ここまでして太田家を守ろうとしている関係が伺われる。

僕の心の様相で答えを出してくる大ママはみどりに似ている。

血縁関係があれば、シックスセンスのような能力も持っているのか

もしれない。

でも、事実さらにはその上を行っていたんだ。

「みどりは私の娘なの・・・」

「!!!!!!!!!!!!!!」

想像なんて及ばなかった話だった。

．．．．．みどりと似てませんが（そーゆー場合ではない．．．）

太田教授夫妻には子供がいなかったらしい。

これ以上の経緯を聞くことが出来なかったけど、

太田家と大ママ双方の事情により、

みどりは養子に出された事が分かったんだ。

だから、大ママが嫌がらせとか、

みどりについた虫を追い払うために、

ここに来たわけではないって事は、痛感したんだ。

「あなたの事も良く考えたし、みどりの事も良く考えたわ．．．

そして、田原先生の事も考えた。」

．．．．．僕は、さらに言葉を失う。

「もっと早く気がついてあげてればね．．．」

親父との関係の事だろう。

みどりに近づく男が、どこの馬の骨か調べるにあたり、

銀行員ということで、完結したのだろう。

同じサラリーマンなのに、銀行だけが、『銀行員』なんだ。

僕たち銀行員からすれば笑える話であるが、世間からみれば信用が厚いらしい。

「それなら．．．」って感じだったのかな。

でも、銀行員だって恋もすれば飯だって食う。

ローンだってあれば悩みだってある。

特別な存在なんかじゃないんだ．．．

「それにしても先生に似てるわね・・・」

一応親子ですから。

大ママはちつとも似てませんね。

・・・言えない。

「みどりを大切に思う？」

「もちろん・・・」

当然の答えなんだ。

「みどりもあなたの事を大切に思っているの。

だから、逢えません。

逢わないのではなくて、逢えないの・・・」

・・・大ママが泣いている。

大ママの最後の言葉は、かつて山川みどりから貰った手紙と良く似ていた。

最後は互いに無言の状態が5分ほど続いたけれど、

僕にとっては2時間くらいの長さに感じたわけで・・・

こうして突然の訪問者は、思わぬ置き土産を置いて、僕の元を去っていったんだ。

世の中に、こんなに悲しくなる事があるのかって絶望するほどに、僕は悲しく、切なく、やるせなかったのに、何故か外は夏色なんだ。

そしてみどりからの電話・・・

泣いている・・・

言葉が出ない・・・

今すぐにも駆けつけたかった。

でも、出来なかった。

「行かない」のではなく「行けない」からだ。

みどりも「逢いたい」のに「逢えない」のだから……

この電話には、書くことも辛いお別れの言葉があった訳で……。まだ過去となり切れていない現状では、文章にすることは出来ないんだ。

ただ、最後に確認した言葉は「愛している」の一言だった。

こうやって、みどりと僕の物語は止まってしまいました。

振り返るに不意であった事は数え切れない。

でも、この答えは二人で出したものである事を理解ください。

結ばれる事はなかったけれども、

「ゴール」に至った恋である事を、

僕は確信しているんだ。

ゴール（後書き）

太田みどり編中締めです。
物語りはもうちつよと続きますが、
感想いただけましたらありがたいです。
とても参考になります。

そして僕は途方にくれる

そして僕は、つきなみの失恋と笑われるかもしれない毎日を過ごしていく事になった。

とにかく仕事に集中する事でこの試練を乗り越えようと考えた。

銀行入行以来抜群の成績を残せたのも、この頃からだっただ。

だから、毎日があつという間に過ぎ去っていく訳で……

仕事以外、この数ヶ月間で変わった事といえば、

久々に実家に帰宅したことぐらいかな。

それは兄貴が結婚することになったからで、

決して親父との確執が解消されたわけではないのだけれども……

・

まあ、理由はどうであれ、家族全員が一堂に会したのは10年ぶりであり、

それは僕が親父と再会することに要した時間と一緒になんだ。

「大人になれたか？」

親父が僕に語りかけたのはその一言だけだった。

「少しね……」

今は、これが精一杯の返事なのでした。

これがきっかけで、自宅には定期的に帰ろうかと思っている。

理解をするには知る事からスタートしなくちゃね。

この事は、みどり達から教えられた僕の宝物なんだ。

愛は知る事から始まり、

知る事は理解する事である。

愛の別名を理解と言う。……って事をね。

そんなある日の事、
銀行の先輩から、電話が来たんだ……

加藤代理は大町支店在籍していた時の先輩だった。
最初の悩める銀行員時代、なにかと世話になった恩人であり、
大木代理とともに、『兄貴』と呼べる存在なんだ。

「今からパソコンにメールで画像送るから、見てみる……」

なにやら、スキャナーで取り込んだ画像を送ってくれるらしい。
僕の個人宛のアドレスに送ってくれるなんて、緊急の要件かな？
その画像データは、地方紙新聞の記事が添付されていたんだ。

画像を確認もせず、印刷してみる。

県外である富原支店では、県内の新聞記事なんて読む事は出来ないから、

こういう時に、県内にいる同僚はありがたいな……

【窃盗容疑で山川秀樹25歳（無職）を逮捕】

突然の雷鳴だった。

晴天の霹靂ってやつは、こんな事を言うのだろう……

「先輩、これ……みどりの旦那です……」
「やっぱりそうか……」

大町支店転勤のとき、山川みどりの勤務先、
鈴木設備を引き継いだのが、加藤代理だった。
財務知識に明るく、人望も厚い熱血漢。

この人ならば安心して任せる事が出来る。

そんな思いで、大町支店を後にしたんだっけな……

そして、僕と山川みどりの関係を知る、数少ない銀行関係者でもあった。

「なにも連絡はないんだな？」

「今、代理からのメールで知りました……なにも連絡きてないんです……」

「そうか、わかった。でも、情報をやったからにはひとつ約束してもらおう……」

この件には、触れるな。そのかわり、俺が調べてやるから……男と男の約束だぞ！」

先輩の気持ちは痛いほどわかります。

でも、それ以上に僕の胸は痛く、激しく高鳴るんだ。

見合い

経験した事の無い不安だ。

恋愛のときとは違う、なんとも言えない無念さが心を支配している。

「僕は無力だ……」

なにもしてやれない自分が情けなくもあるんだ。

山川秀樹氏は、更正しているとばかり思っていた自分にとって、もしそれが事実であれば、大切な人を、

そんな不誠実な輩に託したのかと言う絶望に吐き気さえ覚える。何かの間違いではないのか……

僕が必死にもがいている中、アパートに1本の電話がはいった。

「聡さん、遠藤です……」

当然今は山川みどりの事で頭がいっぱいだ。

だから、この電話もそれに関係している電話だと思ったわけで……

「実は、聡さんの『見合い』の件でお電話しました……」

まったく興味が無い。

それに、僕にそんな余裕は無いんだ。

このタイミングで遠藤秘書からの電話であれば、まず最初に、山川みどり関係の情報でいいはずなのに……

「山川みどりの事、なんか聞いてますか？」
たまらず切り替えた。

「先生の顔を立ててもらわないと……」

その言い方はズルイ！今まで僕は何回そうやって……

まあ、いいや。今更言ったところでしょうがないんだ。

「受けてもらわないと、いろいろな方が困るんですよ……」

「……アンテナが作動する。」

つまり、なにか情報はあるわけだが、見合いを受けないと教えないつもりか。

実際、遠藤秘書にかかったら、断る努力よりも、受ける努力の方が簡単なのかもしれない。

それに、太田家の事では世話になるのだから……

「わかりました、おまかせします……」

「では、相手が何人かいますが詳細FAXでもしますか？」

見合いなんて断るつもりなのだから、見るつもりは無い。

見たらかえって相手に失礼な事に思えるし……

「いえ、とりあえず遠藤さんのお勧めであれば誰でもいいです……」

「」

本来であればとても失礼な返事なのだけれど……

「そうですか……」

そんなそつけない返事で見合いの話は打切ったんだ。

僕は、一刻もはやく次の情報が聞きたかったのだから。

「山川秀樹氏は窃盗の現行犯だそうです。余罪もあると捜査されているようです……」

「それってどうなるんですか？」

「前科もある事ですし、実刑は免れないでしょうね。今回は強盗容疑もありますから……」

「山川みどりはどうしてますか？」

「残念ながら、今わかつているのはこんな所です。」

僕は、残念そうに受話器を置いた。

後で、日程決まったら連絡するから、必ず出席するようにと、

遠藤秘書は、執拗なまでも僕に同意を求めるんだ。

・・・・・・親父の命令なんだな。

彼も犠牲者か。

ちよっと同情してみる。

この電話の後、遠藤秘書は事務所スタッフに

「聡さんの見合いはこの人で決まった」と報告している。

そして、その後つぶやくようにこう語ったと言う・・・・・・

「先生にとっては申し分の無い相手だ。

でも、聡さんにとっては、ひとつ問題のある人だな・・・・・・」

君の名は…

そんな僕の心境とは関係なく、当たり前のように銀行の窓口は開く。今日は、『お客様投資信託研修会』なる銀行の自己満足的企画が催される事になった。

講師は某投信運用会社のファンドマネージャーと、当行からリテール推進室の長沼女史がやって来たんだ。『郡』を敵に回した女だ………

「馬鹿にしたもんじゃない！」

正直驚いた。

銀行の自己満足どころか、参加した顧客の態度は真剣そのものだった。

大半の顧客は、得意先係の動員なんじゃないかって心配していた僕にとって、

投資信託のようなリスク商品は、「売る時代」から「売れる時代」になったのだと実感する。

そして、研修会が終わったら『その次』が待っているんだ。

「これからが本番よ」

長沼さんが吼える。

………打ち上げの飲み会だあ。

つつ、強い！

何故、銀行の女性は揃いも揃って酒が強いのだろうか？

7杯目のジョッキを1敗目と変わらないペースで飲み干す長沼さん。………何故、トイレに行かないんだろう？

「田原さんは飲まないの？」

「……飲まないのではなく、飲めません。」

「あつ、そう。じゃ私とは付き合えない人なのね……」

彼女いわく、『郡』出身である他に、酒の飲めない人も、恋愛の対象外なんだそうだ。

それ以外に制限は無いのだそうだが、彼氏がいるのに「付き合おう」と、

簡単に言った彼女はどこか寂しげだった。

「正月は、変なところで会っちゃったね……」

「彼氏とは最近別れたんだ……」

ゴールの無い恋愛でも、終わる事があるんだ……

やけにペースの速い飲みっぷりは、失恋が原因なのか。

僕とは失恋同盟ってヤツだな。

飲めない僕でも、今は飲みたい気分なんだから……

「つらいね……」

慰めるつもりで言ったんだ。

「はあ？ ぜんぜ

ん……」

思いもかけぬ答えだった。

「恋人はビールだから……ははっ」

「……強がり？」

当然そう思う訳で……

いろいろな恋愛があるって教えてくれたのは、長沼さんの笑顔からだった。

強がる事も、彼女にとっては自己防衛なのかもしれない。

そんな気がして、それ以上のことは確かめられなかったんだ。

「長沼さん、お酒強いねえ！」

よっぱらった次長が絡みつく。

完全にセクハラだ。

「次長！ビールは酒じゃないから酔わないの！」

「・・・・・・・・・・では、ビールはなんだというのでしょうか？」

『頬を染める魔法の雫よ！』

「・・・・・・・・・・この女、大分酔ってるな（汗）」

「落ち込むような事ばかり考えてたら疲れるじゃない・・・・・・・・」
さすがにペースが落ちてきた長沼さん。

僕の隣の席に、なだれ込むように座りながらそう呟いたんだ。
僕へのメッセージなのか、

自分自身への慰めなのか、

その時ははつきりわからなかった。

でもその言葉に、僕は共感できたんだ。

「・・・・・・・・・・辛くても楽しくても同じ『時間』かあ。」

「お見合い決まりました。」

遠藤秘書からの電話はいつも突然だ。

朝一番の銀行に、そんな内容の電話が来る事は、さすがに気分が悪い。
い。

ちよつと一言いつてやろうとしたら、

「お礼は無用です。」と一言。

「・・・・・・・・・・負けた。」

「見合いは義理だ」

今でもこの見合いの事はそうだったと思っている。

「ビールが恋人」だと謳った長沼さん。

僕も「仕事が恋人です」って見合い相手に言っでやろうかと思っでた。

「銀行員は、家庭を顧みること無いんです!」

なんて言ったら、相手はどんな顔するんだろうな……

でも、そんな馬鹿げた計画は、すぐに中止される事になった。

「はじめまして、『斎藤みどり』です……」

お見合いの相手は「みどり」だったんだ。

……おい遠藤、少しは気をつかえよ（泣）

よくある名前？

「みどり」という名前は世の中に少ない。

年齢を問わず、よく聞く名前であろう。

でも、「山川みどり」に「太田みどり」……

僕には特別な名前なんだ。

どうでもいい事だけれども、前述の「アレがいる」とのアレとは、妹の事である。

僕と妹は二卵性の双子で、そのアレの名前を「田原みどり」と言う。そして、僕はこの妹が大の苦手なんだ。

性別も性格もまるで違うのに、双子と言うだけで常に比較対照されてきただけあって、

妹の存在は、コンプレックスそのものであった。

まあ、この「みどり」は本編に関り合いがなから、おまけでいいが、不思議な『縁』があるということ、紹介しておこう……だから、事情を知っている人ならば気をつかって欲しかった。

お見合いは可もなく不可もなく無難にこなす事が出来た。

僕にとつては不本意なのだけれども……

当然ながら、お見合いなんて言うのは初めての経験である訳で……

・

こんな事ならば、『兄貴』と呼ばせてもらっているお局様こと大木代理から、

『見合いの壊し方』なる特技を聞いておけばよかった。

なんでも、お見合いは50回以上破談させているという伝説をお持ちなのだから。（失礼）

正直言うと、名前を聞いてお見合いを壊してしまう事に躊躇してしまった所もあるんだ。

それだけ、僕にとっては大切であり特別な名前だったのだから。お見合いの「みどり」さんは、かつてのみどり達とは関係は無いのだが、

どこか、重なって見えてしまう事に「みどり」との「縁」があったのかもね。

当日まで、相手の顔だけではなく、名前や職業なんかも全く知らなかったのだから、

いざ見合いとなった時から、雰囲気飲み込まれてしまった事も認めなくちゃならない。

見合いで初めて聞いた彼女の生い立ち、学歴、経歴・・・そして容姿。

どれをとっても問題ないんだけど・・・

・・・普通の出逢いであればね。

それから10日間は、平穩な銀行員生活を送る事が出来た。

見合いは、不可ではなかったが、可でもなかったんだ。

期待はずれであったとして、先方にはお詫びするしかない。

そんな最中、遠藤秘書から連絡が入る。

見合いの事ではなく、太田家の進捗状況の件だ。

一度約束したら、必ず職務を遂行させるのが政治家の仕事だ。

だから、安請け合いは出来ない。

その事にかけては親父は厳格だった。

悔しいけれども、信頼に値することなんだ。

太田家の報告も、約束が履行されているエビデンスになっている。

太田家の件では、湯葉沢産業の抵当権が、ひとつの問題になっている様子。

買取るにあたり、先方の素性が懸念されるとの事。

ほかに、抵当権解除後の具体的な保存・維持・管理の計画が報告さ

れる。

太田家の事を考えるのならば、やはりこの方法が最善だろう。

その後、みどりには自由が与えられるんだろうか？

自由になったとしても、大ママや太田家との血の絆は繋がれたままなのだから……

……僕はあと何が出来るのだろう。

そして程なく見合いの仲人を買って出た人から、連絡が入る。

ああ、断りの連絡か……

すまない事をしたのではと、ちょっと気にしていた所だった。

「みどりさん、田原さんとまた会いたいと言ってきてるんだよ……」

男なんて、星の数だけいるじゃないの……

今はとても喜べる状況ではないんだ。

でも最近僕は、そう簡単には断りづらい情報を知り得てしまったのだ……

酒川市にある酒川中央支店。

当地では、人口22万人の中核都市であり、

酒川中央支店は、酒川市内5店舗の母店にあたる。

その筆頭取引先が、酒川薬品工業……斎藤みどり嬢の父親が社長だった。

つまり、斎藤みどりさんは、社長令嬢って訳だ。

職業は、社長秘書と言ってたけど、社長令嬢とは言えるわけがない。見合いに挑むにあたり、予備知識まったく無し。やる気も無し。

他店の取引先など全部を掌握しているわけも無く、素性が知れるには時間がかかったんだ。

手形の信用照会なんかでリサーチするような業種であれば、

気がついたかもしれないが、製薬関係の手形が、市中に出回ること

は滅多に無い。

「はぁ．．．．．いつでもいいんですけど．．．．．」
気がきいたセリフはまったく出でこなかった。

相手の生まれた星の下を考えるのならば、

僕は落ちるとこまで転がり落ちた、石ころみたいなものなのだから．
．
．
．

風呂上り、オールバックにした髪を手にして鏡の前に立ちすくむ。

「．．．．．落ち武者！」

自分の馬鹿さ加減に悲しくなる．．．．．

近況

そんなわけで……

「会いたい」と願われて断るすべも無い私。

お嬢様こと斎藤みどりさんとは、見合い後2回ほど食事をしたんだ。いわゆるデートってヤツだな……

僕の心は、いまだに生々しい傷を負っているわけで……

とてもデートを楽しめるような状況ではないんだ。

しかし。彼女は当行でも超VIPの取引先令嬢である。

相手を怒らせない様に、気をつかいながらも、これ以上、僕の領域に踏み込んでほしくない為の自己防衛策として、「銀行員の仮面」で対応するしかなかった。

銀行の顧客程度にしか感情を持ち込まないように……ってね。でなきや、一緒にいる間中、彼女を傷つけているように思えるし、そのことに対して、自分自身を許せなくて自分を傷つけてしまう……

人を傷つけ、自分も傷つく。

なんとも言えない葛藤に晒されてしまうんだ。

兄貴先輩こと、加藤代理から待望の電話が来た。

「もう一度確認するが、話を聞くだけだと約束しろ！」

「………わかってます。」

「俺でも報告してやらないと、お前は自分で調べるだろうからな。」

「………よく僕の事を理解してらっしゃる。」

これも「友情」愛「なんだね……」

鈴木設備は、1年前に退職したとの事。

現在の住まいは、大町市内にアパートを借りているという事。

資金的な不安は当面無いとの事（子供を失った代償がある為）

第二子は順調に成長している事。

鈴木建設社長が、同グループで再雇用を申し出ている事。

・・・・・・鈴木建設の社長は、最初の事件のときも協力的だった。

山川みどりは夫と復縁するに当たり、はじめをつけて退職したのか
もしれない。

再雇用の話は、救の手である事は間違いないのだろう。

僕にとつても、たいへんありがたい話である。

願わくは、山川みどりがこの申し出を受け入れてくれる事だけだ。

・・・・・・山川みどりの人生には、僕の出番は無いのかもしれない。

先輩との約束もあるのだ。この話はこれ以上詮索するべきではない。

・・・・

そう心にきめた途端、頬を涙が伝った。

気がつかないうちに、冬の足音が聞こえていた・・・・・・

2006年11月。

この物語の時間は、現在に近づいているんだ。

「愛顧」

フル稼働状態が続く、師走の銀行。

僕は、月末が来るたびに感じる事があるんだ。

「・・・・・・・・この世の中に、神はいない。」

銀行で経験した月末と同じ数だけ、そう心を悟っている。

そのくらい銀行にとって月末とは恐ろしい存在なんだ。

無情であり無慈悲であり無感動。

時間と己と顧客との壮絶な戦い・・・・

とりわけ、師走の月末は最悪である。

年末までのカウントダウンが始まると、毎日が地獄そのものなのだから・・・・

なのに、いないと悟っている「神様」の誕生日を、

毎年祝う事を忘れないのは何故なんだろうね。

担当顧客に菓子製造業者が多いと年末なんか大変だ。

『「ご愛顧」と呼ばれるクリスマスケーキの購入要請があるからなんだ。

老舗と呼ばれる和菓子屋でさえ、何故かこの季節だけケーキを販売しているし。

中には、『クリスマス生菓子』なる、柊やサンタ、トナカイを模った上生もあるんだから・・・・

で、ケーキの箱6つ・・・・

目の前にあります。（未開封）

僕の担当は、菓子製造業者が多い。

しかも、軒並み大口取引先、いわゆるVIP顧客なんだ・・・・

年末の問題先法人の資金繰り手配も大変だが、

ケーキの消費にも頭が痛い。

今年は23日から連休になるんだ。

だから、22日の午後から、支店全員で分担して購入したケーキ達が銀行に大集合する。

当然、担当顧客が多い僕は、人一倍のけケーキを抱えて帰らなくてはならない。

ひとり住むアパートに並んだケーキの箱6つは壮観だ。

捨てちゃうのは作っている人に申し訳ないし、もったいない。

とりあえず、自己消費を試みようとして、ひとつの箱を開けてみたんだ。

『こつ、これわあああああああ!!!!!!』

それは、決して開けてはならないパンドラの箱だったようです・・・

・ ケーキのサイズは生クリーム5号。

至って普通のクリスマスケーキ、イチゴ5個のせ。

そのイチゴすべだが・・・

『全部カビてるう・・・・・・・・』

・・・・・・思い出した。

クリスマスの時期、イチゴの値段はとんでもなく上昇するって聞いたことあったな。

冷凍技術の進歩で、ケーキは大抵冷凍保存されているらしい。

だから、スポンジなどの土台は前もって製造できたとしても、

イチゴは冷凍できないから、基本的に後乗せな訳で・・・

販売時にすでにカビてるって事は、価格の安い時期にイチゴを購入して、

低温保存していたのだろうな・・・

だから、短時間の常温でも、カビが発生しやすい状況になったのか
もしれない……

いったい、どこのお菓子屋なんだ？これは……

『和菓子 庵』

……超VIPだから許す。

来年からは、ここのはサンタの上生にしよう。

やっぱり「餅は餅屋」だな……

つて、初めから衝撃的なケーキとのご対面に、先が思いやられる。

……和菓子屋がケーキを売るって事自体に無理がある。

で、次開けてみた。

今度はちゃんと、お店の名前を確かめてみた。

『菓子処 堂』

富原市では有名店である。

しかし……和菓子屋だ。

……嫌な予感する。

『こつ、これわあああああああ！！！！！！！！！！』

本日2回目の絶叫。

クリスマスケーキでこんなに目を疑ったことは生まれて初めてだった。

ケーキのサイズは生クリーム5号。

至って普通のクリスマスケーキ、イチゴ5個のせ。

ここまではカビのケーキと同じだ。

しかし、決定的に違うところがあったんだ。

「……異様なデザインだ。」

まず目に入っただのが中心部にどんと置かれたパイナップルのパイナップル。

1個切らずに置いてあり、見事な「円」を描いている。
 ……中心部にイチゴ1個のってるし。

さらに異様なデザイン。

イチゴ1個は良でしょう。
(カビてないから)

しかし……まだ違和感があるんだ。

パイナップルを取り巻くように、五芒星をつかさどるが如く鎮座しているその物体。

もしかして、これは……

・ ・ ・ ・ ・ ドレンドチェリー（イチゴモドキ）だあ！

イチゴじゃないんだ？

とうあえず、食べてみる。

さすがに、カビの発生しているケーキは食べずに封印したけど、これは衛生的に食べられないわけではなさそうだ。（失礼）

でも、みかけは昭和40年代を彷彿させるようなデザイン。

味に限っては、みかけと比例しないかもしれない……

うちの近所のラーメン屋だって、貧乏そうな佇まいとは裏腹に、

出で来るチャーシュー麺は絶品ではないか！

・ ・ ・ ・ ・ そう自分を励ました。

『じっ、これわあああああ……! ! ! ! ! ! ! ! ! !』
（3回）

一口食べて驚いた！

口の中に広がる濃厚なバターの香り。
いや、バターと言うか脂肪だ。

そのしつこさと言うのが凄まじいのだ。

とんがったクリームの先に火をつけてみると、ローソクのように燃えるぞ、これは。

・・・・・・・・・・なんで、生クリーム頼んだのに、バタークリームなんだ？

昔のイメージだと、「バタークリームは不味い」って言うのが定番だったけど、

最近のバタークリームは美味しいって、考えを改めていたんだ。

お酒の飲めない僕は、食べる事については小うるさい。

基本理念は「なんでも美味しくいただける」なんだけどさ（ホントにうるさいのか？）

昔のバタークリームってのは、バターの代わりに、

ショートニングやマーガリンといった代用品を使ったクリームと、冷凍技術の乏しい時代、おそろしく長い保管期間を経たスポンジとの、

コラボレーションによる弊害であるとわかったんだ。

だから、最近人気の洋菓子屋さんでは、本格的なバタークリームが人気を得ている。

僕もそんなバタークリームは大好きなんだ。

・・・・・・・・・・でも、これは昭和40年代伝統の味を守っている。（汗）

結局、パイナップルしか食べられなかった。

留守電

まさか、本日中に3つ目の箱に手をかけるとは……
シングルベルの僕が、
こんなハイペースでケーキを消費するとは思わなかった。（してないだろ？）

今度こそは、洋菓子屋さんのケーキを頂きます。

『ばていしえる

』

富原市では人気NO.1のお店だ
今度こそ間違いは無いはずだ。

さして、ケーキを切ろうとした瞬間、携帯電話が唸った。

……長沼さんからだあ。

時刻は午後9時をまわっている。

こんな時間の電話は不吉だ。とてつもなく嫌な予感がする……

午後から『お客様投資信託研修会』で、寮店のセミナーに参加した
長沼さん。

今、その打ち上げをやってるからコイとの事。

僕は飲めないんだけどなあ。

『セクハラ次長もいるから、助けなさいよお！』

って言われればしょうがない。

仕事の脅迫……じゃなくて、協力要請だもんな。

……あつ、ケーキ持つていつてやろう。

少しでも消費したいケーキ達に、またとないチャンスがやってきたんだ。

捨てるのだけは忍びないので、貰って頂けるのならケーキ達も本望

だろう。

長沼さんでも、ケーキは別腹だろうな……（失礼）

そして、ケーキ2個持参して戦場である某居酒屋に出陣。

一番奥の部屋から。想像を絶する狂乱の宴の雄たけびが聞こえてくる。

この距離にして、これだけのボリュームだ。

室内の様子なんて、とんでもない事になっているのだろう……店員さんに恐る恐る訊ねてみた。

「奥の部屋は、個人名で予約されてるんですか？」

「いえ、あんしん銀行さんです……」

ひきつる店員さんからそう聞かされ、僕も言葉を失った。

……すこし考えろよ。

ケーキを持ってきた僕は、少しの間ケーキの保管を依頼してみると、入り口にコイン冷蔵庫があるとの事。

うーん、これは便利だ。

酔っ払いは、お土産とか持って帰る場合多いからなあ。

あっ、店員さん。もうひとつお願いが……

「奥の部屋の名前、『長沼女王と愉快な仲間達』って変更しておいてください。」

そして、狂乱の宴は竜巻の如く全てを巻き上げて去っていったんだ。

長沼さんは、明日は東京出張だから朝が早いとの事で、めずらしく1次会で帰っていく。

今日は富原市に泊まるそうだ。

なんでも、年明けの新商品準備で忙しいのだとか。

「悪かったね、呼び出しちゃって……」

いつになくしおらしい長沼さん。

彼女も『シングルベル』を過ごすのだと思うと、
ちよつとセンチな気分になる。

まあ、ケーキでも食vena……ってプレゼントしようと入り口まで
見送る。

しかし、東京出張の人にケーキ2箱もいらないだろう。
でも、1箱くらいはもっていつてくれるかもな……
そんな事を思っている……

「はい、クリスマスプレゼント！」

入り口のコイン冷蔵庫からケーキの箱を渡される。

「研修会で支店さんから貰ったんだけど、甘いものはダメなのよね
え……」

さつ、先を越されたあ……！！（；）！！

「飲めないんだから、甘いもの好きでしょ？」

確かに、嫌いではない。

でも、ケーキ6個に困っているところに、1個増えて合計7個にな
ったぞあ……

「じゃ、また今度ね。良いお年を……」

どこか涼しげな笑顔をのこして立ち去った長沼さん。

……そのまま向かいのラーメン屋に吸い込まれていったんだ。

長沼真央。

鉄の胃袋と、黄金の肝臓をもつ女だ。

彼女の別腹は「ラーメンに餃子、そしてビール」なんだろうなと納
得する。

……しかし、ケーキどうしよう。

帰宅は日付が変わっていたんだ。

結局ケーキの箱を4つも抱えながら帰宅する。

問題が解決するどころか、余計に膨れ上がった事が恨めしい。

どんなに遅くなくても、どんなに荷物があっても、

車を運転して帰れるのが酒を飲まない人のいい所だな。

ガラスの肝臓もいいかも。

そして、アパートでは僕の帰りを留守電が待っているんだ。

「斎藤です………」

お嬢様からの電話があったらしい。

年末は、死ぬほど忙しいから、年明け改めて連絡するから……
ということ、なんとか逃げていたのだけでも。

居酒屋のコンクリートが分厚かったせい、携帯が圏外になってた
んだろうな。

面倒なので、留守電は自宅にしか設定していないんだ。

録音されていたメッセージは24日に食事いかがですか？なんて内
容だった。

断る理由も無いのだけでも……

そして、留守電にはもう一件登録があったんだ。

『非通知 PM0:45』

二つ目の電話は、10秒ほどの無言であっただけ……

僕の電話番号を知っている人で、この時間にコールできる人を、
僕は1人しか知らないんだ。

……みどり。

胸は捻じ曲がるばかり……

都合の良い言訳

「断る理由もない」

そんな都合の良い言訳を、胸いっぱい抱えながら、

僕はお嬢様との食事に行く事を決めた。

イブの夜と一緒に過ごす意味って、女性にとっては大切な事なのだろうけど、

今の僕には、そんな事を思いやる「やさしさ」なんて欠片も無いのかもしれない。

自分の行動が、はたして正当な判断のもとで行われているのか、不安に襲われるときがあるんだ。

認めたくは無いけど、情緒不安定。

「・・・・・・・・・・ケーキ7個お」

ほら。

女性と二人で食事に行く事は、嫌いではないんだ。

でも、今の僕の事はそつとしておいてもらいたい。

傷がいえるのを、ひたすら動かず待っている、野生動物の様な本能なのかもしれない。

それに、相手が気をつかわなくていけない場合は、やっぱり大変なわけで・・・・

そして大きな問題なのが、「お嬢様」である斎藤みどりさんを、何処に連れて行ったらいいかということなんだ。

車で1時間ちよつと離れている酒川市。

僕には、その地理がまったくわからないのだから大変だ。

過去二回の食事は、見合いをした某ホテルにある洋食屋に行ったん

だっけ。

芸が無いな・・・と思いつつも、無難である事は都合が良かった。
お嬢様をファミレスってわけには行かないもんな・・・

「おまかせいたします・・・」

結局はこれに限る。

さすがに何度も同じ場所では、申し訳ない。

お誘いを受けたのだから（情けなくもある訳だかだ・・・）
このくらいのリクエストは許してもらえんじゃないかな？
僕には、酒川の土地勘はまったく無いのだから。

では土地勘のある場所に連れて行けばいいのか？
それは絶対に危険だった。

大抵、お嬢様には『門限』があると相場が決まっている。
ちつよと遠くに出かけて門限破つたりしたら、
VIPの苦情が銀行に届くかもしれない。

僕にとつても、明日25日はクリスマスというよりも、

『モノ日』と言われるプレ月末。

気分的にも早く帰りたいのだ。

・・・早く帰ったもなにもする事はないのだけれども。

「じゃあ、その道曲がってください。」

久しぶりに僕の左手越しに聞こえてくる女性の声だ。

・・・しっくりこない。

とにかく今日僕は、まかせて安心運転手さんなのだ。
彼女の指示に忠実に従えはいいだけなわけで・・・
どんなお店に連れて行ってくれるのだろう。

「・・・ここのお店でどうですか？」

依存ありません。従うしかないんです、僕は。

【熱々ホルモン亭】

・・・・・・・・・・うそお。

「すいません、私外食したこと無いんです・・・」
もっぱら自宅でしか食事をしないお嬢様。

さすが、並みのVIPとは育ちが違う（汗）

唯一職場のOL仲間で食事&お酒を召し上がるのが、ここのお店らしい。

店員とも顔なじみのようで、気軽に挨拶するその姿は、
銀行の同年齢の子達と、なんら変わりが無かった気がする。

店のほうも、外の度派手な看板に多少ならずとも驚いてしまったの
だけれども、

店内は、昭和モダンをアレンジしながらも、若者を意識したしゃれ
た感じで印象が良い。

カップルなんかも多いようだが・・・

・・・・・・・・クリスマスイブにくる店だろうか？

でも、なんか今日が一番彼女の目線が
同じ視点にあるように思えたんだ。

そして、帰宅。

門限があるかどうかなんて聞いたわけじゃなかったけど、
午後9時を前にして、時間を気にし始めたお嬢様。

いくらなんでも門限早すぎないか？

・・・でも、お嬢様の家に見れば常識なのかも。

もしかして、明日25日は銀行が忙しいから気をつけてくれたの
だろうか。

玄関というより、門の前に車を止めて送り届けると、
足早に家に戻りたい様子。

「ごめん、遅くなつて怒られるのかい？」

心配してしまうんだ。

「ううん、そうじゃないの……」

笑顔で答えるお嬢様。

『M-1きになっちゃって！』

M-1つてお笑いの？

……予想外だ。

ホントにこの娘、社長令嬢なのか？

一瞬疑うものの、自宅の圧倒的な存在感に我にかえる。

兎にも角にも、

焼肉屋の件だつて、

テレビの件だつて……

ちよつとずつなだけれども、イメージと違った彼女を知る事が出来た。

知る事から始まるか……

こうして、僕の2006年クリスマススイブは終わったのでした。

前もってプレゼントを用意するわけでもなかったから、

食事だけという、彼女にしてみればつまらなかったかも知れない特別な日。

取ってつけたモノなど、かえって失礼であると考えたし、

モノが欲しい家庭に育ったわけでもないのだから、

「食事にいこう」という誘いを受ける事が最善なんじゃないかと思

ったんだ。

でも、なんだか失敗したような気持ちになるのは何故なんだろう・
・

家に帰ると、未だ処分していないケーキ達が僕を待っていてくれた。
にらめっこ状態は続いているのだけれど、明日、銀行に持っていく
のならば、

なんとか皆が食べてくれるだろう。

そういえば、長沼さんからもらったケーキはこのケーキなのだろ
う・・・・

しばし、確認してみる。

『和菓子 庵』

・・・・・カビのケーキだあ！

やっぱり中身はカビているし（涙）

こうやって、複雑な思いで終わろうとしたクリスマスイブ。

けれど、まだ日付が変わらないうちに、お嬢様からメールが入った
んだ。

「チュー リアル優勝やったね」

・・・・・今日からお笑いは敵だ。

「わがままに付きあってくれてありがとう。

もつと田原さんの事が知りたいからお願ひしちやいました

また一緒に出かけましょうね・・・・」

知らば知るほど苦しくなるかも知れないのに、

何で僕は、お嬢様の事を知りたいと思ひ始めているのだろう。

まだ僕の胸は捻じ曲がっているんだ・・・・

心のかたち

25日から銀行は修羅の道に突入だ。

世の中は『緩やかな回復傾向』であるとか、『いざなぎ景気を越えた』などと、

景気の良い話ばかり聞こえるようになったけれども、不景気だ。

絶対に不景気だ……

銀行がこんなに忙しいと言う事は、『不景気』以外ありえないと確信できる。

地方都市の景気は回復とは程遠く、已然『長引く不況』の真っ只中なんだ。

この1週間、11時前に帰れる日は無いだろうなあ。

僕は決して仕事は遅くないけど、やればやるほど忙しくなるのが銀行員の宿命。

それを今年は、例年の何倍も実感するほどの仕事量をこなしているんだ。

まあ、こなせるだけの実力がついていいる事は誇りでもあるのだけれど……

そんな僕の年末は、仕事もプライベートも相変わらず忙しいものがあつたわけです……

25日（月曜日）

覚悟を決めた壮絶な1週間が始まる。

昼食も食べられないかもしれないから、今日はちゃんと朝食取って行こう。

ひさしぶりに食べる朝食は悪くないね。

早起きした分、新聞読む時間にも余裕がある。

紅茶を飲みながら、ささやかな幸せを感じていたのだけれども、

ある記事によってそんなものは奪い去られる事になった。

【お悔やみ 株式会社 代表取締役 氏】

丁度1週間前、僕はその会社に運転資金を手配していたんだ。

保証人は亡くなった代取を付保しただけ……

融資したばかりの会社社長がすぐ亡くなるなんて事は、

大抵よろしくない場合が多い。

つまり自殺だ。

年末だし、本件の場合もそう考えた。

「社長、どうしちゃったんだよ………事故報告、頭痛てえ。」

早めに出社後、融資担当者と打合せ。

皆、新聞記事をよんでいたらしく、早めに出社している。

とにかく、お悔やみながら訪問だ。

こういうのも、銀行業務ではもっとも嫌な仕事のひとつなんだ。

人の死に対してでも「仕事」と割り切らなければいけないのだから・

……

結果は『交通事故死』だった。

状況からしても、法人・個人とも懸念される事態にはならないようだ。

保証債務は残るものの、なんとか法人存続の方針で維持できる見込みである。

残された遺族、従業員を路頭に迷わせない事も銀行員の仕事である。少なくとも僕はそう考えている。

忙しい1週間の始まりが、予定外のスタートとなってしまった。

半日がこの対応に追われたことと、本社と保証協会に、

事故報告を提出しなければならぬ仕事が増えた。

銀行員の仮面を被っている普段であれば、

銀行ではよくある話で終わる出来事なんだけれども、
忙しさからだろうか、今日はそんな事務的に対応する銀行員が嫌な
んだ。

僕は、年末にかけて、「これでもか！」ってくらい案件を抱えてい
る。

加えて、急を要する仕事が増えたから、猫の手も借りたい忙しさだ。
そんな事を察してか、お悔やみから帰店した僕に、次長が心配そう
な顔して近づいてくる。

「田原くん、塩振ってからじゃないと銀行に入ってきちゃダメだぞ。
・・・」

・・・そっちの心配か。（涙）

P M 1 1 : 3 5

日付は25日中になんとかアパートに帰る事が出来た。

風呂に入るくらいしか、クリスマスの日を堪能できる時間は無いな。

・・・

そしたら早く寝よう・・・

そんな事を考えてたら、携帯にメールが受信されていた事に気がつ
く。

・・・お嬢様からだ。

「今はなんか読む気がしないな・・・」

そう呟きながらも早速読んでしまうのでした。

「パソコンにメールしてまーす」

なんだろう？

すぐに眠りたいのだが、無視するわけにもいかなかった。

パソコンでないとダメなメールなのだから、何か理由があるのだろうな。

内容によっては返信しなくてはいけないわけで……
とうあえず見てみる事にした。

……なんか添付されている。

デジカメの画像データかな？

ファイルを開くと、お嬢様と僕の2ショットの写真だった。

……いつ撮ったんだろう？記憶に無いなあ。

それは、間違いなく24日食事した際の映像なんだ。

楽しそうに笑う笑顔のお嬢様の隣で、

自分でも驚くほど楽しそうな笑顔の僕がいる。

自然な感じのいい写真だと、正直そう思う。

でも、そんな僕の姿が許せなくもあるんだ。

……だれが撮ったんだろう？

顔なじみの店員さん（女性）が撮ってくれたと、ちゃんとメールに書いてあった。

フラッシュ気がつかなかった。

どうせ隣のカップルとかだろ？程度に、気にも留めていなかったのかもしれない。

しかし、疑問がまた急浮上するんだ。

……携帯しかアドレス教えていないんだけど。（謎）

十中八苦、遠藤秘書だろうな。

僕がいらないと断った、見合い相手のプロフィール。

相手用資料に、僕の情報が事細かく報告されている可能性がある訳だ。

何故遠藤秘書が僕のアドレスを知っているかも疑問のひとつである

が、

彼なら調べる事はプロであるのだから簡単だろうな。

しかし、どの程度までお嬢様宛、僕のプロフィールというか、情報だな。

伝えてあるのだろうか・・・

とんでもなく詳細であつた事も考えられるな。(汗)

・・・ちつと『ばれる』って感じが、自分自身嫌になる。

正しいと思つて選んできた僕の人生なのだから、後ろめたさなんて微塵も無い。

これは今もそうであり、これからもそうである。

けれど、さつきみたく「ばれる」みたいな、

後ろめたい気持ちが生まれているのはどうしてなのかな・・・

みどり達との経験は、どれも素晴らしい経験だったと、自信を持って言えるんだけどね・・・

・・・お嬢様は知っているのだろうか？

メールを見たとの報告しなくちゃいけない。

日付の変わってしまった、AM0:40。

いくら携帯でも、この時間はメールしていい間柄じゃないわけで・・・

おそらく夢の中であろう、お嬢様を起こしたくない事と

前述の複雑な心境により、リアルタイムに読んで欲しくない理由から、

パソコンのアドレスに返信してみた。

すると、何故かすぐ携帯宛にメールが来る。

「お帰りなさい。年末は忙しいんだね・・・

体に気をつけて頑張ってください！

お休みになったら、逢える事を楽しみにしています

P S おやすみ みどり」

パソコンにメールしたのに、レスは僕の携帯だ。

リアルタイムで確実にメールを読んでもらいたかったのだろうな・
・
・

捻じ曲がった心は痛くもあり、切なくもあるんだ・
・
・

有難迷惑

12月26日（火曜日）

また朝から大変だった。

ギリギリの資金繰りで管理している取引先から、取立手形の不渡り連絡。

なぜ、昨日のうちに連絡くれないんだあ？（無理）

「また田原の担当でなんか起こつたらしい・・・」

支店の中は、そんな空気いっぱいに満たされていくんだ。

そんな時、またもや次長が心配して僕のところに来てきた。

「田原くん、塩足りなかつたんじゃないの？」

・・・・・・頼むから、あっち行つてろ！

結局、26日の日付中には帰宅できなかったんだ。

不渡りもそうだけど、VIP顧客から、これでもかつて言うほど、呼び出しの多い一日だった。確かに、清めの塩は足りなかつたのかもしれない。

普段いくら月末近くても、こんなに忙しさの連続なんてありえないのだから。

だから、融資案件を抱えた事務的な仕事は、顧客からの電話がおさまる、

午後7時以降からのスタートになるんだ。

融資の案件は、他人に頼めるような簡単な仕事ではないのだ。手伝いを申し出てくれる同僚もいるのだけれども、

残念ながら、その気持ちだけを頂戴して頑張るしかない。

僕が挫折したら、取引先には多大なる影響が出るのだから。

そのことは、実力の無い時代感じていた状況と変わりが無い。できる力を得た今では、行動で示すしか解決方法は無いのだ。

なんとか時間を取り繕う中、次長がまたまたやって来た。

「田原くん、お歳暮でモンゴルの塩が送られてきたからあげるよ。」

・・・・・・・・・・1000円やるからあっちへ行け！

AM0:30 帰宅

あと、7時間30分後には銀行に戻らなくてはいけない。

次長の顔も見なくてはならないし・・・・（まだ怒っている）

忙しい一日ではあったけど、昨日お嬢様のメールを気がつかなかったから、

なんとか、携帯の着信やメールチェックはするようにしていたんだ。今日はなにも無かったな。

一応、パソコンのほうもチェックしておくか・・・・
石のように重くなっている体に最後の命令を出す。

そして、受信されたメールにより

今年の年末年始が波乱万丈なものになる事が予感された。

メールの内容は、

独り身でから、孤独に年越ししなくちゃいけない僕の為に、

今年は斎藤家で年越しいかがですか？

・・・・・・なんて、有難たいのか、そうでないのか良くわからないお誘いだった。

『年を越す』という事は、『泊まれ』ということなのだろうか？

いくらなんでも僕はそこまで厚かましくできません。

大体、まだ彼女とはそんなに深い関係ではないのだ。

見合いをしたと言っても、3回食事に行った程度なのだから・・・
彼女の優しさは伝わってきたのだけでも、丁重に断ろうと思っていたんだ。

でも、メールの追伸にはこんな事が書いてあった。

『父も是非来てくださるように言っています!』

・・・・・・・・筆頭取引先の威厳は重い。

斎藤家は、酒川中央支店筆頭取引先である。

組織会会長であり、当行は創業以来のメイン取引先なのだそうだ。
加えて、酒川薬品工業は、県下でも5本の指に入っている優良企業
なんだ。

某データバンクのランキングでは、常に3〜4位に顔を出す常連で
ある。

年間やウチのデータを見る限りでは、凄い会社である事は間違いな
いんだ。

・・・・・・・・その父が会いたいつてか？

まず、メールしよう。

もう遅い時間だ。それにパソコンで受信したメールなんだ。
返信はパソコンで送ってみたのだ。

「おさそいありがとう。」

でも、年末は迷惑じゃないでしょうか？

家族団欒を邪魔するのは気が引けます。

今週はとても忙しいので、ろくに連絡できませんが、
年が明けたらゆっくり会いましょうね・・・

田原

「

送信。

遠まわしに遠まわしに遠慮してきたのだと感じ取ってくれええ！
またまた強く念じてみた。

すると、何故か携帯のメール着信音が鳴る。
お嬢様だ。いったい、何時に寝ているんだろう。
パソコンに送ったメールが通知されるのかな？
あまりにも早い反応に戸惑ってしまうんだ。

「そんな事ありませんよ！

ささやかですが、ウチでお正月を迎えましょう！

家族みんな歓迎しています。

特にお父さんがね（*^ ^*）」

・・・特にお父さんか。（ ; ）！！

退路は絶たれた。

年を越すという事は、泊まれということなのだろうか？

紅白みて年が変わったら、「お帰りください」なんてことあるのか
な・・・

確認しづらいから、泊まるつもりで覚悟しておいた方がいいのかも。
この1週間の疲れを取るには、もってこいの休日だと思ってたんだ
けどなあ。

新たな悩みの種の出現に、ますます疲れが溜まって朝を迎えること
になったんだ。

「なんだ田原くん、目にクマできてるよお！」

相変わらず、お気楽な次長は朝から極楽だ。

こんなのにも相手する時間は僕には無いんだけど・・・

「・・・ええ、クマは今年の流行でしたから。」

チヨモランマ

12月27日（水曜日）

次長から、クマの件を指摘された後、僕はクマツタ・・・失礼、困った事になった。

保証協会付保融資先の連帯保証人が亡くなったと連絡があつたんだ。なんで人間は簡単に死んでしまうのだろう。

まさかの3日連続事故報告は、間違いなくなにかが起こりそうな前兆だ。

そして僕には、その前兆に心当たりがありすぎる。

「明日は御用納めなので、今日中に報告お願いします。」
極めて事務的な保証協会担当者。

同じ年の女性主査なのだけれども、彼女とはなにかと相性の悪いんだ。

何事にもクールである一番嫌いなタイプなんだ。

彼女には血液の代わりに不凍液が流れているに違いない。

何故ならば、彼女の体は、80%が液体窒素で出来ているのだから。冷たすぎます、あなたの対応は・・・

「年明けでもいいですよ、どうせこちらも今貰っても見れませんから・・・」

くらいの優しさがあれば、僕はあなたに惚れていた事だろう・・・
（ウソ）

「氷の微笑」とか、「クールビューティ」と言われているらしいが、決して容姿でついたあだ名じゃないからな！

・・・・・・今度目で殺してやる。（絶対無理）

そんな多忙を極める午後3時丁度に、不吉な着信番号を表示する電

話があつた。

「……遠藤秘書だ。」

聞きたいことは山ほどあるぞ！

なんで、お嬢様が僕のアドレス知っているのだ？

それ以前に、なんで遠藤秘書が僕のアドレスを知っているかも聞きたい！

「……どの程度まで報告してあるの？」

怒りを抑えて、とりあえずジャブを打つ。

「ありのままです……」

「……やっぱり。」

小出しにされれば、質問も連続するのだけれども、

推理小説の犯人を、冒頭に聞いてしまった様な心境に、

怒りはいつしか消えてしまった。

アドレスの件なんかより、もっと大きな不安が浮上したのだから。

「……お嬢様の父上から、いきなり手打ちにされる可能性が出できた（泣）」

遠藤秘書の用件は、斎藤家訪問の後、田原家にも帰省して欲しいとの依頼だった。

兄貴の結婚式以来、たまに顔を出さなくては……なんて考えていたわけだから、

その事に関しては依存が無いのだけれども……

手ぶらでは帰りづらいな……なんて事を口にすると、遠藤秘書は一言。

「先生の好物は天津甘栗ですよ……」

「……そんな事は知っている。」

問題なのは、それが今の答えでは無いって事だ！

斎藤家にお邪魔する事を考えるならば、

田原家に帰省する方がまだ楽かもしれない。

斎藤家にだって、当然手ぶらではいけないわけで……

仕事よりも、こういう社交的なことの方が僕は苦手だ。

「何を準備したらいいんだろうか……」

また頭の痛い問題が増えたんだ。

あれ、なんで遠藤秘書は斎藤家に行くって事を知ってるんだ？（怒）

12月31日（土曜日大晦日）

29日で業務を終えた銀行。

最終日は御用納めと言うことで、業務終了後に全員が神棚に手を合わせる。

だから、忙しくてもこの日だけは早く帰らねばならない。

『反省会』と称した狂乱の宴がまっているのだから……

たくさん仕事を残したまま年を越せるわけでもなく、

当然ながら30日は休日出勤となるんだ。

反省会がなければこんな事なくて済むんだけど、

「与えられた時間で仕事をこなせない」という負い目を感じる所もあり、

文句もいえないわたくし。

顧客からの電話も来ないし、仕事は順調にこなせた。

午後は早めに切り上げたのだけれども、僕にはもうひとつ仕事があった。

『お土産』を選ばなくてはいけない重要な仕事なんだ。

普通の家庭であれば、なにも考えないで『菓子折』でいいのかも知れないが、

相手は県下トップ企業の経営者である。

どのような物であれば、喜んでもらえるのだろうか？

物ではなく気持ちだとは良く聞くが、それは、『気持ち』と『物』のバランスが取れている場合のみ有効な考え方だ。

大抵の場合は、「なんだ、これ？」とか「なんだ、あの態度は？」になっちゃうんだ。

散々迷った挙句、『菓子だな、やつぱり……』と結論に至る。富原では一番有名な『献上 羊羹』1本1万円……

羊羹としては、尋常な値段じゃないな。

僕は、味と値段は比例して当たり前だと思っている。

だから、安くて美味しい物こそ王道であり、高くて美味しい物は常識なんだ。

僕は王道に生きたい。……というか、これが身の丈なんだけどね。

1本一万円だけあって重量感抜群の羊羹だな、これは。

相手の家柄からすると、こんなものは珍しくないかもしれないが、手ぶらよりもましと言うところかな？

いらなかったら、文鎮にもなるし……（おいおい）

こうして、僕は大晦日を迎えたんだ。

世間一般では、銀行の敷居は高いと言われている。

けれど、斎藤家の敷居はレベルが違うんだ。

まさにチヨモランマ級。

生死がかかる程のプレッシャーが僕を襲う。

泊まるか否かも分からないので、とりあえず余計な荷物は車に置いたまま、

お土産の紙袋ひとつで門の前に立つ。

インターフォンを押すと、なにらや美しいチャイムが鳴った。

『ピンポーン』なんていう安い音じゃないのね……

「どうぞ、おはいりください・・・」

インターフォン越し、上品な感じの声と一緒に、門が開錠された。

こうやって、僕は斎藤家への第一歩を踏み出したんだ。

共通点

「こちらへどうぞ．．．」

出て来たのは、お母さんだろうか？
それとも、お手伝いさんだろうか？

着物姿で出てこられても全く違和感の無い家．．．というか、屋敷だけに、

品のいいエプロン姿のおばさんが、そのどちらであるか判断しかねた。

営業スマイルで警戒している僕にとっては、
そのどちらであっても良いように、対応しているつもりなだけ
ども．．．．

「少々お待ちください．．．」
長い廊下を抜けて、応接室に通された僕は、
出てきたお茶と一緒に、ひとり残されるのでした。

「．．．．．！？　なんだ、このお茶あ．．．」
とてつもなくヘンな味がする。

上流階級の飲むお茶は、庶民が飲んでいるお茶とは違っのだろうか？
おそらく、グラム何千円とするであろうお茶は、
僕の舌にはまったく合わなかった。

そんな苦虫を噛み潰した顔をしてしまった瞬間、応接室の扉が開い
たんだ。

うわあ、今の顔見られただろうか．．．
さすがに県下トップ企業の社長だ。

そこら辺の中小企業の社長達とは発するものが違う。
銀行員のアンテナはフル稼働状態なんだ．．．

「ぶつ、かーさん！このお茶、まずいからお客に出すなって言った
だろ？」

・・・・・・・・・・よかった、共通点があるようだ。

聞けば、さっきのおばさんは、社長の奥さんの様だ。

煎茶道の先生らしく、おもてなしの特別なお茶なんだろうけど、
僕にはさっぱりでした。（涙）

香水をすっかりお茶に落としちゃった程度にしか理解できません。

・・・・・・・・・・社長にもね。

お嬢様は、夕食の準備で外出中との事。

間もなく戻るからと説明を受けたが、さあ困った。

社長と僕の共通の話題はお嬢様の存在だけなのだ。

ベロ屋と呼ばれる銀行員であるわたくし。

間を持たせる為のセールストークはそれなりに心得ている。

でも、今日に限ってはそんな気分にはなれないんだ。

・・・・・・・・・・遠藤レポートのせいだ。

「ごめんなさい、お待たせしちゃって・・・」

待ちかねたお嬢様の帰宅。

社長との面談は10分程度だったけど、僕には1時間以上の長さ
に感じていたんだ。

「・・・・・・・・・・それに、無理言っでごめんね。」

今度は、僕にしか聞こえないくらいの声でやささやく。

なんだ、僕のメールの意図するところは、伝わっていたんだ。

・・・・・・・・・・ということは、今日のおおよその趣旨が分かってきたぞ。

社長が（奥さんも？）僕をどんな男か面接してやろって事だな・
・・

いよいよ、今年最後の大仕事が始まる。

判断

斎藤家に招かれる初めての夕食が始まった。

大晦日の夜なのに、僕みたいなよそ者がここに同席していいのだろうか？

落ち着かない僕の気持ちをよそに、グラスは音を立てた。

上流階級の大晦日なんてどうなに凄いものなんだろうと予想もできなかった。

確かに出てくる食材や器は、素晴らしいものが多かったのだけれども、

その雰囲気は意外なほど気をつかう事の無いものだった。

少なくとも、娘の見合い相手は如何や？なんてものじゃなかったんだ。

いくら緊張しているとはいえ、その場の雰囲気を感じられないほどではない。

年末最後の夕食をみんなで大いに楽しもうという暖かな一時だった。

食事には、お嬢様と1つ違いの妹（24歳）も同席したのだけれども……

双子か？

見間違えるほど良く似ている。

……僕は、双子でも全然似ていなかったけど。（汗）

犬井夫人とパグを思い出した。（外伝にです）

僕がお酒を飲まないからか、

斎藤家もお酒を飲む習慣がないからなのか、

乾杯のグラス以外にお酒は出てこなかったんだ。

和やかな雰囲気につられて、ちよつと余裕が生まれていた僕は、

つい余計な事を聞いてしまう。

「社長はお酒を召しあがらないのでしょうか？」

聞けば、仕事柄宴会が多いため、自宅でお酒は飲まれないとの事。奥さんもお嬢さんふたりも飲まないから、斎藤家に晩酌という習慣は無いらしい。

「それに、今日は判断にぶつちや、まずいからねえ……」

……箸が止まった（汗）

「冗談冗談……（笑）」

……洒落にならない。

でも、実際その通りなのだと分かっているんだけど。

お嬢様だって、目が笑ってないぞ、まったく……

長い目で見て欲しいのは、僕だけではないはずなんだ。

お嬢様だって同じはずなのに……

……はずだよな？

ちよつと血の気が引く。

「明日は新年だから、飲まないとなあ。」

田原君は御屠蘇くらい大丈夫なんだろう？」

「だめです。」（即答 ホント）

……斎藤家への宿泊が確定した。

田原家との大晦日とさほどの差が無かったように感じられた斎藤家の大晦日。

それは非常にありがたいことであつたんだ。

どうやって食べたらいいかわからない賢覧豪華な食事が出てくるよ
うでは、

お嬢様と僕はまったくバランスが取れないわけで……
可能性が絶たれなかった事に、初めて僕は安堵したんだ。

「風呂に入るか！」

突然社長が一言。

年明けとともに参拝に行くって言つてたけど……

入浴後では寒いのではないかな。

今夜は大分冷え込むと予報されているし……
なんて考えていたら、こんな事を言われたんだ。

「田原くん、一緒にはいるうか！」

「えっ？」と思うのは当然だろう。

……社長。まさか、性同一性障害じゃ。（おいおい……）

裸の付き合い

かほ ん・・・・・・・・

すごい！

この一言に尽きます。

斎藤家には、温泉が湯引きしてあるんです。

しかも、源泉かけ流しだ……

ここ酒川市は、温泉地としてもそこそ有名であるから、

斎藤家だけでなく温泉を自宅に湯引きしているお宅は多いのだから。

でも、自宅で温泉が出たとしても、あくまで普通の浴槽なわけで……

同時に数人が入れるようなお風呂なんて、旅館でしか見た事無いぞ。

（汗）

しかも、内湯のほかに露天風呂まである……

「田原くん、男同士裸の付き合いだ……」

……………貞操の危機！？（おいおい）

こうやって、面接は始まっていったんだ。

「田原くんは、何故銀行員になつたんだ？」

最初の質問は、簡単そうでは実は最も難しかった。

それだけ、動機に対して決定的なもの無かつたんだ。

動機の語源化は難しいね……

でも、思いついた事を順番に話してみる事にする。

会社の経営をしてみたかった事。

そして数字に強い経営者になりたかった事。

また組織の一員として、手足で働く事も経験してみたかった事。
それらを叶える方法として、銀行員は最適であると考えた事。

そして、

親父が元・銀行員であつた事……

僕と親父の間には、今もって確執は続いているんだ。

でも正直、尊敬もしている。

矛盾なんだけどね。

親父は、メガバンク合併前の某都市銀行出身なんだ。

代議士としては先代の祖父から地盤を譲り受けた、いわゆる二世議員なんだけど。

僕は、政治は世襲ではないと思っている。

でも、どのような職業でも、子は親の背中を見て育つよね。

子が親の職業に憧れや尊敬を抱く事は自然な事であつて……
もちろん、僕に政治家になれるような器がないことはわきまえている。

後継は、兄貴にまかせておけばいいことなんだ。

そんな僕でも、かつて父が夢見た世界に興味が無かつたわけじゃないんだ。

だから、僕は銀行員という道を選んだのだろう。

そう、社長に伝えてはつと我に返る。

こんな事を、今日はじめて会つた人に……

しかも、お見合い相手の父親に話してしまうなんて。

温泉が言わたとしか考えられない！

のぼせあがつた頭が余計な事を喋りすぎたかな……
って感じで社長を見ると、目をつぶつたままピクリとも動かない。

・・・・・・・・・・寝てる？（はっ・・・）

入浴中の睡眠は、ほとんどの場合『気絶』なのだそうだ。
睡眠よりは気絶の作用であるが為に、極めて危険なのだ。
お湯の中に顔が入ったまま気がつかないケースが多い。

・・・・・・・・・・まさか、死んでる？（おいおい・・・・・・・・）

「・・・・・・・・・・私も二代目でね。」

目をつぶりながら社長が話し始める。

よかった、生きてたあ！（失礼）

「気がついたら二代目社長だ。お父さんの気持ちは良くわかるよ・・・」

それは、とても意味深い言葉だと思った。

後継であり続ける事の重圧と、後継を育て上げる事の重圧。

そのような立場の人でなくちゃ言い表せないような重みのある言葉だと感じたんだ。

「田原くんの事は、遠藤さんからいろいろ聞いているよ・・・」
ついに！・・・・・・・・・・というか、やつぱり！！（驚）

証拠は拳がっていると言われた犯人の心境ってこれかあ。（泣）

「娘にはいろいろな方面から話があるのだが・・・」

これだけの良家なのだから、当たり前だろう。

太田家とは違い、2代目社長の斎藤家は歴史的な事からすれば、戦後からの家柄だ。

けれども、まさしく今が全盛の斎藤家。お嬢様は、生まれながらに

してお嬢様。

いかに大事に育てられてきた事は、この一言で十分わかったんだ。そして、社長からこんな事を教えてもらったんだ。

娘には初めてのお見合いであつた事。

見合い後お嬢様は、ほぼ毎日両親に僕の話をしている事。

娘は結婚してもいいと考えている事。（前向きに検討しても良い程度だと思料）

僕の情報は遠藤レポートにてほぼ知っている事。

そして、

そのレポートの内容は、お嬢様は全く知らない事。

遠藤レポートを読んでいるのならば、何故僕を斎藤家に招いてくれたのだろうか。

事情はどうあれ、水商売女との交際に、支店長への反逆だろ？ 斎藤家ほどの良家ならば、お見合いのテーブルにさえ乗らない話だったかもしれない。

「ああ、君には光るものを感じたからね。」

遠藤レポートの話で不安な顔していたのだろうか、社長が僕にお世辞というか、フォローしてくれたんだ。すっかり銀行員の仮面なんて忘れていたっけ。

レポートや娘の話だけの情報で、会ったばかりの僕の事なんか、評価できるはずもない……

まさか、『七光り』だったか？

遠まわしに自分に光るものなんて、そんなものしか持ち合わせていない事を告げる。

「七光りだって光らないものよりいいじゃないか！」

・
・
・
・
・
・
・
社長。
フォローになってない。
(泣)

やさしい人間

「私は、やさしい人間が好きなんだ。」

優しさを知らない人間は、柔軟性に欠ける。

優しさを知る人間は、応用性に富む。

・ 経営者としては、後者でなければ、組織を維持する事は難しい・・・
というのが、社長の持論だった。

「『泣いて馬謖を切る』って、聞いた事あるかい？」

「はい、諸葛孔明の話ですね・・・」

「そうだ。なんで諸葛孔明は泣かなくてはいけなかったのか・・・私もいつかそんな時が来るんじゃないかって、日々不安なんだ。泣けるからこそ人間であり、泣かないで人が切れるようじゃ人間ではないのだ。」

社長の言う事は銀行員の僕にも良く理解できたんだ・・・
経営者なのだから、自分の決定ひとつで部下や取引先の運命を左右する事が出来る。

しかし、一時の感情や気の迷いが、社員達を路頭に迷わせるかもしれないという責任。

『汝隣人を愛せよ』『啓天愛人』といった、相手を思いやる気持ちと、

『適切な判断力』を兼ね備えた経営者こそ、社長の目指す所なのだ。

「娘の夫には、それが最大の要件だと考えている。」

・・・・・・社長。僕を泣いて切るつもりじゃ。（汗）

遠藤秘書からも、お嬢様からも、僕のことは大分聞かされているから、

初めて会った気がしないと社長は言うんだ。

遠藤秘書からのレポートが詳細であった事は、このとき初めて知る事となる。（覚えてろ！）

営業中に猫を拾ってきた事まで知っているのには、さすがに閉口した。

・・・・銀行にも協力者がいるな。

でも、僕じゃ役不足である事は、考えるまでも無い事実な訳で・・・

・

「のぼせるから、そろそろあがろつか・・・・」

こうやって、僕にとっての1次面接は終わりなんだと思ったんだ・・・

風呂を出ると、脱衣所はくつろげる造りになっている。
温泉旅館と変わらない、ちょっとした茶屋の样だった。

ここに自動販売機が置いてあっても少しも違和感が無いな・・・・
・・・・ソフトクリームが食べたい（言えないが・・・・）

裸の付き合いが、タオル一本の付き合いになって、面接は延長戦に突入する。

「今日は、呼び出したようで悪かったねえ。

私もなにかと忙しくて、時間が取れるのは年末年始だけだったんだ。

まず、田原くんにお願いがあってね・・・・」

．．．．．なにかが来る気配だ。

「娘と結婚してやって欲しい．．．．」

キタ

（．．）

！！！！！

プロポーズ

「もちろん、これは父親としての希望だが……」

つまり、娘が望むならば、僕のことはOKだということなのだろうか？

娘の将来を思う、父親の気持ちというのは、分からなくはないけど……

「もちろん君だけではなく、お父さんに対しての期待があるのも正直なところだ。」

まあ、当然だろうな。

下心を隠さない潔さなんかも、僕はなんとなく好感がもてる気がするんだけど。

……社長。正直すぎるよお。（泣）

そして、それ以上の会話が續かないまま、面接は時間切れとなったんだ。

社長は近くにある神社の総代として、神事に参加しなくてはいけないらしい。

僕とお嬢様、妹さん、お母さんの4人で年越し蕎麦を食べた後、その神社に初詣の参拝をする事になった。

歩いて5分程度の距離にある酒川熊野神社。

日本三大なんとかのひとつに数えられるのだそうだが、あまりにも三大なんとかは世間に多すぎる。

日本人は、なんでも三大 と呼称したがるのは何でだろうな。

星空が澄んで見える分、外は大分冷え込んできた気がする。
お嬢様の吐く息が、白い色をまとって消えていく。
わずかにゆらめく星空を見上げながらこう思ったんだ……

『親父にプロポーズされたあ！』ガ　（　　）　　ン！！

した事はあった（涙）

でも、受けるほうは初めての経験だ。

しかも、それが親父からかあ……

複雑な思いでお邪魔した斎藤家。

ますます複雑になっていく僕の心。

捻じ曲がったまま斎藤家にお邪魔していた事は、

それだけで後ろめたい気持ちがあった訳で……

遠藤レポートは、社長のみが知っているとの事。

だから、お嬢様は知らないし、知るべきでないと社長は言うんだ。

その上で、結婚か……

「やったー！みて、大吉」

お嬢様と妹さんはおみくじを引いている。

大吉なんて新年から縁起がいいな……じゃ、僕も。

………凶！（絶句）

「大凶じゃなくて良かったねえ……」

慰めになっていない妹さんのお言葉に、

ただ笑うしかない僕とお嬢様。

たしか初詣では、縁起が悪いとかいう理由で、

凶とか大凶なんかほとんど無かったはずじゃ……？
まったく、クソ真面目な神社だ（罰当たりな……）

そして、おみくじの内容は・・・

ほとんど駄目だあ。

願望　失物　旅行　健康　学業・・・まるでダメ。
さすがは、凶たるおみくじ、妥協がない。

「……そうだ、我々銀行員は『神や仏はいない!』と心悟った人間ではないか。」

こんな紙切れひとつで人生が左右されるわけがないのだ！
そんな都合のいい解釈を思い出す。

縁談……良縁調うべし。あせらずしてまで。見合いがよし。

[illegible]

祝い膳

よその家で迎えるお正月。

落ち着くわけもなく、ほとんど眠れない。

斎藤家のサツシ越しに、ぼんやりと初日の出を眺める事になった。

「・・・・・・・・去年より大変だ。」

たった一年なのに、置かれた状況は天と地ほどの差があるんだ。

でもそれ以上考えれば、僕の事を思つて去つた人達に対して失礼になる事だろう。

この新年を僕に与えてくれたのは、みどりをはじめ、多くの人がいしてくれたからなのだ。

「わかつているんだけど・・・・・・・・」

そう繰り返しているうちに、朝はやってきたんだ。

「あけましておめでとうございます・・・・・・・・」

朝は8時から奥の座敷にて祝い膳だと聞いていた。

客間に泊まつた僕は、朝は祝い膳の席で斎藤家の人達と初めて会うのでした。

なんせ、客間にはユニットバスまで完備されており、

まつたく外に出ることなく客間だけで快適に過ごせたんだ。

下手な温泉旅館よりずっと居心地は良い。

「あけましておめでとう。良く眠れたかな？」

実は眠れていないのだけど、それを気取られないよう注意しなくちゃ。

そして僕は、襖を空けて止まってしまう・・・

・・・・・・・・みんな着物だあ！

ジーンズにパーカー、ひとり浮く。（涙）

テーブルには、五段重が置かれている。

今までおせち料理は、三段重しか見た事ないな……。さすが斎藤家のお正月だ。

しかも、みごとに久谷の大皿に、目を見張る紅白の刺身が盛られている。

「さあ、乾杯しよう。」

ひとり場違いな僕の事などお構いなく、斎藤家の祝い膳は始まった。

乾杯を終えると、また問題があることに気がつく。

「……。どっちが、お嬢様だろう？」

着物を着た姉妹は、どちらが「みどり」さんなのか区別が付かない。昨日だって、双子に思えるくらい似ている姉妹だったけど、着ている服と髪型が違っていているから、見分ける事は容易だった。

けれども、同じ部屋に最初から揃っていると、どっちがどっちなんてわからないんだ。

髪型もアップにしちやって、ますます分からない。すると、声まで同じに聞こえてくるから不思議だ。

「……。ちょっと、誰でもいいから、どちらかの名前呼んでくれえ。（泣）」

「みどり、お醤油とつて。」

「はい、おとうさん……。」

「はい、おとうさん……。」

「……。なんで八モる！（怒）」

「これって……。」

紅白のお刺身は、魚じゃなかったんだ……

「なんの刺身だかわかるかい？」

「・・・・・・馬刺しですか？」

「良くわかったね・・・・正解だ。」

赤身の刺身は馬肉だって事はすぐ分かったのだけれども、

白身の刺身は何の肉だろう・・・・・・

素晴らしく濃厚な脂身・・・・って感じは、マグロの大トロに似ている。

赤身と一緒に食べれば、中トロだ。

朝から獣肉？とも思っただけれども、癖のない食感は思いのほか上品であり、

見た目の鮮やかさと相まって、とてもおめでたくなる趣向である。

「白身も肉ですよね・・・・なんの肉でしょうか？」

「馬のタテガミだけど、旨いだろう。」

・・・・・・タテガミ！

これが噂に聞く馬のクビの肉かあ。

熊本に貧乏旅行したとき、馬のタテガミは絶品と聞いた事があったけど、

食した事はなかったな。はじめてお目にかかった貴重品だ。

これは珍味と驚いているとき、女性陣がなんだか引いている事に気がつく。

「あれ、皆さんは召し上がらないんですか？」

一様に笑みを見せるが、目は決して笑ってはいない。

「・・・・・・いつもは食べるんだけど、今日の馬肉は嫌だって言うんだ。」

社長が顔をしかめながら説明する。

「ちょっとお父さんやめてよ、その話は・・・・」

でも、そこまで聞くと聞きたくなるじゃない。

目が輝いてしまった僕のことには気がついてらしく、やっと秘密を教えてくれたんだ。

「この馬肉は、ポニーなんだよ・・・・」

ポニ

!!!!!!!!!!!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

なんでも、通常の馬刺しはサラブレッドなんだとか・・・・・・・・
牛や豚と違って、初めから肉用の馬なんてのは日本の畜産界では存
在しないらしい。

競走馬としての職務を全うした馬がたどり着くとは、食卓なんだ
とか・・・

でも、サラブレッドは赤身は旨いが、肉にサシが入らない。

ポニーや道産子などは、サシの入った良い肉になるとの事。

小型であり、肉の絶対量が少ない事と、食肉業者から手間のかかる
ことで遠慮され、

本場熊本以外では、めったに市場に出回らないのだとか・・・

・・・・・・・・ポニーかぁ。

最初はびっくりしたけど、この旨さを覚えちゃったからなぁ。

次会うときは『かわいい』じゃなくて『うまそう・・・』だったり
して（おいおい・・・）

前進

五段重の中身は、意外なほど僕の知っているおせち料理と変わりはなかった。

黒豆、かまぼこ、伊達巻、数の子、金団……

日本の伝統料理は、どこの家でも同じなんだね。

お雑煮だけが、田原家とは違って白い気がするけど……
んっ、甘い。白味噌ベースってこっちは珍しいな。

しかも、丸餅だし。

実家では、醤油だしで切り餅なんだけどなあ。

「うつ……！！」

……餅が喉に詰まったのではない。

原因は餅なのだが……

「餅の中に、あんこが入ってるううううう！」

社長の奥さんは、四国出身という事を聞く。

なんでも、奥さんの地元ではこんなお雑煮が当たり前だそうで、
斎藤家の正月には欠かせないとの事。

初めての人は、なんかの冗談だと思いかもしれないな。

僕の認識では、餅に餡は『大福』だし……

カラオケBOXで、知らずに食べた『たこ焼き』に、

大量のカラシが入っていた時ようなショックに似ている。（ビック
リたこ焼き350円）

こうやって、いろいろ驚く事もあった斎藤家『祝い膳』が、終わっ
たんだ。

全員が着物だった瞬間、僕だけが浮いてしまった感じがしたけど、
最後には、そんなことがどうでもいいくらいの気持ちにさせてくれ

た斎藤家の人々。

温かい家庭の雰囲気は、どの家庭でも同じなんだな。その事には、僕は十分救われたような思いだった。

「ふたりで初詣行ってきたら・・・」

お母さんが、僕たちのことを心配してくれたんだ。顔を見合わせちよつと笑ってしまう僕たち。

そういえば、お父さんの面接に始まった斎藤家の訪問で、一度たりとも二人きりなんて事はなかっただけ。

趣旨としては、お嬢様に逢いに來た事になつてゐるのにね。一息つきたい気分でもあつた僕は、早速お言葉に甘えてしまふんだ。

「今度は、お寺にする？」

もちろん、酒川に土地勘のない僕は、どこに行くにも従うしかないのです。

そこは、またもや日本三大　に数えられているお寺だった。

文殊堂があるらしく、受験を控えた若い人とその親御さんであろうか、

かなりの参拝客でにぎわっているんだ。

長い石段を登る途中で、参拝客の足が止まる。

ここから文殊堂までは待つ事になるな・・・

階段を見上げながら、長期戦を覚悟したのだけれども、

お嬢様は着物のせい、階段が堪えるようなんだ。

それに、夕べから寒さが続いているからおさらだ。

ふと目をやると石段の途中に茶屋みつけたので、甘酒を買いに列を離れる。

そして、ひとつ買つて来てお嬢様に渡したんだ。

「ありがとう・・・」

「お正月は甘酒でしょ」

でも僕は「甘酒」でも危険なので飲めない・・・（恥）

「酒川にこんなところあったなんて知らなかったなあ……」
地元では有名らしかったが、僕はちつとも知らなかった。

「あら、田原さんでも知らない事あるんだあ。」

銀行員なのだから、多少世間を見ている分、雑学は豊富だと思って
たけど、

万能じゃないんだよなあ。あまり期待されるとがっかりするよ……

「でも、こういう所も知ってみて、初めて酒川の魅力ってわかるで
しょ？」

……正直、この言葉に僕はなんともいえない気分になっ
た。

斎藤家の事。

お嬢様の事。

知っていくにつれて、僕との距離が近づいている事。

知る事の先には理解へと至る。

僕は、お嬢様と理解への先にある極みに到達できるのだろうか。

かつて経験のない出会いから生まれた理解の扉は、
ここから開かれていった気がするんだ。

「またおみくじ引いてみる？」

「また凶だったら、やだなあ……」

「そんな事ありえないから、大丈夫だよ」

そして、お嬢様は再度大吉を引く事になる。

僕のおみくじは……末吉。

吉の中では最低だ。（泣）

凶のひとつ上。

「やったね、ひとつ前進したじゃないの」

慰めてくれてありがとうございます.....

伴侶

1月2日は田原家の新年会と称す親族会なんだ。
毎年恒例の田原家にとつては儀式みたいなもの。

親族一同が顔を出すのは選挙の時以外ではこれだけなので、
極めて出席率が高く、親族の間でもこの新年会に参加する事が重要
視されているんだ。

選挙という結束すべき目標がある田原家では、
一族の血の繋がりは大切な武器であるわけで……
遠藤秘書からの依頼があつた事と、ご無沙汰している親族に挨拶す
る目的の為、

10年ぶりにこの会に出席してみる事に決めたのだ。

だから、お嬢様の家で迎えたお正月だったけど、

1日の午後からは文鎮にもなる羊羹を携えて、田原家に帰省した。
母親が気をつかつてくれたのか、

親父が朝から不在だったからなのか、

真意までは理解することが出来なかったのだけれども、
家族そろって迎えるお正月は10年ぶりの田原家「祝い膳」。

世間では夕食時なのにこの時間から始まったんだ。

妹は海外で暮らしているため、帰つてはこなかったけど、

兄貴の妻、つまり義理の姉が新しい家族となったから、

両親の他、3人の兄弟は変わりがなかったんだ。

義理の姉は僕より2つ年上で、兄貴の結婚式以来まともに会うこと
なんて無かつたけれど、

えらぶらない人柄に、兄貴も素晴らしい奥さんにめぐり会えたもん
だと喜ばしく思うんだ。

質素儉約を旨とする田原家なのだが、さすがに今日は、斎藤家並の
祝い膳。

親父の活躍。

兄貴達の結婚。

そして僕の帰還……

いろんなお祝いの意味があるんだと、母親に対して今更ながらに懺悔する。

10年ぶりの帰宅でちよつと驚いたことがあったんだ。

僕の部屋が、10年前とほとんど変わりにくく存在してたって事なんだ。

もちろん、埃まみれなんてことではなく、きちんと整えられている部屋は、

僕の帰宅を10年間待ち続けてくれたんだ。

そして部屋には母親の10年間の思いも詰っている。

それだけは、親不孝な僕でも十分すぎるほど分かる事だったんだ。

そして、日付が変わり2007年1月2日。

田原家新年会が始まった。

新年会は、親族の経営する旅館にて行われる。

親族総勢100名余り。

血縁的に遠くなっても、選挙では立派な親族なんだ。

また親族であつたほうが、なにかと都合がいい場合も多いのだ。

そのことがたまらなく嫌であり、苦痛と感じた時もあった。

今でも全く感じないといったら嘘になるんだ。

理解する事も大人になった僕の証と、今はそれ以上考えないようにしているんだ。

「おや、聡ちゃん久しぶりだねえ。」

「あつ、和尚様。ご無沙汰してます。お元気そうですね……」

真言宗醍醐派、兎蒼山大円寺住職は親父の従兄弟にあたる人だ。

小学生の間、田原家の子供は夏休みの10日間程度を大円寺に勉強

を名目に、

精神修行に預けられるのでした。

朝5時に起床して、7時の朝食まで2時間のお勤め。

つまり、ひたすらお経を唱えるのが日課であり、今でも真言宗のお経は全部そらで言える。

その後、夏休みの宿題と、習字の勉強、読書、そして開祖空海の教え……

今考えれば、過酷な夏休みだと思うけれども、

父親がいらないような家庭で育った僕たち兄弟からすれば、

住職は父親の様な存在であり、こんな父がいればと憧れを抱いた事を今でも忘れない。

だからそんな大恩ある住職に、ご無沙汰していることは非礼甚だしいのだけれど……

「お見合いしたなんて風の噂で聞いたけど、その後いかがかな？」

見合いの話はもう親戚中、知れ渡っているのだろうか……

「はあ、そのことでちよつと悩んでいるんです……」

正月だというのに、久しぶりに会ったというのに……

住職には僕の捻じ曲がった心をさらけ出したかったのだろうか。

自分でも良くわからないまま、今の苦しい胸のうちを説明してしまっただ。

「一人居て喜ばは二人と思うべし」

最初にこの言葉を聞いたとき、僕はすぐ理解する事は出来なかった。

「……どんな意味なんでしょうか？」

「つまり、『ひとりではない、わかってくれるひとがいる』という意味だよ……」

「はあ……」

「何故、人間は伴侶を得ようとするんだろう？」

二人で人生を歩む事によって、悲しみは半分になり、喜びは倍に

なるからじゃないかい。

だから、伴侶を得る事ありがたいことであり、
誰を伴侶に選ぶという事は、とても大切な事なんだ……」

「……………」

「聡ちゃん、相手にあわせる力も愛なのだけでも、
相手からあわせてもらう事も愛なんだよ。」

僕は、深い暗闇の底から救い出された気がしたんだ。

住職の言わんとしている事は、痛烈に僕の体を貫いていった。

一人だけの人生ではないんだ……………」

それは、今までも多くの人が僕に教えてくれた事だった。

でも、この日住職から聞いたこの言葉で、改めて胸に刻み込むこと
になったんだ。

「和尚様、それって誰のお言葉なんですか？」

「ああ、親鸞だよ。」

……………親鸞は浄土真宗だろ？（おいおい）

「もちろん、空海も言っていた……………」

……………遅い。

よくある苗字、斎藤

1月4日（木曜日）

2007年の仕事始め。

去年は毎日忙しかったから、今年こそゆつくりしたいものと、新年の抱負は叶わぬ夢物語だ……

でも、松の内までは多くの会社が正月休みなので、5日金曜まで僕たちは楽を出来る。

窓口は、休日が最も忙しいサービス業の方々中心に混雑する場合もあるのだけれど……

そんな安泰なお正月を、忙しい日に変える人達が、窓口に来店してしまったんだ。

「田原さんいらつしやいますか？」

「少々お待ちください……」

午前11時20分。

富原支店には突然の客が多い……

「田原代理、お客様がお見えですけど……」

「……はい。どちら様？」

「二人連れの齋藤様って方です。」

『齋藤』はよくある苗字なんだけど、今の僕にはあの齋藤家しか思い浮かばない。

……二人連れ？

まさか、お父さんと僕の勤務振りをチェックに来たんじゃないよなあ。

「田原さん、忙しいのにごめんなさい……」
やはり、お嬢様だった。

連絡もなしにやってくるなんて何か急ぎの用件でも出来たのだろうか。

それに、お嬢様の後には見知らぬ男性が立っているし……歳は僕と同じくらいに見えるその男性は、初対面なんだけど、どこかであつた事のある人にも思えたんだ。

「ごめんね、用事を済ましたらすぐ帰るから……」

申し訳なさそうに小声でささやくお嬢様。勤務中に容易に逢えてしまうのは、銀行員の良くも悪くもあるところだな。

「どうしても挨拶したいなんて言うもんだから……ついて来ちゃったの。」

「……後の男性の事か。」

まさか、彼氏とか言うんじゃないよな。

不安と戸惑いが僕の中で渦巻き始めるんだ。

「わたしの兄です……」

えっ！？お兄さんなの？

「……って言うか、姉妹じゃなかったの？」

「田原、VIPか？」

次長が目で合図を送る。

齋藤家のご子息なのだから間違いではないのだけれども、プライベートな理由と言う訳にもいかず……

「応接室使用します……」

そう伝えて二人を応接室へと案内する。

「VIPです……（邪魔すんなよ！）」

次長へ僕から目で合図（牽制）を送る。

すると小さくうなずくお気楽次長。

一応上司だ。アイコンタクトの受信は流石だな。

プライベートの会話が同僚たち聞かれない為には、応接室のほうが

都合が良かった。

「時間は大丈夫なの？」

「ああ、今日はまだ会社関係が休みだからそんなに忙しくないんだ。」

「お兄ちゃんが、急に挨拶に行くなんて言い出すから……」

「……ついてくるお嬢様も同レベルだけどな（汗）」

「あらためて、はじめまして。みどりの兄で真治です。」

名刺を交換して席に着く。

『横田大村合同法律事務所 弁護士 齋藤真治』

名刺にはそう書かれていたんだ。

弁護士が銀行にくるときはろくな事が無い。

たいてい自己破産とか民事再生手続に関することくらいで、

銀行にとって、弁護士の来店なんて歓迎できたものじゃない。

「……それに、弁護士というからには、酒川薬品の仕事はしていないのだろうか？」

お兄さんの存在は、いままでお嬢様から聞いたことも無かったんだ。もつとも、そこまでの情報を聞き出す時間なんて、積み上げていないのだからな。

そんな事を考え始めた時、応接室の扉が開く。

「お待たせしまして、支店長の塩田です。」

支店長乱入！（；）！！

次長、僕から何を受信したのだあ！！！！

兄妹

まだお兄さんとは名刺交換しかしていない状況で、応接室に支店長が乱入してきた。

齋藤さん達も、支店長がくるなんて予想外だったろう。

ちよつと窓口で挨拶程度……って感じだったのに、

応接室に案内したのは僕の都合なのだから……

齋藤さん達が来店したとき、支店長は席をはずしていた。

だから、来客があつた事は知らなかったはずなんだ。

ということは、次長がなんか勘違いをしたことは間違いない訳で……

「VIPが来店しますからご挨拶ください……」
って感じの様子かが頭に浮かぶ。

「こちら、酒川中央支店でお世話になっております、酒川薬品工業の齋藤様です。」

……とにかく今は紹介するしかない。

酒川薬品の事は、支店長クラスなら知らないはずも無い。

当行の中でも、VIP中のVIPなのだから……

「いや、遠いところをありがとうございます。いつも田原がお世話になっております。」

何故県外の支店なのに、一介の行員にそんな人が来たかなんて疑問は、

VIPの威厳で吹っ飛んでいるみたいだな。

VIP向けのセールストークをお約束ではじめる支店長。

ちよつとお茶をすすめる程度の時間を置いて切り返す。

「支店長、そろそろお昼なので齋藤様を食事にお連れしたいのですが……」

「おお、是非ご馳走してきてくれ。ささやかですが、富原の味をご相伴ください。」

「……ありがたいが、経費でプライベートのお昼をご馳走になる訳にはいかない。」

でも、これで外に出かける時間が出来た。

かえって次長の勘違いは役に立ったかもしれない。

「蕎麦でいいでしょうか？」

富原は蕎麦屋が多いんだ。

激戦区だけあって、なかなかのレベルにあるお店が多い。

二人とも依存は無いようなので、僕のお気に入りの『うさぎ庵』に連れて行く。

田舎蕎麦だが、山葵を自分ですりおろして食べる蕎麦は絶品なんだ。それに、蕎麦が出てくるまでの付け合せがとても美味しく、しかも種類が多い

味と値段は比例すると考えている僕にとっても、ここの蕎麦は値段以上の価値がある

「……でも問題なのは、お兄さんが挨拶だけで来たんじゃないって、

銀行員のアンテナが受信していることなんだ。

「元日は自宅に帰れなかったので、お会いできませんでした。」

なにか都合で帰れなかったのだろくな。

僕は最近まで、つまらない意地で帰ることは出来なかったのだけけれど、

そんなにこじれている親子なんて珍しいんだ。

「私の勤務先が富原市なんですよ。」

それを聞いたらご挨拶しないわけじゃないな……
なんて事で押し掛けてしまったんです。」

「たまに帰ってきたと思ったら、田原さんの所に行くって言っから、私、あわてて付いてきちゃったの……本当にごめんなさいね。」

なんでも半年ほど前から、富原の弁護士事務所で修行しているらしい。

司法試験をようやくパスした新人弁護士なのとか。

でも間違っても司法試験なんてのは、実力が無くては取れない資格なわけで……

「だって、兄弟になる人と同じ街で暮らしているのに挨拶なしなんてなあ。」

「………今、『兄弟』っていいましたか？」

「だからあ！まだお付き合いはじめてばかりなんだからあ！」
「………今、『お付き合い』っていいましたか？」

間違いなく、目の前にいるこの二人は兄弟だ。

「………兄妹か（汗）」

眼光

どこかで会った気がしたのは、お兄さんは斉藤社長に面影が良く似ていたんだ。

そっくりと言う程ではないのだけれども、二人を同時に比べるのなら、やっぱり親子だ。

お嬢様と妹さんは母親に似ている。

だからお兄さんとお嬢様は、一目見ただけで兄弟なんて考え付かなかったんだ。

「今日、お兄さんのところにとまってもいいでしょ？」

「はじめからそのつもりなんだろ。」

付いてきただけにしては、やけに荷物が多かったからなあ。」

明日は金曜日だ。

しかも、今週末銀行は忙しくないとわかったから、お兄さんのところに泊まって、

金曜の夜デートのつもりなんだろうな……

お嬢様は、見かけによらず積極的な場合が多い。

まあ、そこがお嬢様の魅力なのかもしれないのだけれど。

「田原さんは今日何時までお仕事なの？」

「今日は格別何もないから、定時の5時だけ思っけど……」

「じゃ、今夜は三人で新年会やりましょうよ

お兄ちゃんがご馳走してくれるんだよね。」

それでは、とても参加できない……

「みどり、ご馳走はいいんだけど、僕が邪魔じゃないのかい？」

「スポンサーなら大歓迎よ」

それに、最近外で食べるご飯って大好きなの。

この娘も『籠の中の鳥』なのかもしれない……

僕はお嬢様を見ていると、かつて経験した記憶を思い出す時があるんだ。

こうして、予定になかったお兄さんとお嬢様、

それに僕を加えた3人だけの新年会を始めることになったんだ。

会場は某郷土料理のお店。

僕とお嬢様はお酒が飲めない。もしやお兄さんも……. と思いきや、

たしなむ程度は飲めるのだそうだ。

仕事がある為に、元日にお兄さんが不在であつた事はある話だ
と思うんだ。

でも、「兄がいる」なんて話は斎藤家の誰一人として口にしなかった。

銀行員は、顧客との対話で家族構成等プライベートな事は、

根掘り葉掘り聞くもんじゃないって心得ているんだ。

例えば、

「お子さんは幾つですか？」とか、

「旦那さんはお幾つですか？」なんかは絶対にダメな質問だ。

「子供は出来なかった」とか「子供は嫌いなんだ」

「旦那は亡くなりました」とか「離婚しました」なんて答えが返ってきたら、

セールストークは終わってしまうのだから。

ゆえに銀行員の性で、家族構成なんて基本は、全体の会話の中から
掌握するんだ。

『存在する』と確信した時点で、会話を始める事を常としている。だから、緊張しながらも斎藤家にお邪魔したときも、その基本には

忠実であつたわけで……
お兄さんの存在は、まったく僕のアンテナには感知できなかったんだ。

お酒が入ったあとも、お兄さんは普段と変わりなく、
良家のおぼっちゃんとか、弁護士先生等とは感じさせない気さくな
人柄だった。

お嬢様との会話も、どこにでもいるような仲の良い兄弟にしか見えない。

いらぬ不安だったのかと、お嬢様の笑顔をみながら僕も笑顔になる。
「ちよつと、失礼するね……」

お嬢様が席を立つ。化粧室に行くようだ。

お嬢様だけではなく女性が席を立つ場合は時間がかかる場合が多い。
いくら気さくな人柄と言えど、今日はじめてあつた人と、

二人だけで時間を過ごすのは窮屈なんだ。

なにを話せばよいやらと困るはずだったのに、

そんな事はどうでもよくなる事が待っていたんだ。

「……田原さん、富原支店は何年目ですか？」

「ちょうど1年になりましたが……」

「そうですか……間もなく私は田原さんともう一度お会いすることになると思います。」

銀行員のアンテナが受信していたものはこれだった。

次に会うとは、銀行員の田原聡と会うつて事だと直感する。

そしてその内容は決して銀行に対して有意義ではない予感がしたんだ。

お兄さんは、お嬢様が席を立つのを待っていた。

その事だけでも十分にそれを証明しているのだから。

「……………察するに仕事関係の話ですね。」

「ええ、この場ではお話しすることは出来ませんが……」

「ご迷惑は相当かかるかと思えます……………」

「もちろん、お兄さんの仕事柄当然だと思います。」

弁護士が銀行に来る事はろくな事がない。

妹の見合い相手が、あんしん銀行富原支店の行員だと聞いたお兄さんは、

僕が見合い相手というより、当該銀行員との理由で会いに来たのかもしれない。

眼鏡越しのお兄さんの眼差しが鋭く光るのを僕は感じてしまったんだ。

……………お兄さんも、ろくな事がない土産を携えて銀行に来るのだろうか？

「僕の富原支店在籍年数と関係があるのでしょうか……………」

その質問はの答えは、お嬢様のお帰りにより聞く事が出来なかった。

「あーっ！みどりのいない間に、悪口言ってたでしょう？」

「えっ、なんでわかったの？」

「なんか、二人で真剣に話してるようなんだもの。」

お兄ちゃんはいつも私を馬鹿にするんだから！」

もうそこには、弁護士齋藤真治の眼光はなかったんだ。

あるのは、やさしい兄の眼差しだけだ。

間もなく、あの鋭い刃をもって僕の前に現れるとの話は本当だろう。でも、僕個人への訪問でない事は理解できたんだ。

いくらなんでも妹を出しに使うにはあまりにも二人は仲が良いし、僕がそうであるように、家族の事は喧嘩をすることはあっても裏切る事は出来ない。

その事について、お兄さんも同じであると確信できた。

「みどり、今日は俺の家じゃなくて田原さん所泊まってもいいぞ。親父達には内緒にしてあげるからさ。」

「・・・・・・・・・・なんてこと言っのよ！馬鹿ぁ！！！」

・・・・・・・・・・今日は勘弁してください（泣）

バレンタイン

その後、お兄さんが銀行に現れる事がなく1ヶ月が過ぎていった。僕とお嬢様の関係は、週末にデートが繰り返されている程度で、恋人に至るまでの発展はなかったんだ。

遠藤レポートを知らないお嬢様の事を考えれば、

このまま関係を深めていいか、迷っている部分が僕にはある。

・・・これは、罪悪感だ。

僕が悪い事をしてきたのかというと、自信を持って否と言える。

だから、お嬢様が知らないまま秘密として存在し続ける『僕の過去』に、

はがゆくもあり、苛立ちもする。

それだけ、僕の中では、お嬢様が大切な存在になっているんだ。

遠藤レポートの件は、「知るべきではない」と社長から釘を刺されている。

それがなければ、僕はとくに過去についての話はしているに違いなかった。

事実を知って、傷つくお嬢様を見たい訳はないのだから・・・

2月14日水曜日

今日はバレンタインデーだ。

ケーキとは違って、VIP菓子店よりご愛顧を願われる事が無い。

そのことにはちよつとだけ嬉しいのだけでも、

義理で貰うチョコレートの中には、とんでもないものが混じっている場合もあるんだ。

「田原代理、メール便届いてます・・・」

社内メール便にて小包が届く。

みなれた文字はお局様こと大木代理からだ。

キタ

(。 。)

!!!!!!

「……………今年も来たか。」

当然チヨコレートなのだが、彼女の場合、

『義理チヨコ』ではなく全てが『本命チヨコ』である事が恐ろしい。しかも、元本保証のローリスクハイリターン投資信託の意味合もある。

信託期間は1カ月、間違いなく償還される。

資金回収係数は『3倍』と計画されているのだとか……………(年利3600%)

バレンタインデーがこれほどの恐怖を僕にもたらす様になったのは、いつの事からだろう。

新軒先開拓によって、今年も新たな犠牲者が出ているとの事。

ホワイトデーにお返しやらないと、取立てにやってくるとの噂だ。

(おいおい…………)

まあ、『兄貴』にしてみれば、年賀状と同じく『生きている証』だからなあ。(失礼)

……………今年のお返しは、文鎮にもなる羊羹でもおくるか。(世話になっさたのは間違いない)

支店の女の子達からもチヨコレートは貰うんだ。

お返しは下っ端行員が、男性陣分として、まとめて買いに行くんだけれど、

これが担当行員によって当たり外れあるらしい…………

去年のバレンタインは、下っ端行員1号こと、野が準備しただけで、

よりによって『勝負パンツ』を送ってしまった。かなり際どいのを…………

チロルチョコ2個添えて……

しかも、全員同じではなく、野の感性でそれぞれに選んでくれたのだから恐ろしい（汗）

まあ、冗談で済めばいいんだけど、銀行窓口の女性は『鉄の女』が多いのだから……

長沼さんなら酒の席で笑ってくれるだろうけど、

富原支店の女性陣では通用しないとなんで気がつかないのだろうか？

去年はその後1週間、「おはよう……」と挨拶するだけで、

「……セクハラです」しか返事してもらえなかった（涙）

……今年は僕が準備しよう。

羊羹でいいか……（芸もやる気も無い……）

そして僕のアパートにも宅配便の荷物が届いていたんだ。

帰宅した時、宅配便の不在通知がポストにあったので連絡してみる。

「ただいまから荷物をお届けします。」

「すいません、遅い時間になってしまいました……」

「それではただ今からお届けに伺います。」

本日お荷物は2つお預かりしております。」

……2つ？

ひとつはお嬢様からチョコレートなんじゃないかって思いつくんだけど、

もうひとつの荷物って誰からなんだろう？

ピンポ　　ン……

今日の荷物はやっぱりチョコレートだよな、

宅配のお兄さんは小さい紙袋2つを配達してくれたんだ。

『斎藤みどり』

ひとつはお嬢様からだ。これはチョコレートで間違いない。
そしてもうひとつは誰からなんだろう……

『山川みどり』

差出人の名前に、僕の時間は再び止まってしまっただ。

確かめる日

山川みどり・・・・・・・・・・！！

間違いなく彼女の筆跡なんだ。

大木代理の筆跡を忘れる事があっても、彼女のそれは忘れるはずもない。

なにかトラブルでもあったのだろうか？

お嬢様の荷物よりも早く開封してしまう。

そして中には、チョコレートと手紙が1通入っていたんだ・・・・・・・・

いろいろご心配おかけしたようでごめんなさい。

みどり

シンプルな封筒に入っていた便箋には、短い文でそう書いてあった。たった一行なのに、なんでこんなに胸が熱くなるのだろう。

思えば、銀行員田原聡は、彼女との出会いから始まったのだ。

自信が無く責任も無かったダメ人間から、

今の僕に導いてくれたのは、彼女の存在に他ならないんだ。

いままでもそうであったように、これからも力になれる事があれば、

僕は迷わず彼女の元に駆けつけるのだろう・・・・

でもその思いが、お嬢様への罪悪感そのものでもあるんだ。

バレンタインという日に届いた小包は、きっかけに過ぎなかったと

僕は思う。

たった1行しか書いていないメッセージも、それ以上の詳細を伝えれば、

僕がもつと苦しくなる事を『みどり』は理解しているからだ。

鈴木建設に就職が決まった事は、加藤先輩から聞いていた。

そして、義理堅い社長の事だ。

あんしん銀行の田原と加藤が心配してくれた旨を彼女に伝えたのだらう。

だからこの小包は、就職に口添えした事と、

僕が相変わらず心配している事へのメッセージ。

世界で一番短く・・・

そして悲しいラブレターなんだね・・・

しばらく考える事を止めてしまふ。

考えれば考えるほどに目の前が見えなくなるから。

そうやって何時間が経過したとき、お嬢様からの電話がなった。
・・・とても、出れないや。

なかなか鳴り止まない電話の音が部屋の中に響いている。

「・・・・・・・・はい、田原です。」

コールの回数が相手の気持ちを伝えてくるんだ・・・・・・・・

「ごめんなさい、寝てた？」

宅配便って配達完了ってメールくるんだ

だから、帰つてると思つて・・・・・・・・ごめんね。」

なんで、お嬢様が謝らなくちゃならないんだろう。

そのくらい電話越しの声が、今の僕を表現しているんだろうか。

それに、お嬢様からの小包は未開封のままなんだけれど、どう説明すればいいのか・・・

「ごめん、お風呂入ってたんだ。」

つきたくも無い嘘をつく。

「荷物見た？予告しなかったから今日中に渡せるか不安だったの・・・

・・・」

「ごめんごめん、今見るところだよ・・・」
包みを空けて僕はまた悲しくなった。

『大好き』

手作りのチョコレートには、真ん中に大きくその文字が飾られている。

これを僕に見てもらいたかったと言うお嬢様の気持ちは、今の僕には辛かったんだ。

バレンタインデーは愛を確かめる日。

いかに相手を理解し、相手から理解してもらえているかわかるんだ・・・

ホワイトデー

「大好き」

そう言ってくれる人の事を、僕はあまりにも知らなすぎる。そんな不安を抱えた毎日は、早いようであり遅いようであり……。時間の感覚が狂ってしまうんじゃないかってほど、後味の悪いものだった。

相手を理解しようと思えるけれども、努力できない。そんないい加減な僕に、僕自身が怒りを感じさえもする。そして1ヵ月後、大木代理の投資信託に償還日が来た。3倍返しの日。恐怖と戦慄のホワイトデー……

「あら、田原ちゃん！お返しなんて良かったのに」
「……嘘つき！（；）！！（心の叫び）」

大木代理が朝からハイテンションな電話が入る。今年は迷った挙句、マウスにしたんだ。

食べ物ほめっぽう五月蠅いが、機械にはまるでダメな大木代理。最近自宅のマウスがくたびれているとの情報を入手した私。

機械モノでは値段が分からないだろうとの下心から、ラグビーボール型の光学式マウスを送ったんだ。

しかも、ワイヤレス。

馬鹿でも設定できる……。失礼。

誰でも設定できるようにドライバーは不要だ。

案の定、値段的には高かったのに、連絡も来なかった去年と変わって、

半分以上の値段なのにお礼の電話が来た。

「無事、償還して頂けたようだな……。これで恐怖から開放さ

れる（冷汗）」

問題の1つが解決された。

山川みどりには、なにも連絡はしなかったんだ。

いろいろな思いはあるのだけれども、それを行動に移しては、僕だけではなく、彼女自身が辛い思いをする。

それが、この一ヶ月考え抜いた末に出した僕の答えなんだ。

山川みどりだけではなく、

太田みどりもそうなんだ。

嫌いになって別れた訳ではない人を、どうして忘れられるのだろうか。

あの思いは、今後も僕の中に存在し続けるんだ。

嫌われた末の別れであれば、こんな思いはしなかったのだろうけれども……

今夜、酒川市のお嬢様に逢う事になっているんだ。

食事に誘ったのは僕のほうからだった。

決算内に消化しなくてはいけない有給も残っていたわけで……

平日なんだけれども、酒川まで出かける事にしたんだ。

お嬢様には、ホワイトデーにプレゼントできるものは、

なかなか思い浮かばなかった。

だから、格別のものを準備なんてしていやしない。

この1ヶ月考えた答えの1つを伝えようと心に決めていたのだから。

「みどり達のことを伝えよう……」

これが僕の答えなんだ。

山川みどりが、バレンタインを理由に連絡をくれたように、僕もホワイトデーを口実としてみどり達のことを伝えるのはどうなのかとも考えたけれど、

これ以上、罪悪感を感じている限り、お嬢様を理解する事なんて出来なかった。

いや、出来ないんじゃないで、してはいけないが正解なんだ。

そして、僕とお嬢様が初めて会った場所、

見合い会場であったホテルのレストランで待ち合わせをした。

「ごめん、待たせちゃったね・・・」

予定時刻よりも10分早く着いたのだけれども、

お嬢様は待ち合わせ場所で、僕が来るのを待っていたんだ。

「ううん、今来たところなの。」

冷めたコーヒーからお嬢様の温かさが感じられる。

だから、決断したんだ。

「・・・・・・・・ちよつと、聞いて欲しい話があるんだ。」

オーダーの前に話をしなければ、僕の決意は崩れてしまうかもしれない。

お嬢様から感じられる優しさや気遣いは、みどり達と変わらなかったのだから。

「みどりさんに話をしていない事があるんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

瞳の奥で不安の色がうかがえる。

でも、それを今それ以上に感じてはいけない。

「僕は以前・・・・・・・・」

そう話し始めた瞬間、お嬢様が僕の会話を遮るんだ。

「私は・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「私は、田原さんの事が大好きなんだ・・・」

やさしくて、勇気があって、頼りになる田原さんが大好きなんだ・

・・・」

「・・・・・・・・・・」

「だから、『みどりさん達』を愛した・・・そんな田原さんを全部愛したいの・・・」

みどりさん達を愛してくれたように私じゃダメなのかな・・・

」

みどりさん達・・・・・・・・

そういえば、遠藤レポートを読んでいなかったはずのお嬢様は、何故か教えていない僕のメールアドレスを知ってた事あったな・・・

・

社長が『レポートを教えていない』と言ったのが真実だとすれば、お嬢様は、遠藤秘書から同様のレポートを受け取っていた可能性はあった訳で・・・

その事に気がつかなかった僕は、なんて愚かだったのだろう。

詳細な経緯を知らなければ、とても『僕』と『みどり』達を理解する事なんて出来ない。

社長もお嬢様も、レポートだけで僕を見合い相手として受け入れてくれたのであれば、

いかに遠藤秘書の報告が詳細であり、親密なフォローがあったかが伺えたんだ。

僕が罪悪感を抱いていることは、お嬢様に見ればお見通しだったんだね。

その事は、一方的な独りよがりであって、お嬢様の『理解』なんて気がつきもしなかった。

それでいて、僕を好きだといってくれたお嬢様・・・・・・・・

僕は胸を詰まらせる事しか出来なかったんだ。

「食事にしようか……」

その日から、僕はお嬢様の事を「みどり」と呼ぶ事になったんだ。

推定無罪

3月15日木曜日

春満開とはいえないけれど、日に日に暖かくなっていく富原の3月。僕とみどりの第三章を祝福してくれている様な青空が広がっているんだ。

昨日は銀行を休んでいる。

もちろん、「有給消化」という正式な休暇だから、かつての「ズル休み」とは状況が違う。

朝銀行に行ったら裁判が待っているなんて不安も無かったわけで・・・でも、僕をある事実が待っていてくれたんだ。

「役席者会議をするから、役席は全員会議室へ・・・」

朝一からの役席者会議で大抵トラブルや本社からの重要な通達がある場合だ。

3月に監督庁が入るわけないし・・・昨日、内部検査でもあったのだろうか？

そんな程度しか、朝一番で行われる会議の議題は、思いつかなかった。

『受任通知書』

昨日、弁護士名で銀行宛に来たいわゆる「倒産予告状」だ。

法的手続きの開始をする為の予告連絡なのだけでも、

最近の銀行業界では、この手の話は良くあることなんだ。

今回の債務者は大口ではない取引先であり、僕にとっては「またか・・・」

程度にしか思えない出来事でもあるんだけれども・・・

受任者は誰なのだろう。

【横田大村合同法律事務所 弁護士 齋藤真治】

キタ

(。 。)

!!!!

……ついにお兄さんの予告が現実のものとなった。
どんな内容なのかは、予想はしていたんだ。

銀行で弁護士の名前を聞くときは、債務整理に関係する事がほとんどなのだから。

そして、疑問もあつたんだ。

法的手続きの受任通知って、ほとんどの場合、債務整理の相談を行
つてから

直ちに弁護士名で金融機関に連される事が多い。

お兄さんからこれを匂わせる話があつたのは今年の1月なのだから、
2ヶ月以上の準備期間を要した事になる。

月々の返済に窮している債務者の状況を考えれば、非常に長い時間
をかけたものだ……

なんてことを頭の中かに思い浮かべてしまうのだ。

「昨日、A社が法的続き開始するという通知書が届いたわけだが・
・・」

それは僕以外の役席は全員が知っているわけで……

「昨夜、保証人宛保証意思の確認を行ったところ、代位弁済の意思
が無かった。」

……突然の連絡では無理も無いな。

保証人を付保するといつても、債務者は保証人に、「名前を貸すだ
けでいい」とか、

「迷惑はかからないようにする」なんて事を言うのだ。

だから、甘い罠にかかる人は多い。

銀行も、保証人が【保証】を認識している事の確認はとても重要視しており、

そんな罫がある事も説明はしているのだけれども……

本件の保証人は、『極度根保証契約の保証人』だった。

つまり、1千万円の保証をしますと契約した場合、

以後債務者が1千万円の保証枠以内ならば保証人の署名がなくても、融資を保証した状態で融資が受けられる。

いわば債務者にも銀行にも都合の良い『保証』なんだ。

「この保証人と最終の保証意思確認しているのは……田原代理だ。」

……えっ、そうだったっけ？

極度根保証契約は、年に一度保証人に対しての意思確認を義務付けられている。

もつとも、自主ルールであるのだけれども……

現在、この手の保証は新規受付していないんだ。

以前から存在する契約のみ継続されている。

サラ金等のトラブルで、極度根保証契約は問題であると指摘された事と、

平成14年の判例から、裁判沙汰になった場合、少なからず銀行が負けるような

ケースが見受けられるようになったのが原因なのだろう。

転職したばかりの頃、確かに僕が保証人と面接したと記録されている。

初めて会う人なのだから、間違いなく保証人の下に出向いただろうし、

会ってもいないのに、面接した事にしようなんて事は、銀行員としてあるまじき行為である。

でも、事務的に対応しなくてはいけない事も多いわけで……

指摘されてやつと記憶がよみがえってくるんだ。

「先方は、田原代理と面接した事実はないと主張している……………」

融資課長が、重々しく報告をしてくれたんだ。

そんな馬鹿なと言いたい気持ちであるけど、

銀行の同僚達は全員が僕のことを信頼している事を、その場の空気が教えてくれている。

先方の主張が正しくないといった認識なんだ。

「裁判をかけると言っているんだが……………」

もちろん、負ける訳ないと思うけど、なんか引つかかるな……………
相手は弁護士とかに知恵を授けられたような印象なんだよなあ。」

融資課長の重々しい説明は続いていく。

「横田大村合同法律事務所ってどんな弁護士なんだっけ？」

……………まさか、担当は彼女の兄かもしれないなんて言える訳が無い。

債務整理だけならば予想はしていたけれども、

保証人の代位弁済否認なんて筋書きが、お兄さんの計画であれば、
この先僕は、法廷でお兄さんに対決しなければならいんだ。

保証人に対する最終面接者は僕なのだから……………

「課長、僕は推定無罪です……………」

被疑者、田原聡が誕生した。（おいおい……………）

対峙

まだ裁判と決まったわけじゃないのだけれども、

僕の心のざわめきは、簡単に治まる事が無かったんだ。

お嬢様こと「みどり」と僕は、ようやくお互いを理解し始めるスタートを切ったばかり。

今の状態では、みどりの方がずっと僕を理解してくれているのだし、はやく僕も同じくらいの理解を積み上げなければいけない。

しかし、こんな最初からお兄さんとの対峙なんてのは予想外であった訳で……

思わぬ火種にどうしたら良いものかと、またも悩んでしまうんだ。

この対峙は、さすがの遠藤秘書だって把握できないだろう。

銀行の立場としても、弁護士との立場としても、

お互いに守秘義務によって、守られている情報なのだから……

「みどりやお父さんがこれを知ったらどう思うかな……」

僕の素性を聞いて、一刻も早く会いたかったというお兄さんの真意は、

どのようなものだったのだろう。

「まずは、先方の意思を再確認しよう。」

支店長の一言で、1時間程続いた役員会議は終わった。

午後からは、あんしん銀行の各支店取引先の経営者を集めたセミナーが開催される。

本社近くのホテルで、500名を超える取引先が集まり、財界著名人や経済評論家を招いた講演会と懇親会なる酒宴があるんだ。

まあ、講演はおまけで、懇親会がメインと思っていい企画なんだけ

れども……

このセミナーは、銀行の檀家を接待する意味合いが強いので、毎年欠かさず行われている。

富原支店からも主要取引先4名の方と支店長と僕の計6名が参加するんだ。

午前10時には出発しなくてはいけないので、会議後あわただしく出かける事になった。

僕は、このセミナーに今回が初めての参加だった。

地元財界では著名な方が多く参加してくださるので、ビジネスチャンスの場としても、

注目を集める企画である。参加したいと申し出くださる方も多いのだけれども、

この会に参加できる企業は、優良と呼ばれる企業経営者だけであり、お呼びがかかる事は、

地元財界では栄誉な事であるらしい。

……金の匂いがする（危険なほい）

銀行員のアンテナが爆発しそうな会場だ。

さすがの僕もVIPの巣窟には閉口したんだ。

「おつ、田原君。頑張っているかい？」

不意に後から呼び止められる。

以前勤務していた大町支店・湯葉沢支店の取引先の方も参加しているのだから、

もちろん何人かの顔見知りはいのだけれども、いずれもVIP。心が休まる事は無いんだ。

急いで振り返り、銀行員の仮面で三種の神器『笑顔』を造る。

「ご無沙汰いたしております……あつ！」

みどりのお父さん事、斎藤社長がそこにいたんだ。

つい数時間前まで、お兄さんのことで頭がいっぱいだっただ訳で・・・

みどりとの件もあるし、なんだか今は会うのが辛かったんだ。

「今朝のみどりは機嫌よかったから、昨日のデートはうまく行ったようだね・・・」

「ご存知でしたか。失礼しました・・・」

みどりと家族の間では、親密な情報交換がなされている。

だから、昨日の僕の告白を社長が聞いているのならば、どのように思われるかが心配だった。

「娘には知らせないように・・・」

社長からのお願いを僕は聞き入れなかったことになるのだから。

結果的にみどりはその事を知っていたけど、「娘は知らない」と言った社長の手前、

「みどりは知ってましたよ」なんて、言える訳がない。

昨日デートする事までは報告しているようだが、

その時の内容まで報告しているか否かは予想できない。

だから、社長のお願いを結果的に聞き入れなかった事に、

謝りたい気持ちがあるんだけど・・・

講演会の開始がアナウンスされ、社長とその場は別れる事になったんだ。

「じゃ、懇親会でまた会おう・・・」

いつ、言えなかった。（汗）

・・・懇親会の席で、頭取の前に連行される可能性があるな。（ぞくつ・・・）

女神？

講演会は、某有名スポーツコーチの「人の育て方」なるセミナーだった。

銀行の講演会では、経済界の著名人が多いので、この手の話の方がうけが良い。

つまらない話だと、この後の懇親会が盛り上がらないので、銀行としては助かるんだ。

総勢500名を超える懇親会は圧巻だ。

本社からもコンパニオン替わりの女性行員が応援にやってきている。僕のような『男芸者』も合わせれば、会場にははたして何人いるかとやら……

「またあおう」と言った、斎藤社長は果たしてどこにいるものやら。とりあえず、きよろきよる会場を彷徨うわたくし。

「田原君じゃないか！」

……今度は誰だ？

その人を見た瞬間、今日はなんてとんでも無いところに来てしまったのだと、

後悔してしまうんだ。

「みどり君の件では心配かけたね。」

鈴木建設の社長だった。

鈴木設備は安田さんが相変わらず勤めている為、

鈴木建設本社にて山川みどりを雇用してくれているんだ。

「こちらこそ、ご配慮ありがとうございました……」

いろいろな思いはあるのだけれども、僕は彼女の為にも振り返らない。

そう決意しているし、決意は翻る事が無いのだけれども……

思いがけなく鈴木社長と会ってしまつと、僕の運命の日を思い出さずにはいられなくなる。

「田原君、探した探した……」

そんな状況の中、話は絡み合うかの如く二人の社長を引き合わせてしまふんだ。

斎藤社長と、鈴木社長のご対面……（；）！！

……社長さん、お二人とも良くある『苗字』ですね。（混乱）

なんて言っている場合ではない！

なんとかしなくては……

そんな感じで慌てている僕に救いの神は予告もなくやってきた。

「田原さん、私のことをご紹介してください。」

長沼真央登場！！！！

『郡』を敵にした女。

鉄の胃袋と黄金の肝臓をもつ女。

そして、……ナイス、コンパニオン（失礼）

VIPの巣窟と化したこのセミナー会場。

リテール推進担当としては、よだれが出るほどの……失礼、願っても無いセールスチャンスなのだ。

当然ながら、この場所でのセールスなんて彼女たちも考えてはいない。

ここで得る「人脈」はなりよりの財産であり、後の見込み先となるのだ。

面識がある場合と無い場合で、アポイントの成功率は全く違ってくるし、

VIP大集合というチャンスは、年に一度この企画だけなんだ。

当然、長沼さんの部署は総出で接待となるわけで……

……さすが、今日のスカートの丈はいつもより短いな。（失礼）

「御足」で殺すのもテクニクか。（おいおい）

思いがけない救いの女神の登場で、

両社長と僕と「みどり」についての議論にならなかったんだ。

僕にとって、両社長と僕の三人だけでは間が持たなかったから、

なんてタイミングで話題をそらしてくれたのかつてありがたかった。

その後、しばらく両社長と長沼さんの「酒宴」は続いたんだけど……

・

「ちょっと、田原さん。ビールないわよお！」

「はい、只今……」（汗）

接待とは、お客様へのサービス提供であり、

長沼さんを飲ませるものではないのだけれども……

すつかり、出来上がっている御三方。

僕は専属のウェ이터になっているし……（涙）

「長沼さん、面白いねえ。ウチの息子の嫁にどうだい？」

斎藤社長が上機嫌で長沼さんを褒めるんだ。

「ふふつ、斎藤社長の娘になれるなんて光栄ですわ」

……義兄弟になるとしたら、僕はコエー（つまらん……）

事情の知らない長沼さん。セールストークも全快だ。

「おかわりおねがいしま す」

……社長達の飲み物なら依存は無い。

でも、お持ちしたビール連続4杯すべて長沼さんが飲んでいる。

・・・・・・・・・・どっちが接待なんだ（汗）

長沼真央。

心臓は剛毛だ。

義兄弟

その後、両社長はそれぞれ席を立っていったんだ。

なんとか長沼さんに救われて、その場をしのげたけれども……

「息子の嫁にかあ……」

斎藤社長の口から、初めて「息子」とお兄さんの事が語られた。

正月に斎藤家にお邪魔した際、社長は長男がいるなんて事は一切話さなかった。

みどりは姉妹とばかり思っていた僕は、田原家新年会にて遠藤秘書から、

この見合いは婿入りを前提としていないって事を確認していたんだ。僕は次男だから、婿入りに支障はないのだけでも、

できれば窮屈な生活は銀行の中だけで済ませたい僕にとって、良家であろうが普通の家庭であろうが、婿入りの考えには賛成しなかった訳で……

斎藤社長がお兄さんを後継と考えているのだろうか……
あんなに優秀な息子さんなんだ。

僕と親父のような関係なんてありえないよな。

これから僕とあんしん銀行と対峙する可能性がるのだ。

その事実を知る事になれば、斎藤社長の心中は複雑なものになるとだろう。

可能性が現実のものになるのならば、僕が銀行を去るほうが、平穏であるのかもしれない……

……でも、つぶしの効かない銀行員。
また「みどり」をどう食わせるか悩む事になるな。

「田原さん、ビールおねがいしますう．．．」
長沼さんが新たな顧客をゲットしている。

．．．．．まだ飲むのか。（汗）

「で、今度の彼女は、斎藤社長さんの娘さんなの？」
（；）！！

唐突に長沼さんから指摘を受ける。

さつき、斎藤社長から聞いたのだろうか？

「．．．．．お見合いしたんだよ。」

けれども、まだお付き合いはじめてばかりだから．．．．．」

「あら、結婚が決まったって社長言ってたわよ？」

「よっぱらってたんだろ？まだ何回かデートした程度なんだ．．．

」

なんでそういうことを長沼さんに言うかな、社長は．．．

隣にいた鈴木社長の耳に入ったのなら、山川みどりにだって、

情報は伝わってしまう可能性があるわけで．．．．

悪い事をしているのでは無いけれども、複雑な胸中である事には違いないのだから。

「まだその程度の関係なの？」

「まだその程度の関係なんだよ！」

ちよつと不満そうな長沼さん。僕のことを心配してくれていたのだ
ろうか．．．．．

なんだかんだ言っても、僕たちは良きライバルであり、頼れる同僚
でもあるのだ。

「せっかく玉の輿になれるチャンスだと思ったのに．．．．」

「……息子嫁に」って、本気か！！！！
僕に口添えさせようとするなんて魂胆だったのか？

「弁護士って憧れるじゃないの。」

田原さんが義理の『弟』になっただって我慢できるわ……」

「……おい、俺の方が年上だぞ（怒）」

長沼真央。

その野望は果てしない……

運命の日

懇親会も中締めにさしかかろうとする頃、

人込みの向こうに手招きしている人がいるんだ。

「・・・・・・・・中村専務（；）！！」

七日間戦争の時お世話になって以来、ろくに挨拶もしていなかった。

「なんででしょうか？専務・・・・・・・・」

「さっき聞いたばかりなんだけど、田原代理お見合いしたんだって？」

キタ（；）！！！！

誰から聞いたか情報源を考えるまでも無い・・・・・・・・

「まだ銀行の人達には報告してませんでした・・・・・・・・申し訳ありません・・・・・・・・」

とにかくこれは怒られる予感がする。

専務の目は真剣なんだから・・・・・・・・

取引先のお嬢さんとしても、お見合いはプライベートな問題なんだ。

いちいち銀行に報告するほどの事なのだろうか？

そんなこと言ったら大木代理なんて毎月報告しなくてはいけないぞ（失礼）

「そうか、なら今から行くぞ。」

「・・・・・・・・どこにですか？」

「斎藤社長とこの縁談なんだから、頭取に報告しなくちゃまずいだら・・・・・・・・」

『縁談』って、お見合いしたのかって聞かれただけじゃないの。(;)!!

「頭取、ちょっと失礼します・・・」

専務が僕の首根っこを掴んで頭取の前に連行して行った。

斎藤社長から突き出されるんじゃないかって心配していたけど、まさか専務からそうされるなんて思ってもみなかったんだ。

「田原君、お父さんにはお世話になってるよ・・・」

やっぱりそこから話は始まるわけだな。

頭取は常に本店にいるわけで・・・

支店単位の営業店では、ビデオニュースでなきゃ顔さえ見る事もない。

「頭取」って言葉は、「音頭取り」の略語であるんだ。

英語にすると「PRESIDENT」

大統領のイメージが強いけど、「最高責任者」って意味なんだ。

うちの場合は、まさにプレジデントな訳で・・・

「斎藤社長から聞いたよ、お嬢さんとお見合いしたそうだね・・・」

「すみません。報告が遅れました・・・」

「いやいや、大変良い話じゃないの。」

斎藤社長も『いい後継者が出来た』って喜んでたよ・・・」

『後継者!!!!!!（絶句）』

順調に行ったとしても、僕はみどりを嫁に貰うつもりだったが、バランス的には、僕が嫁ぐと考えられてもおかしくは無い・・・

・・・（涙）

銀行内に多くの誤解と行き過ぎた情報を残しながら、斎藤社長や長沼さんから振り回されっぱなしだった懇親会が終わっ

たんだ。

酒の飲まない僕は、その日のうちに富原から来たお客さんと支店長をのせて車で帰る。

会場に宿泊するお客も多く、この日の夜は、

どこに行ってもあんしん銀行ご一同様なのだそうだ。

斎藤社長もその口で、酒川中央支店関係者とか、本店の偉い人達と飲みに行くらしい。

頼むから、これ以上僕のことをかき回さないでね……

斎藤社長とお兄さんの関係にちつよと不安を感じていたのだけれども、

これでその不安が確信に変わった気がするんだ……

「後継者」

息子を差し置いてまで考えているのは、お世辞ではなく本気であると、

銀行員のアンテナは受信しているのだから。

そして、その日の夜遅くにみどりから電話が来た。

「今日、お父さんと一緒だった？」

「ああ、お見合いの事、宣伝してくれたから慌てちつたよ……」

「

「ごめんね、お父さんには田原さんに迷惑かけるなってあれほど言っただけど……」

斎藤家で、どれだけお父さんにみどりが牽制したかが分かるんだ。社長だって悪気があるわけじゃないって事も、僕は十分わかってい

るし。

ただ、斎藤家は揃って気が早い気もしないわけではないが……

「明日は金曜日でしょ。週末は仕事の予定とかどうなの？」

「特になにも入ってないけど……」

ホワイトデーから初めての週末だ。

みどりは心待ちにしてくれているんだ。

僕の答えはそれしかなかったわけで……

「どこか出かけるかい？」

「嬉しい　どこがいいかなあ……」

限り終わりなんて無いと感じているんだ。

どんな障害があっても、ふたりなら乗越えられる。

これから二人で幾つもの思い出と理解を深めていく事に僕はためらいは無いんだ。

『みどり達』のことを理解してくれた『みどり』にそんな不安は必要が無いのだから。

僕達の物語は始まったばかりなのだけれども、この礎がある

「今週は泊まって来るからってお母さんに言っちゃった」

……気が早いのは遺伝だ。

そして、週末を迎える3月16日、金曜日。

僕にとって、みどりにとって……

良いことなのか、悪い事なのか……

おそらく最後であろう転機がやって来たんだ。

……ずいぶん早かった障害だ（汗）

背中を押す力

3月16日 金曜日

普段ならなんでもないはずの週末になるはずだったのに、僕はとっては驚愕の事実が伝えられたんだ。

【人事発令】

辞令

田原 聡

あんしん銀行本店人事課付 を命ずる

銀行 トレーニー派遣を命ずる

ガ (。°。;) () () () () () ()
° ;) (°。 ;) (°。°。 ;) () () () () ()
ン!!!!!!!!!!

出向命令が僕に下されたんだ。
大手銀行へのトレーニー派遣。
もつとも、外部の銀行に派遣される事はうちの銀行では栄誉な事なのだけれども……
出向先の銀行は東京にあるから、みどりとはさらに遠距離になるわけ……
それに、4月1日付の移動なのだから、僕に時間は多く残されてはいないんだ。

みどりに転勤を伝えなくてはいけない。
銀行員は職場と上司を選べない。

「いやあ、田原ちゃん。出世じゃないか！

都会では『ちよいわる親父』が流行っているから、
私が変わりに行きたかったよ……」

「……おとぼけ次長は相変わらずだ。

「流行ってるのは『ちよいわる』であつて、

次長みたいな『本当に悪い親父』はダメですよ……」
今日の僕に手加減は無い。

僕は夜まで待てずみどりに電話してしまつたんだ。

スタートと同時につまづいたマラソンランナーのような状況なのだ
から。

ぐずぐずしていると、全てが過ぎ去ってしまうような気がして落ち
着かなかった。

銀行にいる間、極力プライベートな事を考えたくは無かつたけど、
こんな日くらい、頭取だつて許してくれるだろう……

「あれ？めずらしいね、お昼に電話くれるのって……」

日中は、簡単なメールばかりの僕。

しかも、レスだつて夜になつたからばかりなのだから、

こんな昼下がりの連絡なんて、ろくな事じゃないのかつて、
みどりもそう考えている様だった。

「転勤になつたんだ……」

「どこになつたの？遠いところになつちやつたとか……」

「……東京なんだ」

「……」

「外部の銀行に出向しなくちゃいけなくなつたんだ。

あんしん銀行に戻るのは、半年先か、1年先か……

2年以上派遣される場合もあるらしいけど、まだ僕には詳細知ら
されて無くて……」

だから、僕はどうするのか。みどりに伝えなくちゃいけない訳で・
・
だから、僕はどうしたいか。みどりに伝えなくちゃいけない訳で・
・

「・・・・・・・・いいよ。問題ないから。」

「逢える回数は、絶対減ると思うから・・・・・・・・・・」
「そんなの関係ないよ・・・・・・・・」

銀行を去る。

転勤を拒絶する事は、即ち組織を辞する事。

後継の話が出たばかりだけど、それを当てにするなんて僕には出来ない事なんだ。

辞して尚、みどりの前に存在し続けるには、それなりの覚悟と努力と証がいる訳で・・・・

なにをしたいか、どうするのか・・・・

みどりを理解し続けるには何が最善なのか・・・・

考えれば考えるほど理性が遠ざかっていく。

でも、理屈で表現する事の出来ない力が僕の背中を押してくれる。

・・・・そうか、そうだったね。

ありがとう。

みどり。

「・・・・・・・・一緒に来てくれるかい？」

「・・・・・・・・・・うん。」

僕は銀行員であり続ける道を選んだ。

みどりにとっては、斎藤家からの巣立ちを意味している。

簡単な気持ちで「一緒に行こう」と言っただけではないんだ。

簡単な気持ちで「うん」と言っただけでないことも知っている。

その一言は言葉としては短いのだけれども、

愛としては深いものなんだ。

僕とみどりがお互いを理解し、理解しようとした結論であるのだから。

愛の別名は理解である。

僕はそう考えているんだ……

僕の物語

僕には、このような物語があったんです。

世の中の数多い恋物語からすれば、どこにでもあるつまらない恋話のひとつなんだろう。

僕が「みどり」との出した答えには、「みどり達」との物語が存在し、

その礎がどのようなものだったのか、僕の胸に刻み込んでおきたかった。

皆さんにも知って欲しかった……

「結婚が恋愛のゴール」なんて考えていた事もあったけど、いまの僕とみどりは、この日にゴールを果たしていると思っている。結婚よりも大切な「理解」というものを勝ち得たのだから。

4月から新しい生活が始まり、僕は東京に転居している。みどりも僕との生活の為、間もなく上京するんだ。

斎藤家の家族は、とりあえず僕とみどりの事は認めてくれたけど、お父さんとは話し合いは、今後も継続しなくてはいけない訳で……

「勉強してきなさい……」

僕達にはこんな言葉を贈ってくれたんだ。祝福であると信じている。

2007年も後半になった現在、物語に書き込んだ人達の近況を報

告しなくちゃいけない。

長沼真央。

4月から代理職に昇格して「室長代理」なる肩書きと責任がついた。現在、投信顧客開拓なる特命チームに参加して、あんしん銀行VIP達の

資産運用を担当している。現場の得意先係のリテール商品教育係も仕事になった様で、

彼女が乗る、銀行の黒い産ノトが営業店に近づいてくると、若い行員から『デスノート』と呼ばれて恐れられているらしい・・・

・（汗）

大木課長

お局様も4月から昇格した。ついに課長の肩書きとなったんだ。彼女の担当している支店では、積極的かつ親切な窓口作りを行った成果が認められ、

あんしん銀行の窓口モデル店に指定されたんだ。

さすが『兄貴』といった所。男前だ。

・・・・・・今年こそ見合いを成功させてもらいたいものだな。

太田家と太田みどり。

どの自治体も財政難であることは変わりが無い。

けれども、5カ年計画が軌道に乗り、文化財として保存される事が大筋決定したとの事。

遠藤秘書と・・・親父に感謝している所なんだ。

本編では触れていないけど、太田教授の妻、旧姓滝口裕子から電話が一度だけあったんだ。

みどりも元気に仕事をしていて、新しい店を任せられたのとか。債務についてもみどりについても心配しないで欲しいと涙ながらに

伝えられた。

僕が頑張り続ける事こそが、彼女とみどりと太田家の願いなのだと・

鈴木建設と山川みどり。

みどりを再雇用してくれたけど、長引く不況で心配していたけど、産業廃棄物部門が、リサイクル事業拡大で、グループ全体では大きく利益を出しているのだとか。みどりは近々リサイクル事業部に転籍になると聞こえてきた。

こちらも、全面的に鈴木社長がバックアップしてくれるようなのでひとまず安心。

元夫が出所したあとが心配ではあるのだけれども……

斎藤真治。

お兄さんとの対峙がついに始まってしまった。

守秘義務があるため、詳細を伝える事は出来ないけど、僕にとってみどりと斎藤家との、

不安の種になっていることは間違いないのだけれども……

この件が終わってからの、僕の対応が鍵になることだろう。

今はそれ以上考えないようにしているんだ。

遠藤秘書。

4月の統一地方選も自分の選挙のように忙しく駆けずり回っていた遠藤秘書。

この夏の参議院選挙で、ついに立候補したのだけれども……凄まじいまでの逆風が、彼の夢を叶える事を阻んでしまったんだ。また父の元、次のチャンスまで勉強をやり直すとの事。

彼に対しては、いろいろあったのだけれども、感謝の気持ちでいっぱいなんだ。

みどりに伝えてくれたレポートは、本当に僕の事を思ってたのだと

わかっている。

政治家として活躍できる日の事を、僕は心から願っています。

親父。

直ぐにとまではいかないけれども、凍りついた時間と同じくらいの時間をかけて、

理解していかうと思ってるんだ。

やっぱり、相手を知る事は大切だからね……

今回の転勤は、親父の圧力等が無かったって遠藤秘書は言っている。だから、これは僕に与えられた試練でありチャンスであり……そう思つて、銀行員としての職責を全力で果たして行かうと思ってるんだ。

親父も政治家としての職責を全力で果たしてくれる事を信じている。

田原聡。

なんとか新しい職場でもやっていけそうな自信が芽生え始めてきたんだ。

僕がダメになったら、悲しみは半分になるどころか倍になる覚悟で頑張っているんだ。

僕もみどりもそう簡単には戻れないのだからね。

住職が教えてくれた「一人居て喜ばは二人と思うべし」って教えは、忘れていない。

ただ、その考えに甘えて妥協してはいけなことが意図する事だと考えたからなんだ。

明日は、みどりが東京にやってくる。

いよいよ新しい生活がスタートするんだ。

皆さんにとっては普段と変わらない朝であるのだろうけど、僕とみどりにとっては特別な日である訳で……

こんな事を考えながら、銀行員、田原聡は皆さんと同じ空の下、生きています。

全てが解決していない状況でこの物語をひとまず終わりにする事をお許しください。

時が来れば、またご報告する事があるかもしれません。

それが何時なのかは、僕にもわからないのですか・・・・・・・・

相手を知る事は理解する事。

相手を理解できるならば愛は生まれます。

僕とみどりとの物語がそうであったように、

みなさんの物語でもそうであると僕は信じています。

田原 聡

僕の物語（後書き）

さて、この話には続編執筆中なんですけど、

ご意見ご感想頂戴できましたら、次作の参考になります。

よろしく願っています。

ご意見次第で田原聡の運命がかわっていく・・・はず（あやしい）

あとがき

あとがき

最後までお付き合いくださった、すべての皆さんに感謝いたします。

この物語は、昨年の12月に某巨大掲示板にて、1週間の間に書き込んだものを、記憶を頼りに書きなおしたものです。

その際、最終章としたのは本編の途中まででした。やはり掲示板という性質上、書き込みの独占が出来なかった事が、途中で書き込みを終了した原因のひとつです。

リアルタイムな感想や意見は、とても参考になりました。批判も当然有難いのですが、連続した掲示板へのあおり行為や、偽ハンドルによる書き込みにも対処できない点では、本編の投稿に支障をきたす結果になったからです。

掲示板でも、数多くの『支援』を頂戴したのですが、その数が多くなれば多くなるほど混乱も拡大したわけで……

別企画で再開すると予告して無期限の中断をしまして……はてどうしたものかと考えているところに、別小説投稿サイトを見つけてしまいました。

しかし、あまり反応が無かったため、当サイトに引越して来ました。いまのところまあ、反応無い点ではいっしょなんですけどね（笑）読者は倍以上のペースみたいなので満足はしていますが。

田原聡が実在していると仮定した場合、彼の決断ってどうだったの？ って意見が聞きたかったのが目的なんでしょうが、

だんだん調子に乗ってここまで長くなってしまった、
気まぐれ物語なんですね。

某掲示板への告知は、このサイトに合わないな・・・

なんて考えを持つようになりまして。

そちらには一切告知等していません。

あおる輩が大挙してきちゃったら、大変な事になりますからね。

(x。。) グォルア こんなのか。

だから、この物語が「小説」であるかと言われると「？」なんです。
時折出現した顔文字は、まさに掲示板の名残でありまして・・・

(;) !!

キタ (。。) !!!!!

で、わかりかと思いましたが(笑)

掲示板に書き込んで、本編で書き込んでない脱線ネタがすこし残っているの、

「銀行員の恋 番外編」とか「そしてそれから・・・」なんて企画
考えていますが、

私、気まぐれなものですからいつ開始なるかはあやしいですけど)

*、(ノ

評価くださいましたら、今後の参考になりますのでよろしくご指導
ください。

最後になりますが、お願いがあります。

この物語が、フィクションであるかノンフィクションであるかは、
掲示板時代も含めてノーコメントなんです。

その質問に答えることは出来ませんので、ご理解ください。

深夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373c/>

銀行員の恋

2010年10月17日02時18分発行